代の少年は、既に前段に縷述せる所の如く、競つて文章の練磨を事とし、其の作品を自己の愛讀せる雜誌に投寄して、偶々誌上に掲載され、文名を世に擧ぐることを以て、唯一の希望とし且至大の名譽と感じたもので、延いては作文投書の隆盛を促す因ともなつた。

かゝる情勢にあることゝて、各雜誌に於ける少年の投書文は連日夥しき數に上り、隨つて限ある紙面を以てしては、到底其の千分の一、若しくは萬分の一をも掲載すること難く、他は悉く沒書の悲運に遭遇する現狀であつた。故にこれが緩和の手段を講ずるは、雜誌經營上にも、最も緊要なる一問題とせられるに至つた。

卽ち、「少年園」も、「小國民」も、また「幼年雜誌」も、それ〴〵の手段方法によつて、これ等の少年投書文を適當に處理し、投書家の滿足を求むると同時に、誌運の發展を庶幾するに汲々たるものがあつた。此の結果、少年園が「少年文庫」を創め、「小國民」が其の分身として、獨立單行の「紅顏子」を發行し、また「幼年雜誌」が、「日本全國小學生徒筆戰場」を創刊して、遍く少年文を收容せる如き、實に此の現れに外ならなかつた。而もこれ等の計畫は、投書家の希望を充たすに足り、隨つて何れも相當の成果を收め、文才ある多くの少年を敎養し、且奮起せしめし一事は、亦恐らく今人の想像外であらう。

さて、右に擧げたる三種のうち、最も早く世に現はれたのは、やはり少年園の「少年文庫」であつた。「少年文庫」は、啻に普通文のみに止まらず、苟くも少年の手に成れる一切の作品、例へば記事論說、書簡文以外、學藝、小說、雜錄に至るまで、極めて廣範圍にこれを網羅して、期を定めず發行することゝした。

少年文庫表紙（改正後）

試みに當時の「出版月評」の記事に徵すれば、「少年文庫は、全國の中學小學等の生徒諸子の詩文九十餘篇を集めて、以て一書と爲したる者なり、第一輯の目次は、論說、記事、傳記、書牘、雜題、詩、美文等なり、其間に漢文あり新體詩あれども、最も多きは假名交りの詩文とす、皆金玉の文字、之を讀めば驚心動魄、恰も勁敵に當るが如き想ひあり、孔子曰、後生可畏、今諸子の詩文を讀むに其の畏るべきもの必ずしも後生を俟たず、驚くべきかな敷ずべきかな。諸子の詩文中間々編者の評言を附したるものあり、評言を附したるは甚だ好し、只其の少きを憾むのみ」云々と紹介して、荐

りに讃辭を送つてゐる。

この「少年文庫」は、第一輯第二輯と、矢繼早に發行を續け、共に二三千部を賣盡すの盛況を見たので、更に一歩を進めて、獨立の一雜誌とし、これが初號をば、特に四千部印刷したる旨を發表した。蓋し新雜誌「少年文庫」は、「少年園」とは全然其の方針を異にし、純然たる文學雜誌の形式を備へ、且全面的に投書家の作品を集錄し、少年の手に依つて編まれたことが、他に見られぬ特色であつた。

世間に雜誌甚だ多し、然れども未だ少年の手に成れるものあらず。其のこれ有るは、我少年文庫を以て嚆矢とす。少年文庫は、實に少年諸君共有の雜誌なり。之に掲ぐる所の論說、學藝、詩歌、小說、大人英傑の傳記逸事、佳話、異聞、英文、獨逸文、批評的の新報より各種の新遊戯、滑稽小說、考へ物、新謎、探畫に至るまで、悉く少年の手に成らざるはなし。加ふるに毎號江湖少年の作文數十篇と、各地の少年の通信を掲ぐ、實にこの少年文庫は、天下少年の一大會堂といふべく、少年をして智識を交換し、文章を練磨し、友誼を結ばしむるの媒介者なりと云ふべし。

と、其の抱負と唯一の特色とを强調してゐる。而してこれが事實上の編輯擔任者は、少年園の主幹山縣悌三郎の弟山縣五十雄（蟲湖漁史、後に閑水と號す）であつた。

「少年文庫」は四六判百二十八頁、一冊八錢を唱へ、稍初期の「少年文武」を想はせるものがあつた。其の表紙は木版一色刷にて口繪無く、本文中にも殆ど挿畫を加へず、欄を分ちて學說、文藝、叢談、雜纂、餘興、小記者（投稿文）の六項目とし、其の本來の性質上最も力を注ぎたるは「小記者」に對する用意と親切とであつた。蓋し一日の長ある「少年園」が、主として修養學藝に重點を置けるに反し、「少年文庫」は著しく文藝に優り、殊に其の宣言にも記される如く卷頭の一文を除く外は、殆どこれが全誌面を無名作家の作品によつて塡め盡し、現代の碩學大家を網羅して信望を繫げる「少年園」の編輯方針に比すれば、洵に奇妙の對照を呈したのである。

然るに「少年文庫」の小記者欄は、月と共に漸く時流に投じ、數年の後には、少年の二字を削りて、單なる「文庫」と改め、且其の誌形を四六倍判として紙數を增大し、これが全部を擧げて、投書の文、詩、歌、小說等にて充實せしめ、遂に巍然たる文庫派を形成するに至り、かの新聲（同名の社より發行せる青年文學雜誌）と共に、文壇に於ける特異の存在として一方に雄視した。而して少年園の山縣主幹の德望は、克くこれ等の投書家を一傘下に集め、主幹を中心としての文庫誌友會なるものが、久しきに亘つて存續し、師弟靄々の裡に舊時を回想し、膝を交へて一夕の歡を盡したことは、亦文壇の一佳話として傳ふべきであらう。

却說、「少年文庫」の卷頭には、毎號無署名にて、一論文を掲載した。即ち次に掲ぐるは、第二卷

二號の「少年の境遇」と題するもの〻一部分である。

灼々たる少年の花、何ぞ夫れ美なるや、何ぞ夫れ望多きや、周年最も望あるの日、最も愉(たのしみ)ある の時は、此駘蕩たる春時にぞありける。されば人世の幼時、快樂希望の充溢したる少年の時は 卽ち周年の春時にして、花實兩ながら將來に望みあるの日と云ふべし。身は貧窶の家に生れ、 衣履弊惡粗食にして茅屋に起臥する者も、肯て意とするに足らず、侮を受け嘲を蒙るも、他年 の發達進取の氣象は、常に滿腔に充溢して、汝の現境を慰むるに餘りあるべし。況や家道素封 にして、充分の教育を受くるに足るべく、資性俊秀にして望を將來に囑せらるゝ人をや。入つ ては椿萱手裏の珠と愛で、出ては刎頸切瑳の友と交はる、前途を想へば赫々たる名望、巍々た る大厦、輕車、駟馬、姫妾、珍羞、皆首を翹(あげ)て汝を俟つの思ひあり。噫少年の樂事至れり盡せ りといふべし。

少年の境遇は夫れ斯の如し。眼を轉じて他を顧みれば、頭に霜雪を戴き、身に襤褸を纏うて路 傍に蹌踉たる者も、曾て汝と同じく少年の樂事を味ひし人なり。背汗に濕ひ衣泥に塗れ、牛馬 の代理をなして、漸く一身の口を糊する者も、亦曾て汝と同じく少年なりしなり。彼等が他年 に豫想せし名望富貴は、今去つて何方に往きしや。大厦高樓輕車肥馬は果して彼等を俟たざり しか。否々、彼等を俟たざりしに非ず、彼誤つて自ら逆行し、好んで方向を轉じて現在の不幸 なる境遇に陷りしなり。進退宜しきを失ひ、蹉跌失墮遂に茲に至りしなるべし。此境遇に陷り し者、却つて豫想せし地位に達せし者より夐かに多く、其素望を達せし者は、さながら晨星の 寥々たるが如きは何ぞや。

人生行路の難き、峻坂も啻ならず、蓋し少年豫想の外に出で、學事僅かに就り、漸く社會に出 づれば、百事意の如くならず、蹉跌失望踵を接して起り、愉快を味ふ日として寡く、辛苦を感 ずる愈々多し。加ふるに家累身に纏ひ、生計心を紊し、身屈し意撓み、於悒鬱屈、精神萎靡と して活潑の氣象漸く挫折す。適々事を成さんとして失敗すれば、狼狽して他に轉じ、耐忍する の志操に乏しく、輾轉して遂に一事の成すなくして止む者、比々として皆之なり。世に落魄生 の多きも亦宜ならずや云々。

と、少年に對して人世の行路難を懇切に說き盡してゐる。

次に少年の投書の最も多く輻輳したるは、何といつても「小國民」が第一であつた。そこで、こ れが緩和手段として計畫したのは、專ら少年の作文を集錄して成れる單行の「紅顏子」であつた。 この書の第一輯の出でたるは、明治廿四年四月頃であつた。既に兩三月間に亘り、大々的に其の出 版豫告を發表したることゝて、それだけに又投書家の期待は甚だ大きかつたに相違ない。四六判紙 數四百餘頁、表紙口繪ともに多色刷石版を使用し、而も定價拾八錢、送料二錢といふ廉價版として

發賣した。

當時の廣告文を見るに、先づ出版の理由として、「投書家諸君に對して、文林欄内の狹きを謝罪する義務上の出版物なれば、代價は僅かに實費に止まる。」といひ、また材料は、「小國民投書家諸君の草稿中、小國民に載らざる傑作數百篇を集め、題を分ち、一々批評を加へたるもの」といひ、更にこれが利益としては、「一度此の書を開けば、全國各地の俊秀才子と、机席の間に談笑するが如く、以て作文の力を練るべく、學識を得べく、倦まば去つて笑友と滑稽的空想を起し、精神の疲れを回復する」と力說してゐる。いかにも「紅顏子」には、文章以外、投書家の考案に成れる多數の笑話も載せられてあつた。

かゝる用意の下に編纂したる「紅顏子」は、果して讀者の歡呼聲裡に迎へられ、忽ち版を重ね次次に第二輯より、第四輯に至るまで發行を續けたが、其の後何故か全く中絕に陷り、且漸次讀者の目からも遠かり去つた。要するに「紅顏子」は、「少年文庫」の下級を狙ひ、少年文以外種々の娛樂記事を滿載して、讀者の感興を深からしめ、或は作文習字に關する指導的記事を挿入して、斯道の發達に貢獻した。

これより曩「幼年雜誌」は、「日本全國小學生徒筆戰場」と題する作文本位の新雜誌を創め、兩々相連繫して投書家の好伴侶となつた。この雜誌は、「幼年雜誌」と同型の四六判型に依り、編輯は坂

下愛柳の兼務であつた。愛柳子は特色ある名文家にて、筆戰場の卷頭に發表したる「田舍の俊才」と題する一篇の如きは、最も好評を博し、當時の少年をして渴仰せしめたものである。

かくて「筆戰場」は、好評裡に進展の一路を辿り、「學生筆戰場」と改題して、こゝに「幼年雜誌」の羈絆を脫し、同時に著しく其の程度を向上させ、次で第四卷（明治廿七年）に入るや、從來の主任坂下愛柳は、「幼年雜誌」の專屬となり、新に安原健堂を迎へて、これが主宰たらしめた。健堂は帝大漢文科の卒業生にして本名富次、後に陸軍士官學校の教官に任ぜられた。

さて、此の當時の「學生筆戰場」は、毎月二回に亘り、題を課して懸賞文を募り、隨つて多くの有力なる投書家を抱擁するに至つた。卽ち次に示せる二種の文章は、「秋の月」と題する懸賞當選文の一部にて、甲賞は仙臺の吉野作藏（後の法學博士）、また乙賞は秋田の佐藤義助（現新潮社々長）である。尤も懸賞文とはいひ條、當時の賞品は、高々五拾錢程度の書籍一冊に過ぎなかつたが、應募者としては、賞品の輕重に左右せられず、專ら當選の名譽を念としたものである。

秋の月（甲賞、吉野作藏）。物のあはれは秋こそまされ、錦織りなす木々の紅葉を見ては、やがて散りぬる時を悲しみ、下葉色づく萩を見ては、やがて色さむる時をあはれむ。蟲韻をきゝては故郷を思ひ、群れ飛ぶ雁を眺めては兩親を懷ふ。わけて孤月に嘯きては、去年は故郷にありて父上母上と共に月を賞せしことなど、さては亡き姉上のことなど思はれて、いと〳〵物悲しう

こそ覺ゆれ、されば予は月に對する毎に、舊を懷うて歎然たらざる事なし。殊に中秋の月に對しては、常に斷腸の思あるなり。

三日月の頃より待ちし今宵かなといひけむ八月中秋の夜は來りぬ。一年一度の月なればにや、いづこにても賞する例なれば、予も例の如く障子押しあけ、緣に出でて月を見るに、空に一點の雲なく、獨り下界を照らすさまは、今宵の世界は已れ一人といはむ風情あり、さればその凄く冴えし姿は、予をして懷舊の念を起こさしめぬ。下略。

同上（乙賞、佐藤義助）。上略、東の空に薄き光は顯れぬ。今こそ上るべきと、躍る心を抑へつゝ、其方を望めば、中空さして輾り出づる望の月、正圓にして大きやかなる明鏡をかけたるが如し。嗚呼月は一たび光を放てば、此世の隅々まで照らさぬうらみもなく、或は孤村の夕ぐれを照らし、或は大路の夜半に輝く、山岳の頂きにやどるかとすれば、大海の靜波にたゞよふ、彼は眞に暗黑を照らす夜の神なり、盈虛の理りを示すは四季の變りあらねども、秋は大空に澄み渡りて、やさしき臥猪の床をてらし、露にやどりて鳴く蟲の音に哀れを添ふなどげにいみじ。我れは睫もせで餘念もなく、大月に對して眺むる折しもあれ、遙かなる一簇繁る森の彼方より、琴の音幽かに聞えぬ。峯の嵐か松風か、尋ぬる人の琴の音かと思ひし仲國の卿ならねども、かゝる片田舍にも優しき人もありつるかなと、響く彼方をたよりに尋ねゆけば、嵯峨野の奥にはあらねども、いやしからぬ家の奥に、年の頃はまさに三五の望月か、二八は越えじと覺ゆるいとも清らかなる少女の、月に對ひて琴をかなづるにてぞありける。下略。

以上の二篇によりて、大體當時に於ける少年文の傾向を窺ふことが出來るであらう。卽ち從來多く用ゐられし漢文くづしの口調は、漸く廢れ去りて、所謂雅俗折衷の叙情文が擡頭し來り、專ら此の形式に依らんとする者の、著しく增加しつゝあることは、否み難い點であつた。

第五節　考物其他の投書

少年雜誌の愛讀者等が、先づ最初に投書を試みるのは、考物畫探し等の出題に對する解答であつた。これは只單に思考力に俟つのみにて、必ずしも思想を練る勞苦もなく、且葉書一枚を投ずれば自分の姓名が誌上に揭げられるのであるから、未だ文章道に進み得ぬ者にも、比較的容易に其の希望を達し得られるからである。

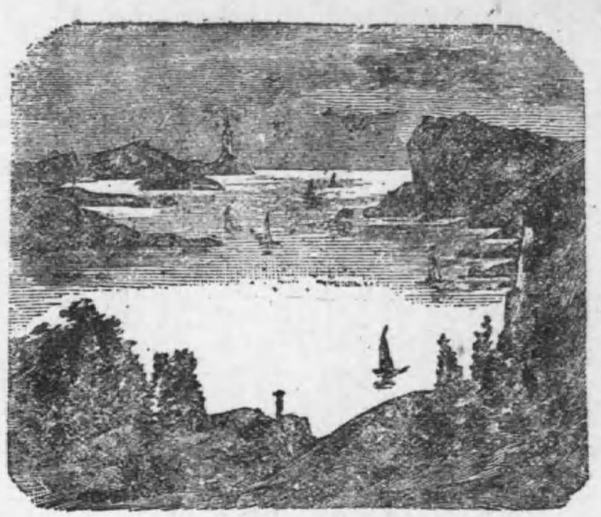
それ故に又何れの少年雜誌も、特に此の一欄を設けて、讀者の興味を喚起したのであるが、就中「小國民」の如きは、半ケ年間十二冊に亘りて、完全に正解の部に姓名を列ねたる投書家に對しては、これに對する賞品として、拾錢程度の書籍を授與する內規を定め、爲に讀者は競つて其の募に應じ、隨つて解答人名の發表の多きことも、斷然他の同種の雜誌を凌駕した。又「少年園」は、時

に記者自身の考案に成れる、最も奇拔にして難解なる、頗る妙味ある新題を提出して、しば〳〵應答者を困却せしめた。

今、こゝに參考として揭げし一圖は、第四年度の「小國民」に揭出せる畫探しの一例である。元々此の圖版は、極めて緻密にして美麗なる西洋木版彫刻を、比較的精良の用紙に印刷せるもので、いかにも波靜かなる港灣の風景がよく描き出されてゐる。併し一旦此の畫面を立てゝ仔細に觀察する時は、凄艶なる水の女神の頭部が、あり〳〵と目を射るが如く、眞に巧妙を極め、觀者をして恍惚たらしむるものがある。多分これは外國雜誌等より轉載せるものであらうか。蓋し多くの畫探し新題中、此の一圖は、最も出色の者として評判の高かりしことを記憶する。

さて此の考物や、畫探しの解答、又は新題提出の外に、各地方の出來事とか、或は珍しき風俗風景、若しくは自己の觀察研究等を任意に報知すべき一欄も、亦少年の爲に開放せられてあつたが、何分にもこれに充當する紙面狹隘にして、容易に揭載の見込なく、先づは考物の解答程度を以て滿足しなければならなかつた。今試みに此の頃の解答人名欄を檢討するに、荒木貞夫、少し遲れて畑俊六の名の見ゆるは、現在我陸軍の兩將軍なるか、但は同名異人か、住所明記なき爲、遺憾ながらたしかな事は知る由もない。

また、後年我劇壇の革新を企圖し、且劇作家として文名を謳はれたる小山内薫の如きは、「小國民」誌上に於ける、考物解答者の錚々たる一人であつた。なほ仔細に調査すれば、或は意外の大人物が、此の中より發見されぬ限でもあるまい。



繪さがしの一例

而も、此の趨勢に乘じて、「小國民」の發行所にては、學齡館叢書の第二編として、「考物博士」と題する一小册子を編纂して考物愛好の少年に提供した。此の書は菊半截の小本仕立約二百頁、表紙は着色にて太田道灌山吹の故事を現はし、口繪に洋木二面を添へ、定價十二錢送料二錢といふ頗る手頃の好書であつた。その廣告文にいふ。

太田道灌、山吹の考物を解く能はずして賤女に恥しめられ、吉備大臣、難詩を解きて、譽を千古に貽す。考物豈たゞ遊戲として見るべけんや。本書は、東西古今の考物一千二百餘題を、天文、地理、歷史、文學、數學、人事、支體、動植物、金石、衣服、飲食、家財、海外雜、切紙等十餘門に大別し、更に之を小別して、いかなる難題にても推考し得べき物名篇を附

け、吉備大臣の野馬臺詩全篇を附錄とせり。著者考物博士はいふ、考物を一の學理的に說きたるは予を以て始めとすと、信に然り云々。

謂ふに此の書の編纂は、頗る用意周到を極め、類題を擧ぐること多く、解說丁寧なる點より見て恐らくは研堂散史の餘技に成れるものではあるまいか。序ながら玆に博士といふは、當時に於ける一種の流行語にて、「甲蟲博士」「考物博士」といふも、要するに物識りの代名詞として使用せられ、又俗間にては、これに反對の不可解の渾名に流用されし例も亦多々ある。蓋し我國に始めて博士の稱號を用ふるや、延いてこれが一般の人事に轉用せられるに至つたものである。

却說、かくいふ著者の如きも、其の幼年時代(明治廿七八年の頃)、未だ人並に文章を作るだけの能力無く、且敎へを受くる人とそなけれ、せめては人並に、考物の解答を提出せんものと、其の投書締切の日を忘れず、夜もなか〳〵に眠らず、百方工夫をめぐらし、考案を重ねたる後、辛うじて全部七八題の解答を得て、期に遲るゝことなく、これを淸記して郵便に託した。かくして待つこと約一ヶ月半、其の答案發表の豫定號の發行近づくや、今日か明日かと幾度となく、配達夫の來るを待ち佗ぶるのであつた。家に在るも學校に在るも、只それのみを念頭に置き、甚だしきは屢々夢に見ることさへあつた。

而も漸くこれを入手するや、殊更雜誌の裏面より、兢々たる心持にて披閱し、やがて解答人名欄を一瞥するに及び、其の數の常になく夥しきは、いかに問題の平易にして、いかに多くの新解答者ありしかを如實に物語つてゐる。それにしても我名は何處にかある、ベタ組六號字を一行づゝ克明に探査する時、恰も數百名の正解者の中央部に於て、確實に自己の姓名に逢着するを得た。正にこれ驚喜亂舞である。胸は高鳴り手は顫へ、生來未だ曾て經驗したることなき感激の一時である。

はじめて活字に組まれて、有名なる雜誌面に顯はれ出し我姓名に、いひ知れぬ誇りと愛着とを覺えて、穴も明かんばかりに、やゝ暫時眼を据ゑて見守る程に、意識茫然として、これが果して眞の我が姓名であらうか、字畫に誤りはあるまいか、但は別人の姓名ではなからうかと、さうまでも思ひ詰めたものである。此の怪しきまでに不可解なる氣持は、正に知る人ぞ知らん、而も今の少年は、かゝる天眞無垢の境地に沒入し得るや否や。

さて、「小國民」の考物は、皆當りと半當りとの二種に區分して同時に發表したもので、出題全部の正解者は、勿論皆當りに編入せられるも、其の內の一題にても不解のものあらば、當然半當りの部に入らねばならず、さりとては亦殘念なれば、如何にもして半ヶ年連續缺くるなく、皆當りの部に其の姓名を列ねるの要がある。併し事實これは洵に容易ならぬ難事難題にて、中には折角十回位まで皆當りに入りながら、十一回目又は十二回目に惜くも半當りに蹴落され、あたら九仞の功を一簣に虧く如き例も亦少くなかつた。

かうして十二回に達した時、即ち上半期を終ると共に、新たに二三種の書名を掲げて、半ヶ年皆當りの者は、其の中希望の一冊を申出でよとの注意が附記せられる。こゝに於て十二回連續の正解者は、其の欲する書名を記して申告する。記者は又此の報告を受くるや、一々實際調査を遂げた上申告者に對し初めて賞品を贈與する規定であつた。尤も毎號發表の皆當り人名が、少くも二百名、多きは四五百名に上るにも拘らず、半ヶ年後に至りて、名譽の賞品を受くる者は、僅々五指を屈するに足らぬ有樣であり、それだけに又受賞者の名譽は大きいものが有つたと思はれる。

これより後數年、「少年世界」は只一回の判じ物を特に懸賞として出題するや、其の解答者は極めて夥しき數に達し、これが賞品も、日本昔噺一冊（五錢）なりしに拘らず、競つて募りに應じたとは、やはり當年の少年の純眞を物語るものであらう。

第六節　投書家の熱意

交通の不便なると、雜誌の種類の多からぬ爲にも因ることであらうが、當時の少年は、一旦かうと思ひ定めて、或種の雜誌の愛讀者となるや、堅く節操を守り、如何なる事があらうとも濫りに他の同種雜誌に目を觸るゝことなく、少くも兩三年乃至數年間は、連續購讀して變らず、更に成長の後は、これを弟妹に讓り、自らは一段上級の雜誌を購讀するといふのが一般の習風であつた——尤も有産階級の少年が、同時に二三種を購讀する如きは異例として——殊に今日の如くに「少年」とか「少女」とか若しくは「幼年」とかに細別せられず、隨つて尋常科の兒童も、高等小學又は中學初級の生徒も、男兒も女子も、悉く同一雜誌の讀者であつた。

かうして其の愛讀雜誌との間に、一種の淺からぬ親みを感ずるに至り、延いては考物其の他の投書に趣味を覺え、更に進んで文章の投書に志すのも、亦これ自然の經路といはねばならぬ。況や考物の解答に於ては、只單に姓名のみを掲げられ、何處の何者とも明かにせられぬ憾みあり、隨つて自己の手腕才能を示さんとする上に、甚だ物足りなさを感ずるのは、亦當然と言はねばならぬ。

自己の勞作が、愛讀雜誌の面に飾られる一事は、投書に熱中する少年にとつて、至上の名譽であり、最大の歡喜である。而も其の姓名の肩には、詳細に縣郡町村までが明記せられてゐる。且考物解答人名の如き混合體ではなく、一個獨立の場面に、麗々しく我姓名が現はされ、特に文章の妙所佳句には、各種の圈點さへ加へられ、更に編輯記者の評語はと見れば、これ亦過分の讃辭である。爭で驚喜せずにゐられよう、想へば小學初級の當時、一週一度の淸書に對して、二重三重の丸を得たる歡びよりも、猶ほ一入の滿悅に浸りしことは事實である。

草深き里に生ひ立てる少年が、破机の下に正坐して、「記事論說文範」を友とし、寒燈を剪つて幾夜か心思を勞したる一篇が、天下に名聲高き雜誌面に刷出され、遍く全國に弘布されるといふ事は

蓋し何物にも換へ難き名譽であり、又何物にも較べ難き光榮であらねばならぬ。

さて、かうして一度我姓名の掲げらるゝや、諸方の未見の同志より、次々に交際を申込んで來る中には全然未知の人もあるが、又既に誌上に於て、其の名を熟知せるもある。ところが此等の求交文は、殆ど皆一樣の形式にて「未だ謦咳に接せず候へ共、御芳名は某誌上に於て拜承密かに敬慕罷在候」といふ冒頭の句を用ゐ、西は九州から、北は北海道の涯にまで及ぶ有樣である。そこで又此方からも、此の人はと思ふ所へ、同じやうな意味の書面を飛ばして交際を求める。さうかと思ふと又此の未見の友の紹介によつて、新しい交友の來り加はるもあつて、正に應接に遑なしといふ狀態である。

これ等の未知未見の友人は、すべて詞友と稱したもので、其の詞友の多くを有つといふことが、又投書家の誇りでもあり悅びでもあつた。勿論双方遠隔の地に在ることゝて、先づ寫眞の交換とか現在の環境とか、或は將來の志望といつた事をも互に通報し合ひ、進んでは地方新聞若しくは雜誌の交換、或は土地の情況、名勝風俗等を知らせ合ひ、時には例の考物の解答打合せを行ふなど、少くも毎月兩三回の信書の往復を重ねたものである。

殊に僻陬に在る少年が、遠隔の土地に多くの友人を有つといふ一事は、一日一回、一村數通の郵書を配達する雇夫の目を愕かせ、いつとなく附近の人々の褒め草ともなり、隨つてかゝる投書家の多くは、其の學才を認められて、小學校の代用教員に採用せられるか、又は役場の書記に擧げられるか、何れさうした道を辿つて、田舍は田舍ながらに、立身の緒口を得た者も、亦多かつたことであらう。

するとまた一方、これ等の投書家が、文章の練磨に精進して、只管心を傾くる結果は、やがて自力を以て些々たる同人雜誌の發行を企てし例も亦少くなかつた。蓋し其の主なる理由は、單に購讀雜誌の投稿にのみ終始するも、其の苦心の作品にして誌上に掲出せられるものは、辛うじて十中の一にも達せず、これが大部分は沒書の悲運に陷り、爲に十分の滿足を得難き結果、別に少數の同志を結合して、同人雜誌を出さば、よし其の頒布の區域は狹くとも、自己の所思を完全に發表し得るからである。卽ちかうした意味の下に、一時其の最も隆盛時代――明治三十五六年頃――には、此の種の同人雜誌が、全國各地に簇生し、其の數恐らくは數百に上つたものと思はれる。

併し、同人雜誌を發行すればとて、各自愛讀の雜誌への投稿は、必ずしも中絕することなく、能く數年の久しきに亘つて繼續せられ、且これ等の投稿家の中、後年中央文壇に立ちて、隆々たる名聲を發揮せる人々も、亦決して少くなかつた。今、こゝに鈴木三重吉の一文を選びて紹介しよう。後年此の人が「赤い鳥」を起して童話界に一大改新を齎らしたことは、世間周知の事實である。而して此の一文は、「少國民」九年二號に、日記の一節として掲げられし所である。

天長節の記（廣島市猿樂町鈴木三重吉）。　日も漸くくれ果てければ、ゆうげすまして少しく物せばやと、机によりかゝるに、此所かしこと折（に打）ちならす太鼓の音耳にさはりて手にもつかず、さて少しあるきなばよき考へもいでこんなど思ひて、あたりをそこはかとなく歩むに、只道にかけたる燈の明くと、いつもよりも人のゆきかひしげきのみを（ぞ）覺ゆる。

かくてあるべきにあらねば、亦たちかへり、文机によりて、明後日の課業を用意す。さるは明日の天長節には、ゆらりと遊ばんとてなり（これより前は天長節に何の關係ありや）

かくて、ねむけを催すまゝ打臥しぬ、夜もふけつらん、冷かなる風に目さめぬ、打（折）ふし余を呼ぶ聲の聞えければ、目をさすりつゝ出て見れば、日頃親しき友の森本信一郎ぬしにぞ有りける。しばし語らひて去りぬ。

あくればしも月三日、忝けなくも我四千萬のはらからが、親ともなつき奉れる大君の、御たん生遊ばされし祝ひ日なり、此日はいつもよりも早くしとねを出でぬ。ねぐらはなれし百千鳥の青空に舞ひうたひつゝ、今日をことぶくありさまは、余が心もいつもよりか晴やかに覺えたり。さて國旗など飾り立てする間に、學びの庭に參るべき刻とはなりぬ。急ぎあさげをすまして、飛ぶが如くに驅けつけたり。やがて祝の式にのぞむ、勅語を讀み上げられし時は、常に意地あしき余も、心すが〳〵しうなりしは、何と（何と以下通せず）あやしむべき事にもあらず式終りて友なる森本氏と打ち連れて二葉山の公園に歩を進めぬ。時に園内の楓のこきうすき相交りて、人の目を樂しましめたるぞ時知り顏にてをかし。

此日町々には、大なる國旗を立て、釣燈かかげ、或はたわやめ携へて行く人、或は童男つれて行く人、いづれも綾錦をかざりたり。正午ともなりぬれば、例の百一發の祝砲は、西なる馬場にて放たれぬ、今朝東なる馬場にて、勸（觀）兵式を行はれしかど、見るを得ざりしは止むを得ずといふべきなり。

日傾き果つる頃、友なる森本ぬしは、めでつべき少國民は來りぬとて、一つの雜誌をなげだしぬ、悅びて讀むうち、かどの方にかまびすしき聲しければ、本をもてるまゝ、何事ならんと打ち出で見るに、何處のものとも知らぬが、大ぜい打交りて、いさかひをなしゐたり、間もなくそはやみて、その筋の人に見つけられざりしは幸なりき。余は森本ぬしに向ひて、今日の祝ひ日に、いさかひするとは笑ふべき事ならずやと曰へば、ぬしは打笑みて、かゝる人々は學ばず道を知らざればなりと、余は曰へらく、然りと、ぬしは尙言をつぎていへらく、つら〳〵思ふに我ら幸に少しなりとも道を學び得て、かゝる人にうしろ指さゝるべき事をもなさでありつるは、全く師匠のおかげとは云へ、親の一生の賜ならざるはなし、こを考へなばなどてはげみつとめでやはあるべきといふ。扨我家にかへりけれ（のぞけ）余も家に歸りぬ、時に家々はとく

より戸をさして、行ききの人も多からず、あちこちに太鼓の音のみぞ聞えける。〔文中の括弧は記者が記入して作者の注意を促したるもの〕

この文に對する評語には、「着想は面白けれども、筆は未だ熟せず、勉勵して漸進を期すべし」と誨へてゐる。果然作者は大に勉勵して、後年天下に文名を擧ぐるに至つた。

第七節　製版技術に就て

すべての少年雜誌が、如何にせば時流に投じ得べきか、如何にせば讀者の嗜好を適し得べきかと絶えずこの點に腐心せる一事の、尋常一樣ならぬ者ある、今も昔も變りはなく、而もそれには記事の撰擇を重んずるを同時に、口繪、挿畫の多少と巧拙とが、其の雜誌の運命を左右すべき重大の要素なりしことは、亦否み難い所であらう。

併しながら口繪及び挿畫の類は、これを一般の記事面に比すれば、著しく費用を要することいふまでもなく、隨つて經營者の惱みの種となつた。勿論その精美を期し、且多數を入るゝことは顧ふところなれど、事實相當多數の讀者を擁し、其の基礎の確立せる者ならぬ以上、濫りに費用を投じ難き憾があつた。而も少年雜誌盛衰の岐路は、一にかゝつて此の點に存することは、敢て言を俟たないのである。

各種の少年雜誌が、それ〴〵適當の挿畫々家を物色して、其の妙技を揮はしめ、或は其の製版技術に於ても、他に率先して新味を現さんことに努力したるは、或は現今の雜誌經營者の夢想だもなし難き所ではなかつたか。こゝに此の方面の事實に關して、暫く回想して見るも敢て無用ではなからう。

先づ第一に表紙畫である。讀者の手に配達される雜誌が、待つ間遲しと封を切られる刹那、其の表紙畫の意匠が讀者の愛好を牽くに足るべき者でなければならぬ事は、改めて言ふまでもなけれど初期の少年雜誌は、殆ど申合せたる如くに、精密なる西洋木版畫か、若しくはそれに近似せる日本木版畫の墨一色刷を用ふるに過ぎなかつた。尤も「幼年雜誌」の如きは(明治廿四年一月創刊)、初め幾分か書籍の體裁に據れる關係上、特に石版二色刷を用ゐて、やゝ異彩を放たしめたとはいへ、これとても三號以下は、他の例を追ふが如くに、洋木一色刷に變更してしまつた。

然らば何故に、各雜誌が、殆ど軌を一にして、洋木一色刷の表紙を使用したかといふに、當時の雜誌販賣法は、必ずしも店頭に陳列して、通途の賈客を俟つにあらず、其の大部分は少くも半年一年、若しくはそれ以上の豫約的購讀者に配達する立前なりし爲、強ひて表紙を變更し、又は美化するの要はなく、而もそれには永く使用に堪へ得るところの、西洋木版に依ることが、最も賢明に最も好適とせられたからである。

次に、開卷劈頭、佳麗なる石版多色刷の口繪を挿入して、讀者を眩目させることは、經營者として最も希望する所なるが、さてこれを實行に移すには、相當の難點の伴ふことも想像に難くない。卽ち只一葉の多色刷口繪は、十數頁の本文にも匹敵すべき高率の費用を要する次第にて、其の必要を痛感すればとて、遽に決行し難く、心ならずも墨一色の石版畫を以て、暫く時機を待つ外なかつたのが、蓋し僞なき眞情であらう。

而もかゝる時、殆ど採算を無視するに近く、勇敢にも多色刷（極彩色といふ）口繪を採用して、大に氣を吐いた者は、學齡館の「小國民」であつた。「小國民」が、其の口繪挿畫に關して、多大の犧牲を拂へる一事は、北隆館五十年史中に、次の一節の記されあるに見るも、凡そ想像し得られるであらう。

前略、それから武內桂舟、梶田半古も描いた。鞆音氏の後は、尾竹々坡、國觀の二氏が妙腕を揮はれた。皆當時名聲隆々たる畫家であつた。名畫も彫りが拙くては物にならぬ、それ故手腕の優れた彫手を撰び、其費用を惜まなかつた。併し當時でも繪の彫師は名手は極少く、首彫として眞の腕ある親分は二人位であつたが、此人達は昔の職人氣質で、中々金では動かず又期日などの觀念が薄かつた。然るに永洗氏は、此親分達と互に深く理解し合つてゐたので、それで少國民ばかりは、何時も拙工の手にかゝることを免れて、期日を失ふことがなかつた。それから寫眞とか洋畫とかは、西洋木版を用ゐた。これは俗についきぼりといつた彫方で、山本芳翠といふ人が佛蘭西で學び、明治廿年頃歸朝して日本で創めたもので、刻料は日本木版の數倍であつたが、小國民は之を用ゐた。網目版卽ち寫眞銅版が出來てからは、最も早くこれを利用した。この外に石版色刷を用ゐたことは素よりいふまでもない云々。

富岡永洗の歷史畫の一例
（小國民口繪）

右に揭ぐる記事は、何人の手に成るものかは知らぬが、元々北隆館の手にて學齡館時代の出來事を傳へたものだけに、其所に幾分か事實相違の點もあるやに想はれる。殊に學齡館の「小國民」を、北隆館の「少國民」に當て嵌めてある關係にて、多少の矛盾も觀取されるのであらうが、大體「小

國民」の挿畫に就いては、これが要を盡してゐるかと思はれる。

即ち、右の記事にも見ゆる如く、西洋木版なる者は、當時としても、相當高價を唱へたものであるが、寫眞銅版の利用以前には、廣く一般雜誌書籍界に歡迎せられ、隨つてこれら彫刻の名手も亦多く輩出し、就中合田清の經營する生巧館（赤坂溜池）が、能く久しきに亘りて其の發達に盡し、且偉大なる效果を收めしことは、ひとり雜誌の挿畫のみならず、我國の彫刻技術史上に、忘れ難いものがある。

さて此の生巧館に附屬する畫家には、佐久間文吾、渡部金秋等、洋畫壇の新進を集め、諸雜誌の表紙挿畫類の意匠、揮毫、彫刻をも一手に引受けたものである。またこれと同時に、初期の少年雜誌が、寫眞亞鉛版を利用して、特殊の光彩を添へしめた裏面には、猶興舍製版所の存在を閑却してはなるまい。

猶興舍（堀健吉）は、神田鍛倉河岸に小やかなる社屋を有し、早くより亞鉛版による寫眞製版の技術に獨得の手腕を發揮したもので、明治廿七年小川一眞が、寫眞彫刻銅版の技法に一新境地を拓ける後も、依然これと並行し、銅と鉛との差こそあれ、永く斯界の權威を以て目せられた。

然るに此の猶興舍の寫眞亞鉛版を、最も旨く活用したるは、他ならぬ「少年園」の口繪であつた。即ち明治廿四年度の同誌に掲げられたる二倍大、口繪「ナイヤガラ瀑布」の一圖は、未だ其の技術上に幾分不備の點あり、稍明瞭を缺ける憾は認められるも、此の時代にこれだけの大版寫眞を製版印刷したるは、先づ以て成功を見なければならぬ。次で「小國民」も殆どこれと時を同うして、其の口繪に「遲羅國太子元服の圖」を載せて平素の多色刷に換へたが、特に館告の記事面にて「今回卷首に挿みたる寫眞銅版畫は、本邦にて未だ多く行はれざる最新の印刷物なり」と謳つてゐる。而して「少年園」と「小國民」とは、其の後に於ても時々これを本文中に刷入して異彩を加へたのである。

始めて使用せられし寫眞版

これを要するに、生巧館彫成の西洋木版と、猶興舍の寫眞亞鉛版とは、明治廿四五年時代の少年雜誌の挿畫に、一大革新を齎らしたことは、大に認むべきものであらう。

又、これを他にして、石版一色刷の口繪の如きも、大部分砂目版の極めて細密なる製版を利用した。元この砂目版は、石版畫工の手に依りて、一線一畫克明に筆寫し、鉛筆の冴え、かすれ等を、

殆ど原畫に等しく現すものにて、非常なる手數を要する次第なれば、最早や今日は其の技法全く廢れ、隨つて砂目製版の技術者は、全然求め難きも、當時神田東松下町の小柴英侍が、專門的に其の製版印刷を引受けて、手廣く業を營み、他にも多くの小製版所の續出を來した。砂目石版の雅致に富めることは、寫眞銅版又はグラビヤ版等を凌駕せるものと云つてよい。

何れにしても西洋木版と砂目石版とを問はず、それ等の職業に從事する彫刻師は、必ずしも値段の高低をのみ念頭に置かず、其の有する手腕の限度を盡して、最も精美優良の製品を造出し、以て自家の名聲を發揚する事に專念した感がある。卽ち所謂江戸前の職人氣質を堅持し、互に競技を旨とする結果が、延いて研究心を促し、滿腔の努力を傾けるに至り、中には刀師製版師の落欵、雅名等をも、圖版の一隅に小さく刻記せるさへあり、一面よりこれを見れば、各種少年雜誌の口繪挿畫等は、これ等技工の習練場となり、競技場たるの觀もあつた。

殊に我國在來の木版技術に至りては、一層此の風尙强く、有名なる畫家の手に成れるものは、それ〴〵其の指定の彫刻師によつて製版せられ、就中筆勢のかすれ、卽ち俗にいふ錆の如きは、特に彫師の刀尖の活躍によりて、見事にこれを生動せしめ得たもので、いはゆる入神の技とは、正にこれ等を言ふべきであらう。

ふういふ有樣なれば、當時の雜誌記者が、有力畫家と、其の專屬の彫師とを操縱するには、相當の苦心を要したこと亦いふまでもなく、殊に少年雜誌の立前として、必ず毎月二回づゝ發行するさへあるに、交通機關も全からず、畫家と彫師との居宅が、何れも遠く懸隔れある關係等にて、この間を人力車により、幾回となく往復して、斷へず督促これ力むるのが常例であつた。

砂目石版の一例（小柴英侍刻）

然るに畫家といひ彫師といひ、共に相當の權威者なれば、如何に事情を陳べて催促すればとて、氣の向かぬ限り、容易に捗らず、爲に兩三日を空費する如きは、さして珍しきことではなく、此の間に處する編輯者の焦慮は、亦實に想像に餘りあるものがあつた。

かくて畫稿も漸く仕上り、次で彫刻も順調に進み、愈々木版の完成を告ぐると共に、これを電氣銅版の專門屋に廻して鉛版に寫し、更に銅鍍金を施して後、初めて活版所に交付し得る順序であつ

た。其の理由は、西洋木版の木地は元々黄楊の寄せ木なれば、彫版の儘印刷に附せんか、中途にて剝離する危險があり、また日本木版は、櫻の一枚板なれど、これも木地の儘に活版面に嵌め込む時は、壓力の加減にて要部に缺損を生じ、爲に微細なる線彫の妙味を失ふ結果となり、隨つて西洋木版も日本木版も、最も堅牢なる電氣銅版に改造して使用するの外なく、其の手數の複雜なることは亦實に容易ならぬものがあつた。

次に雜誌の綴方であるが、これも今日は針金の機械綴なれば、一日にして數千、或は數萬冊の製本さへ、さしたる困難ではなく、いかなる大量製産も、殆ど茶飯事に等しき觀もあれど、未だ斷裁機なく、綴機械なき明治卅年頃までは、活版所にて刷上りたる刷本が、折屋の手に渡り、次に綴屋の許に廻るや、背の部分三ヶ所に、三ツ目錐もて小孔を穿ち、これに木綿糸を貫き通し、中央部にて緊縛したる上、糊を粘して表紙を被せ、定木をあてゝ指定通りの寸法に斷切り、こゝに完全なる一冊を得る順序である

而もこの折屋綴屋の輩は、裏店の主婦等の內職に渝し、極めて低廉の賃銀に甘んじて、親切丁寧を旨とした。されば此の時代の雜誌は、何ヶ月分を取揃へ見るも、天地左右に寸分の差異なく、整然として一紙亂れず、甚だ心地よき者であつた。これ雜誌發行元にて、其の見本號の出來上ると共に、寸法に相違のないやう、豫め檢査を勵行した爲である。

即ち、これを今日の、超速度製本に較ぶれば、其の能率の上らぬこと夥しく、實に迂遠にして兒戯に等しいものではあるが、かゝる手數を盡して、猶ほ且定期に發行を續けたる努力は、蓋し多大のものと言はざるを得ない。

第八節　「小國民」と「幼年雜誌」

一　明治廿四年度

「少年園」は、專ら高尙の一路を進み、「少年文武」は既に影を潜めて、明治廿四年以後の少年雜誌界は、「小國民」と「幼年雜誌」とが、兩々相對峙し、各の分野を維持しつゝ、進歩向上の途を辿つたのである。當時「小國民」は、既に發行後第三年度に入り、「幼年雜誌」は、未だ一年に充たぬも新鋭の意氣に富み、將來の大成を目して、一路精進した。而して前者は、菊判三十二頁(附錄八頁)にして三錢、後者は四六判六十四頁を以て四錢を唱へ、盛んに鎬を削つたのであるが、只「小國民」に一日の長あり、一歩の利ありしことは爭ひ難かつた。

されば「幼年雜誌」は、同年七月以降、菊判三十二頁に改め、且其の定價も「小國民」と同程度に引下げ、兩誌の接觸はいよ〳〵甚しくなつた。「小國民」が、覆面の主筆石井研堂を表面に立

て、、斷乎名乘を擧げたのも此の時であり、「幼年雜誌」が紙幅變更を斷行すると共に、江見水蔭の新作「猪武者」と題する十餘頁の附錄を提げて、氣勢を示したのも亦此の時であつた。

さて此の年に於ける、主要なる社會事象として、一世を震駭せしめたるは、かの大津事件であつた。これより露國の太子ニコラスが、軍艦ニコライ一世に搭乘して、我國に來遊すとの豫報があつた。而も事は單にそれのみならず、明治十年かの西南戰爭に、薩南城山に於て戰死せる筈の西郷南洲が、實は疾く逃れて露國に入り、今度ニコラス太子と共に、我國に歸り來るとの一種奇怪なる風說を流布する者あり、爲に都鄙を通じて、一時話題の中心となり、非常なる興味を以て待たれたものである。

併し此の奇怪なる風說も、要するに例の九郎判官が、奥州の高館を脫出して、遠く蒙古に入り、遂に成吉斯汗に成つたといふに同じく、西郷崇拜の一部者の揑造說に過ぎなかつたが、事實は相當の反響を喚起し、「西郷果して來るか」など、新聞に雜誌に、早くより書き立て、隨つてニコラス太子の來朝には、別の意味に於て、少なからぬ希望を懸くる者もあつた。

然るに、いよ〳〵となつて見れば、「西郷果して來るか」は、やはり一種の流言蜚語であり、且露國太子に關する記事は、例の大津事件突發の爲に、一切掲載を禁止せられ、悉く暗から暗に葬られ去つた。

日本十二景の一（淡月ヶ瀬）

小林清親の風景畫

とゝに於て「幼年雜誌」は、一頁大の太子肖像畫を、只漫然と本文中に挿み、次で山田美妙齋の「靈鷲去る、嗚呼靈鷲去る」の新體詩を以て卷頭を飾り、淋しく去りゆく太子を送つた。又「小國民」は、互報欄に、「緊急勅令發布以來、魯國皇太子の事につき編輯したる原稿は、內務省より許可せられず、大に手違を生ず、唯本號の石版畫は、皇太子殿下の御招待により、天皇陛下短艇にて魯艦へ成らせらるゝ圖なり」と極めて朧氣に記してゐる。卽ち其の口繪（三年十一號）は、淡彩二色刷見開の大版にて、中央に大きく魯艦の禮砲を發射する光景を描き出したるものにて、別に卷頭には、太子の肖像と、其の略傳とを掲げるに止めた。各雜誌とも豫め用意を整へ、ニコラス太子入京の盛儀を詳報せんものと、手ぐすね引いて待ち構へしだけに、成る程「小國民」のいふ如く、

大に手違を生じたらしく、其の狼狽も想像に餘りあるものがある。

さて、第三年度下半期に於ける「小國民」は、しば〳〵表紙畫の變更を行ひ、絶えず面目を一新せしめ、加ふるに表紙裏面には、小林清親の最も得意とせる「日本十二景」の密刻洋木に異彩を放たせ、從來の多色刷口繪の外に、標本畫と題して、珍奇なる動物の生態其の他を、一頁大洋木別刷として本文中に挿み、猶卷頭の八頁を限りて、舶來上質紙を使用し、洋木固有の美を發揮する等、愈々急速の進歩を呈現した。

これに對する「幼年雜誌」は、其の表紙畫に、兒島高德の櫻樹題詩の圖案を以て押通し、同年秋季に至りて、其の口繪に初めて石版多色刷を用ゐ、「重盛義平紫宸殿前の戰」を加へしのみ、他は悉く石版一色刷に甘んじ、未だ光彩の見るべものがなかつた。かゝる有樣なれば、兩誌は時に應じて誌上に相爭ひ、且これが讀者も亦各々二派に別れ、互に其の優劣を論爭するといふ一種の奇現象を呈するに至つた。

併し、公平なる眼を以て仔細にこれを見れば、「小國民」は其の當初より、確乎たる主義方針を堅持し、修養、常識、科學、歴史等に重點を置き、專ら指導的地位に立てるに反し、「幼年雜誌」は主として名士の寄稿を仰ぎ、華々しく喧傳に努めたりとはいへ、其の主義方針には、一定の見識なきに似て、內容外觀共に遙かに「小國民」の優れることは否み難いものがあつた。

なほ兩誌の相爭へる一例として、「小國民」第三年十一號に、次の如き記事を掲ぐるに見ても、其の激甚の程を想像し得るであらう。

第三年上半期の表紙

御存じは無からん――地方幼年諸君の中には御存じなき方あらんかとの老婆心、事の序に一言申述べ候、夫れ書籍雜誌等を買入るゝ目的はと問はゞ誰しも紙數の多少等を論ずるものには無之、記事の材料を吟味すること勿論なり。されば名家の筆に成れるものは、一ページ一圓なりとも高しといはず、凡人の書き集めたるものなるときは、一ページ一厘なりとも尙高しといはざるべからず。故に雜誌に向つて、代金高しとか安しとかいふ言葉は、其雜誌の記事によりて定むべきものなり。啻紙數の多きを以て安しといふ時は、

「小國民」と「幼年雜誌」

古新聞紙を買ふに如かざるなり。然れども世人は種々の好みありて、たゞに紙數多きものを以て安しとし、記事の如何には注意せられざる看客なきにしもあらざれば、府下の某〇〇等の如く、唯紙數を多くして、何でもかでも刷り上げさへすれば宜しといふ主義を守る出版元もあり。これ等の出版者は、古雜誌か書物新聞等より拔き集めたるものを土臺とし、肩書ある一二の人を出しにつかひ、看客を欺くを主眼とせり云々。

同下半期の表紙（清親筆）

と、圓曲に遠廻しに鋭く」矢を放ち、次で四年七號には、更に辛辣に、「實說文盲世界」と題して、老國民といふ名の人より左の投書あり、あまりひどき間違ゆゑ、一本やりこめて頂戴。〇〇雜誌記者の無學！　〇〇雜誌記者は、小學校生徒程の學力無き人なるべし。同誌五號に、水戸の義公と烈公を一つにして、わけの分らぬ事を書き、其次號に、筆耕の誤りといふこじつけ正誤を出せり。文章も正しく書きありて、どうして筆耕の誤といへよう？？？　實は筆耕兼帶の記者なるべし、六號にもボルネオとカナダを一つにして、貨幣の講義をなされしが、北亞米利加のボルネオとは何事でせう。貨幣の英字中に、ブリチシュ・ノース・ボルネオとあるを見て、北亞米利加との早合點か、小國民の笑林の如し。ボルネオは亞細亞の東印度、マーキペラゴの中の一つです。其内で北の一部が英領故、ブリチシュ・ノース・ボルネオといふのです。チト尋常小學科位をお稽古してから、雜誌書くことゝしては如何？？？　紙屑製造、活字つぶし。評、〇〇雜誌は毎號の間違ひ此の如し、天下の幼年者を愚にするものといふべし、併し蛙面に屎。これは恐らく「小國民」の熱贊者が、幼年雜誌のあらを摘發して投書したものであらう。兎も角も兩誌の讀者が、舷々相摩すばかりに、絶えず接戰を演じたことは、正しく一大奇觀といふべきであつた。

二　七羽烏と學生の砭

「幼年雜誌」の記事には、寄稿家の筆意によりて、やゝ生硬の者も多かつたが、又一面少年の嗜好

に投ずる純情の物語も屢々掲載せられた。玆に「由良太郎武勇傳」以來、讀者の待望久しかりし漣山人は、同誌第十七號より、數回に亘りて、「七羽烏」なる新作を發表し、大いに天下の好評を博した。これは漣山人專賣の獨逸種を、巧みに飜案せるものにて、其の文體は例によつて、「とがね丸」と同一形式を踏襲してゐる。

（**七羽烏第一回**）。　むかし〳〵ある處に、一人の婦人すみけり。良人は早く世を去りて、後は七人の息子と、一人の女兒とをあひてに、からくも世をわたりゐけるが、この七人の息子等は、みな筋骨たくましく生れて、力量も世の常ならねば、天晴れ物の用にもたつべう思へど、食物を食ふこと殊の外多ければ、かよわき女の腕一つにては、養育むこと容易ならぬに、ある時母は彼等にむかひて、汝等かくわが膝下にのみありて、親の脛のみかぢりゐること、いひ甲斐なき限りなり、あれ見よ屋根に鳴く烏は、もとより鳥類の身なれども、みづから働きてみづから食を求め、あますさへその親烏にむかひて、反哺の孝をつくすと聞く、汝等人と生れて、かくいひ甲斐なからんよりは、むしろかの烏にならんこそよけれと、愚痴まじりに戯れしに、不思議や七人の息子等の兩腕より、まつ黑なる羽翼をいだし、口自然とのびて、まつ黑なる嘴と變じ、見る〳〵七羽の烏となりしが、たちまちかなたの森をさして、飛びうせけるこそあさましけれ。

あまりのことに母親は、驚くこと大方ならず、急ぎ呼び返さんとすれども、はや詮術もあらざれば、兎やせんかくやと案じわづらひ、それよりたちまち疾病にかゝりて、ほどなく黄泉の客とぞなりぬ。

親にわかれ兄弟にわかれて、取殘されたる娘旭は、悲しさいふばかりなく、途方にくれてありけるが、かくてあるべきにあらねば、近隣の者の助けによりて、やうやく野邊の送りをすましたれど、まだ十歳にもならぬ乙女の、たゞ一人をること心細く、且つは兄弟こひしさに、あの時烏になりて飛びゆきたる、森の中に尋ねゆきなば、よしやかはれる姿になりとも、逢はれぬことはあるまじと、それよりやがて支度をとゝのへ、森の中へとわけ入りたり。

（**第二回**）。　わが兄弟のこひしさに、まだ乙女子の膽太くも、旭はたゞ一人森の中に分け入るほどに、梢に鳴きさわぐ烏は多けれど、みな一樣に黑きのみなれば、いづれがおのが兄達なるやさらに見分くる術もあらず、されどわれには見分けがたくとも、彼等には現在の妹なれば、われを見知らぬことあるまじく、見知らばわが邊に飛び來つて、通ぜぬまでも言葉をかけぬ道理はなきに、姿とともに心も變りて、われを見忘れたまひしか、さりとは情なしと、かき口說きつゝ行くほどに、とある清泉のほとりにいたりぬ。

さきの程より馴れぬ路を歩みて、足もつかれ咽喉も渴きたれば、しばしこの處にて憩はんと、

進みよりて水を掬ひ、一口飲むにその味甘露の如く、心地俄にすが〳〵しくなりければ、旭はうち喜びて、なほ面など洗はんとする時、水の底より金色の光閃きて、黄金の波逆捲くよと見る間に、忽然として一人の仙女、旭の前に現れたり。

旭は驚きあきれて、思はず岩の上にひざまづけば、かの仙女にこやかにうち笑みて「ヤヨ乙女この處はよのつねの人間の來り得べきところにもあらぬに、汝かよわき女子の身にて、いかなればかく漂泊ひ來つるぞ」と、おもむろに尋ぬるに、旭はとゞろく胸を抑へて、ありし仔細をくわしく語れば、仙女は聞きてなほ進みより、「そはさぞかし心細からん。さほど汝は眞實兄弟がこひしきか」と重ねて問ふに、旭は答へて、「眞實兄弟がこひしく候」といへば、仙女はうなづきて、「汝眞に兄弟こひしく思ふならば、吾汝が爲に逢はすべければ、それには汝わが言葉を用ゐて、今よりこの森の中を住家となし、汝が七人の兄弟のために、七年が間この處に住ゐて七個の兜をつくるべし、しかしてその七年の間は、たとへいかなる事ありとも、かまへて一句も語るべからず、さすれば七年の後になりて、汝の兄弟等人間の委にかへり、汝が前に現はるべし」といふに、旭は大いに喜びて、「然らばお言葉にしたがひて、今よりこの森にとゞまり、七個の兜をつくるべけれど、元來わが兄弟どもは、今いづこに居り候や」と問へば仙女また笑ふて、「そは何處と問ふまでもなし、すなはち彼處にゐる七羽の烏こそ、汝がこひ慕ふ兄弟なれ」と、指さす所をうち見やれば、かなたの岡の上に、同じやうなる烏七羽、翼をならべ嘴をそろへて、こなたに向ひ首をたれたるは、わが妹と見知りてか、喃兄上たちなつかしやと、いはんとすれど言葉通ぜず、たゞ顔を見つめたるのみ、涙に無限の怨みを籠めけり（下略）

かくの如く「幼年雜誌」が、文學的の題材を集めたるに對し、「小國民」は「學生の砦」と題する長篇修養小說を、約二ヶ年に亘りて連載したる外、新たに太華山人の手に依り、「義經記」「唐糸草紙」等を今様に改作し、毎號八頁づゝ附錄の形式を以て卷尾を飾つた。而もこれが挿畫は小林清親と其の高足田口米作とが專ら才筆を揮ひ、彫板には特に内海刀の落欵を添へて精美を誇つた。次に掲ぐるは、「小國民」三・四年度に於ける呼び物の隨一「學生の砦」の發端である。蓋し「幼年雜誌」と其の針路を異にせるは、これを以て判定し得られよう。

親のその子をやしなひ育つる苦しみは、今更いふまでもなき事なるが、子の生まれ落ちてより食べもの着もの汚れものゝ世話まで、いかなる日とても、親を苦しめざるはなく、睡りをさまして啼き立てゝは親を苦しめ、蒲團をはぎて睡りては親を苦しめ、雨にぬれて歩き、喧嘩して歸り、遊びすぎて歸る時をわすれ、する事なす事、親を苦しめざるはなく、特に小學校に通ふ年頃になれば、如何にもして試驗にはよき成績を得させ度し、先生はじめ朋輩にうとまれぬやうにしたし、終日腰をかけて居つては、足が冷えよう、辨當の御飯がさめぬやう、途中にて車

「小國民」と「幼年雜誌」

馬の難なかれよと、通學の間は勿論、朝夕寸時も子を思はぬ間はなし。

而して其心には、早く其子を成人させ、行末のおち着きたる顏見たしといふに過ぎず、少しも無理はなきものなり。されば子たる者は、一日も早く其身を立て、親に安堵さすにあらざれば其不孝の罪はのがれ難く、必ずそれだけの報いあるべし。

近きころ、信濃國諏訪郡の某村に一少年あり、鈴木春吉といひて、ひとり息子なり、親は五十の坂を四つ五つ越え、殊の外愛しいつくしみ、萬事春吉がいふにまかせ、學校に通ふ間は、清書の時には白紙一帖づゝ與へ、鉛筆も一本二本買ふは面倒なりとて一打づゝ買はせ、春吉は思ひの儘に使ひ盡し、又は朋友に分ち與へ、他の生徒の羨むほど富有に育て上げられ、金錢は何れの家にもあるものと誤り思ふに至れり。

春吉の家は農業を生活とし、二三の男女を使ひて、春耕夏耘の勞をなさしめ、古來の財産もあり、先づ貧しからざる方なり、然るに春吉は、はや小學校をも卒業したるに、いまだ一回も耕作に出でたることなく、此生業を好まざれば、他に適當の學問をなしたしとの望みにて、兩親も半年一年と打ち捨て置くうち、時に村役場の賴みにて、村會議案の筆耕や、村社祭禮の寄進帳の寫し上げなどを春吉に吩咐しに、村の世話役始め吏員が、お子樣の筆鋒は中々達者でござると譽めらるれば、親も心の中には惡からず、時々は出入の者に向つて、何か書き物がある時は、家の春にやらせなさい、四角張ッた字は中々上手ぢやと村長樣にも褒められましたと、目慢する程なりしに、春吉は、何れの學校へ通うて讀書するといふでもなく　毎日これぞといふ仕事なければ、先づ、時々舊の先生の宅へ遊びにゆきては、室内の飾りつけなどに氣をつけて額は油繪に限る、インキ壺はバネ附に限る、机かけが無ければならぬ、從來の本箱は書籍の大さに丁度しないから作りかへねばならぬ、硝子の置物は立派なり、すかしぼりの筆筒は手綺麗なり、筆筒に孔雀の羽は附物なり、と思ふまゝに飾りつけ、又折り〳〵の述懷には、學校にゐる時、試驗前には日が短くて困るものであつたが、かう毎日家にたゞゐてみると、日が永くて困ると、つまらぬ雜誌や小說本に其日をくらし、來訪め友あれば懇ろにもてなして、話相手となすゆゑに、つまり春吉に逢ふより、茶菓子を目的に訪ひ來る人多く、又一竿を肩にして釣魚に出でては、不釣功名只釣詩と隱者を氣取り、今年十六歲になれども、何の學問を以て身を立て、何の職業にて親を養ふといふ目的定まらざるなり、實に子を愛して敎へざるは親の罪なり、敎へて習はざるは子の罪なり、春吉、小學校を卒業してより、二年の間は爲すこともなくて過ぎ、向來如何なる人となるべきや、次號を見て知るべし。

と說き、榮華に育てる春吉が、偶々上京遊學の志望を懷き、兩親の許諾を得て家を出づる時より途上さま〳〵の出來事、さては滯京中に續出する危難、變災のかず〳〵は、長尺の映畫を見るに等

しく、讀者をして送迎に追なからしめ、個中一味の教訓を含めて深く三省せしむる所、亦尋常作者の及び難きものがあつた。而してこれが執筆者は、竹翁とのみ署名したが、果して何人の業なるかは知り難い。

恰も此の年十月の末、濃尾地方に未曾有の大地震突發するや、「小國民」は直ちに小林清親を現地に派して、其の慘狀を實寫せしめると同時に、躊躇せず義金募集に着手し、零細なる寄附金を集めてこれを岐阜愛知兩縣下の罹災小學校の新築資金に充當することゝし、次の如き館告を發表した。

今や、岐阜愛知兩縣下は、兵火後の慘狀よりも、一層甚だしき慘狀を極め、國家教育の大本たる小學校の如きも、多くは破壞燒失に歸し、幸ひに震災を免れたる兒童も、學に就く能はざるは、予輩の一日も傍觀すべからざることゝ思ふなり。故に、伏して慈善心に富める江湖諸君は半日の食を斷ち、其價を以て、兩縣下の罹災小學校新築費用中に、義捐あらんことを希ふ。諸君はたとひ一飯の飢を忍ぶとも、尙ほ居るに家あり、寢るに褥あり、毫も苦とする所なかるべし、國家教育の爲に、奮つて本館の微志を贊成せらるれば幸甚だし。

此義金は、岐阜愛知兩縣下の罹災小學校の新築費として喜捨する事。義金は一口金五錢以上の事。本館へ直ちに送らるゝも、義金取次所、即ち小國民の裏表紙に掲げある小國民大賣捌所へ屆けらるゝも適宜なる事。

右募集期限は、明治廿五年一月十五日〆切とし、該金を兩縣知事に送りて其配賦を乞ひ、其請取證等の報告は、小國民誌上に公告すべき事。

といふ規定であつた。果して此の擧一たび發表せらるゝや、遽然として天下讀者の同情を集め、豫定の〆切期日までに、壹百九拾九圓四錢五毛を得たので、これに九十五錢九厘五毛を學齡館より追加し、金貳百圓として各壹百圓宛を兩縣知事に向けて送り、以て義金募集事業を完成せしめた。猶發表の寄附者人名の中に、乃木勝典、乃木保典の兄弟が、各拾錢宛の喜捨をなし居ることを特記して置き度い。

三　明治廿五年度

明治廿五年度は、「幼年雜誌」が二卷となり、「小國民」は四年を迎へた。前年中四六判より菊判に變更せる「幼年雜誌」は、今年度に入りて再び其の形式を革め、四六倍大三十二頁、全三段組の新體となつて現され、著しく面目を更新した。

先づ表紙畫は、上段に千代田城と兒島三郎の櫻樹題詩（八號以下加藤清正遙に富士を望見する圖に改む）やゝ厚手漉色に墨刷を用ゐ、第一號の口繪は、特に五姓田芳柳に囑して、淡彩石版「加藤清正雪中猛虎退治」の勇壯なる（折込）二枚大に一異彩を放たせ、本文の挿畫には、新進の永峰秀湖

（松本楓湖の門人）を起てゝ、緻密なる圖版を多くし、其の他洋木和木取交ぜて、相當賑かな編輯法を採つた。

また本文の各欄は、從來の區別の外に、知らせの庭（時事）、競ひの庭（投書）の二欄を加へ、最も重要なる口繪には、間々淡彩の歴史畫を混へたるも、其の多くは墨一色刷の石版畫にのみ依憑したるは、なほ未だ聊か寂寞の感なきを得なかつた。

元來、一般少年雜誌に、四六倍判の形式を採用することが、果して當を得たるか否か、遽かに其の是非を決し兼ねるものがある。殊に「幼年雜誌」は表紙用紙薄きに失し、本文の頁數も少く、一見甚だ脆弱の感あり、これが取扱上にも、菊判に比して多くの不便を伴ひ、兒童の鞄や本箱に收むるにも、やゝ大形に失する等、一般的にこれを見て、此の形式を歡ばざる者の少くなかつたのは事實である。即ち「幼年雜誌」のかゝる形態の變化は、既に失敗の兆歴々たる者があつた。

只本年度の「幼年雜誌」の記事中、曩に「七羽烏」を寄せて、異常の好評を博したる漣山人が、「極樂園」（五號より十號まで）と、「阿房丸」（十一號特別附錄）との二篇を寄せ、而も共に從來の例を破り、言文一致を採用して、こゝに後のお伽噺の形式を樹立したる一事は、正しく特記しなければなるまい。蓋し今日までの漣山人の諸作は、其の殆ど全部が、馬琴調にあらずば其の亞流を汲む底のものであつたが、この「極樂園」と「阿房丸」とは、何れも純粹の言文一致に依りしものにて眞に一大英斷といふべく、此の意味に於て此の二篇は、後の少年文學を語る者にとりて、最も重要視せらるゝものであらう。

幼年雜誌第二卷表紙

今、極樂園の記述法を見るに、「むかし〳〵あるところに一人の王子があつた。この王子は、實に誰もその右には出られぬくらゐ、美しい書物や繪畫を澤山持つてゐて、世界中のあらゆる事柄は、その書物や繪畫で、一つも殘らず知る事が出來た。併したゞ一つ――極樂の有樣だけは、皆無知ることが出來ず、これが又王子には、一ぱん殘念に思ふところであつた」と、例のアンダーセンの物語を、かういふ調子で推し進めてゐる。

然るに次の「阿房丸」に至つては、一層平易輕妙の筆致を以て、縱横に描きこなし、こゝに始め

て「小波お伽噺」の形體を具備するに至つた。勿論、なほ多少の江戸式餘風は有つたにしても。

「さアさ撒くぞ〳〵、みんな拾へ」阿房丸は、やがて千兩箱の蓋をとりました。一座にゐならんだ者ども、例の扇助をはじめとして、上棟式の餅を拾ひに來た乞食の子供のやうに、手ぐすね引いて蚤とり眼、われ先にと身構へをします。――慾といふは恐しいもので、もうかうなると人間はふだん仲のよい朋友でも親戚でも、兄弟でも、自分より外のものは、跳飛ばして、寶をたくさん取込まうといふ了簡から、もう夢中になつてしまひます。

しかし阿房丸は、前にもいふ通り、生れついての大金滿家で、何一つ足らぬものなく、實に不自由といふ事を知らずに育つて來ましたから、この人達のやうに、慾といふものがありませんですからこれ等の人が、金が欲しさに血眼になつて、われ先にと騷ぐのが、いかにも不思議に見え、また興あることにも思はれました。

阿房丸は、やがて兩手に小判をつかんで、「ソレッ！」といひながら、群がる人中へ、バラ〳〵〳〵、すると大變、座敷は忽ち上を下、飛びこえるやら突きたふすやら、脇腹蹴られてうめく者もあれば、頭髪つかまれて泣く女もあり、素早いものは、人の掌中にあるものまで引つたくり、迂濶な奴は、わが目の前にあるさへ氣づかず、中に慾の深い者は、羽織をぬいで袋にかへこれに一ぱい受けようとして、かへつてさん〴〵に破られるもあり、または慾の少い者は、座敷の隅にうづくまりながら、思ひもかけぬ大判の、飛んでわが懷中に入る時もあり、泣くやら笑ふやら罵るやら、しばらくは割れるばかりの騒動、はては投げる者も拾ふ者も、すつかり草臥れて、其場へへたばつてしまひました

此の調子の文章は、何人にも面白く、而も頗る讀み易かつたので、「阿房丸」の評判は、又相當のものであつた。併し大體より云へば、本年度の「幼年雜誌」は、たしかに失敗と見るの外あるまい。

然るに一方の「小國民」は、其の改年の第一號に於て、先づ口繪には從來に例なく、木版十數度刷の極彩色を以て、「源經信三船の名譽」を描きて、絢爛無比の美を發揮せしめた。即ちこれが筆者は富岡永洗である。なほ同人はこれより後社中一統を率ゐて、兩三年間に亘り、「小國民」誌上に一大飛躍を試みた。又新年附錄として、太華山人の「開陽丸」と、露伴子の「慢心男」の二篇を、約十六頁に收め、且これが挿畫に和洋の木版十數面を費してゐる。露伴子が「小國民」に登場したのは、此の時が最初であつたかと思はれる。

又、別の附錄として、四頁大の西洋木版を以て、楠公の誠忠（小林清親筆）を加へ、本文中に挿入せる圖版は、大小六十三の多きに上り、而も平生と同一價格の、一冊三錢を維持したるは、其の廉價眞に驚歎の外なく、既に此の一冊に依りて、斷然「幼年雜誌」を引離し、絶對に追隨を許さぬものがあつた。

殊に本號卷頭には、石井研堂自ら署名して、「筆始め」と題し、其の執るところの主義方針に就いて、堂々として闡明するあり、これを創刊當時に比すれば、其の進歩發達の著しき、正に隔世の感を懷かせるものがあつた。

曆はすでに改まり、本誌小國民も、第四年の緒りに移り、明治廿五年の早春に、目出度く諸子と相見るを得る、其幸大いなり、依ツて聊か本誌の從來執る所の主義を重ね、益々諸子と斯の道を講究し、更に大なる幸福を得んことを希ふべし。

本誌の執る所の主義は、畏れ多くも、教育勅語の精神を貫くに外ならざること論なし。然して之を貫く方法に至りては、頗る多端にして、道義を以て骨髄となし、文科理科の學術を以て筋肉となし、完全なる人物を作るにあらざれば、其目的を達したりといふべからざるなり。是を以て、本誌其力を計らず、第二の學校を以て自ら任じ、朝夕諸子の間に親しみ、慈父母となり嚴師傅となり、益友となり、其德性を導き、其智能を啓き、上は國家の尊榮を萬歳に保ち、下は各自をして普通の學識を備へ、人生の眞快樂、眞幸福を得せしめんことに汲々たり、諸子亦此意を諒し、本誌をして其任を盡すことを得せしめよ、卽ち大に今日の幸福に優るものあらん。

と、平生の所懷を披瀝して、强く讀者に訴ふる所あつた。而も更に同年下半期に於て、又もや紙數を增して六十四頁とし、記事には研堂散史の「蟲國議會」「教育幻燈會」「西國巡禮」の外、太華山人は「日本十八勇將傳」に得意の史筆を呵し、霞城山人は「グリム童話」及び、四季をり〳〵の科學的記事を寄せて誌面を賑すなど、少年の益友として無二の好雜誌たらしめたのである。

四　明治廿六年度

遠近の妙用（茂木習古筆）

「幼年雜誌」は、前年度の否を覺れるものか再び其の形式を菊判に改め、且每號必ず多色刷石版畫を採用し、本文を五十六頁に增加して、其の外形漸く「小國民」の壘に迫らんとした。卽ち表紙畫は、上部に「松島艦航進の圖」を、下部に日本地圖又び「不忍池畔の競馬戲」を現し、標題の文字は、前年同樣巖谷一六居士

の揮毫に成り、特に新年號には、佐々木信綱の長篇唱歌と、漣山人の現代小說とを、約十六頁に收めて附錄とし、各欄を「心のかゞみ」「智慧のかぎ」「話のたね」「遊びの庭」「稚兒の花」等に分ち、且新に「おとぎ話」なる一欄を加へて、專ら漣山人の創作を收容した。蓋し「おとぎ話」なる新語がはじめて雜誌面に現はされたるは、此の時を以て嚆矢とする。

また其の記事中、依然として人氣の中心たる者は、漣山人の作品にて、とれのみは「小國民」にも追隨を容さぬ獨特の權威であつた。殊に從來は、一年僅に數回の執筆に過ぎなかつたのが、第三卷に入るや、新年以後、殆ど各號に亘つて連載せられ、とれが總題も、「一流幻燈會」と稱して、次々に場面を異にし、殆ど外國種に據ることなく、すべて創作の話材を盛りて、讀者を驚喜させた。

――なほ、此の「幻燈會」は、後に集めて一書とし、「幼年玉手箱」の一編となつて出版された。次に示せるは幻燈會中のピン物語の一節である。以て此の當時に於ける漣山人の作風を窺ひ知るに足りよう。

口上「お目通り寫し出しましたるは、皆樣御存じのピン(洋針)でムります。此洋針は今迄仕立師の家に使はれてゐましたが、今朝其店を掃除する時に、箒木で掃き出されて、往來へ出て來た所でムいます。さて此よりは洋針の獨語でムい。

「ア、つまらねェ〳〵、吾位つまらねェ者はあるまい、なんぼ體軀が小さいからといつて、乍憚錢で鍛へてある吾樣だ、こんな面白くも無ェ毎日々々ミシンに着けやがつて、ガチヤ〳〵使ひ廻しやがる、まだそれ計りなら可いけれども、錆びたと云つては鑢で擦られ、尖が止まつたと云つては砥石でごし〳〵研がれる苦しさ、此樣なつまらねェ役目があるものか然し仕立師の亭主め、此頃少し眼が惡いもんだから、吾が昨夜そつとミシンから落ちてゐたのも氣がつかずしかも今朝掃除をしやがつたから、其箒木の頭へ一寸止まつて、首尾よく此處迄逃げて來たは、吾ながら手際なもんだ、然しあんまり光ると見付かるから、成り丈知れないやうに、塵埃の中へ隱れてゐなけりやけんのんだ、然しまア斯うやつて首尾よく逃げては來たものゝ、これからは如何したものだらう、如何かして出世をしたいものだが。……それにしても

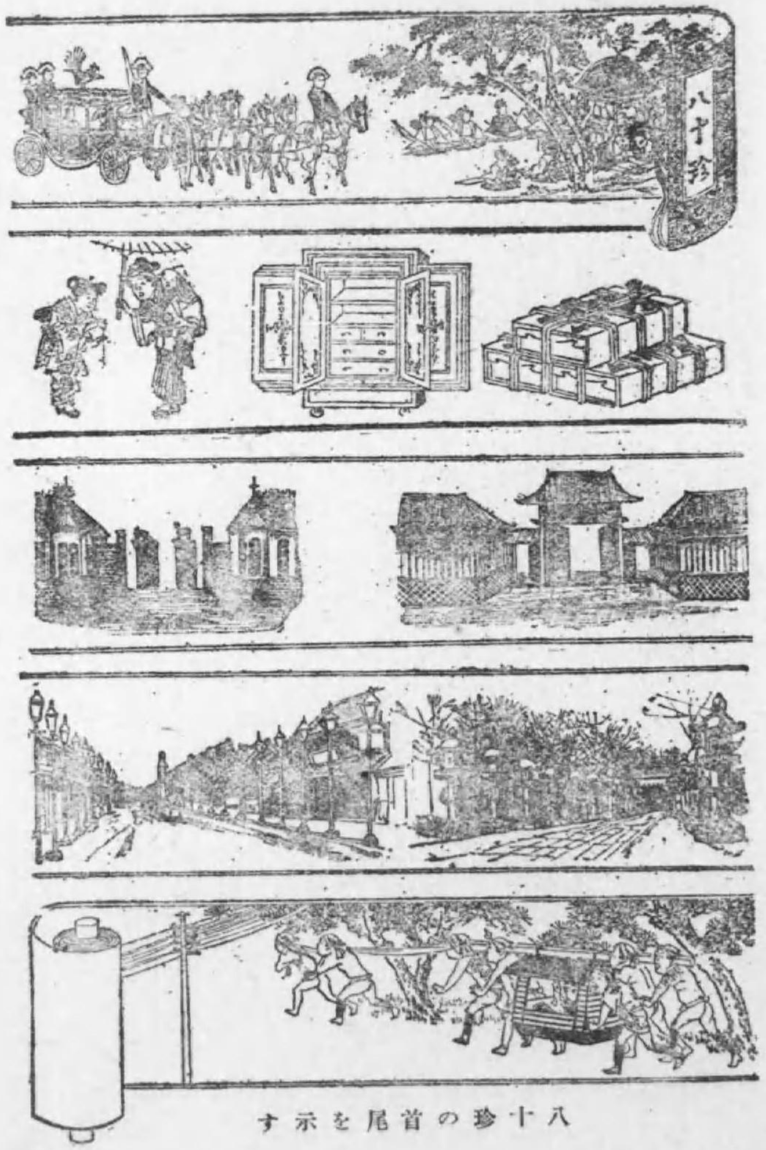
幼年雜誌第三卷表紙

「小國民」と「幼年雜誌」

こんな細ツこい體ぢやア、誰も相手にしてくれないから、何でも大きな體になつて、思ふさま威張つてやり度いもんだ、まてよ！　何がよからう？　釘にならうか、鐵槌でなぐられるのが辛いな。車の心棒？　あれも始終廻つて居なけりやなるまい。鐵道の線路も車に輓かれるのが苦しからう、柱もいゝが、重い屋根を背負ふのが大儀だ。……ハテ何にしたらよからうな？……ウンある〳〵、鐵管がいゝ、水道の鐵管、此奴に限る、これなら地の中で寢てさへすれば好んだから、此様な樂の仕事はねェ（下略）

かうした漣山人の連載物と並んで、例の大和田建樹は「幼年立志篇」の題下に、古今の英雄偉人を捉へ來り、勇健明快の筆を揮つて、其の性行を誌上に躍如たらしめた。尤もこれは「小國民」に見る太華山人の「十八勇將傳」や、「五將軍傳」に對立させたとも思はれ、且何れを何れと其の優劣を判じ兼ねるものであつた。

さて、「小國民」第五年は、前年同樣菊判六十四頁を維持し、新年恒例の附錄畫には、澁谷金王丸勇戰の圖（一色刷、富岡永洗筆）を添へ、口繪には砂目應用の多色刷を以て、「眞田幸村其の子大助に訣別する圖」を掲げた。これが筆者茂木習古は、既に「小國民」及び「幼年雜誌」に屢々麗筆を呵して讀者を魅了せる人、元來我國に於けるパノラマ製作の權威者だけあつて、其の遠近法の巧妙なることは、他の何人も及び難き點があつた。（二二七頁圖參照）なほ「小國民」は、本年度下半期



八十珍の首尾を示す

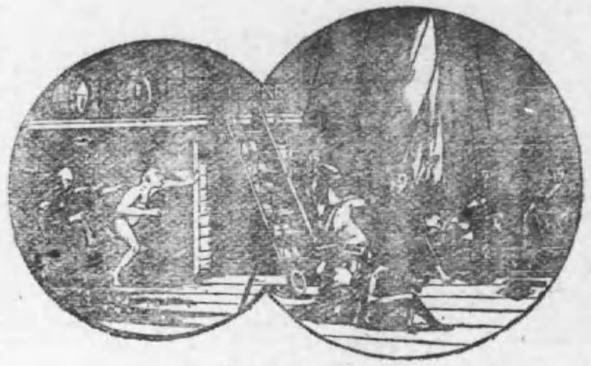
に入ると共に、再び大附錄畫を添へ「遠藤盛遠袈裟の首を提ぐる」凄愴なる一圖（富岡永洗筆）を配付した。

且また、第五周年の祝意を表する意味にて、「八十珍」と題し、頗る奇拔なる趣向の下に、全六十四頁の上部を繪卷物風に仕立て、古今事物の變遷を現し、一目の下に江戸と東京との風俗習慣、行事の相違を明かならしめたるは、非常の大奮發といふべく、次で又其の一冊を擧げて、福島中佐の大陸騎馬旅行の顚末もて埋め盡した。

卽ち、福島中佐號の口繪には、中佐が大風雪中に、亞爾泰嶺を踰ゆる圖（茂木習古筆）を揭げ、また標本畫には、伯林より東京までの行程地圖を、黑地に白線を以て示し、本文には、中佐の生ひ立より、現在に至るまでの經歷を精叙し、且單騎旅行に於ける各地の風俗、風景等の寫眞を、四十餘版の洋木を以て、如實に描き出したる如き、編輯者の努力の、並々ならぬを想はせた。

且、本年度の異彩として見るべきは、在土耳古の山田寅次郎が、或は寫眞に、又は記事に、其の地の名勝、異風俗、或は古話を寄せ來つて、珍異の趣味を漂せたことも、確かに大なる收穫の一に擧ぐべきであらう。

玆に「小國民」には、隱れたる一人の助手があつて、非凡の才を縱橫にせる事を見逃してはならぬ。これ後年陶器界の先覺として知らるゝ鹽田力藏である。此の人は自らの姓名をもじりて鹽男子と號し、或は鹹湖上人とも稱し、特色ある手腕と、豐富なる想像力とに依りて、專ら科學的記述に著しき新味を湛へたものである。



「活如來」の插畫

例へば、「地熱防護會議」の如き、或は「螫居時代」『切繼時代』の如き、常人の想像だも及ばぬ新機軸を出し、何れも數號又は十數號の長期に亘り、基礎を深奧なる科學に置き、間々哲學的批判をすら加味して興味を助くる等、相當の理解力ある讀者をして、不知不識の間に、學理の蘊奧を覺らしめたものである。

次に、鹵男子の小品「活如來」の一篇を揭げ、此の特色ある記者の志せる所を窺ひ見よう。こは今年度第十九號に出づるものにて、頁の中段には、大洋を航破する汽船の甲板上に於ける混雜の模樣を現し、其の上下段に組込みたる一頁讀切の短篇なるが、鹵男子の科學的記述の妙味は、これに依つて其の一班を想像し得られるであらう。

海上靜かに、波穩かなる晩餐後は、終日のつれ〴〵を拂ひて、浩然の氣を買はんと、悠々たる

船客の、思ひ〳〵に甲板上に逍遙せるも、殘紅一抹早く故郷の天に消え入りて、千里の皓月未だ龍蛇を跳らし出でざる間は、水天一色、四顧茫々として、寂寥いはん方なかりけり。

一夕、船中に怪物現れて、同船の婦女小兒等の驚き叫び逃げ走るを、我も見ばやと思ひてか、迂生は裸體の其まゝ躍り出でしに、背後より忽ち執つて押へられたり。スワこそ怪物御座んなれと、しつぺい返しに撚じ倒せば、アラ氣の毒や、船中の新知己にして、而も同國人なるボーイなりけり。これは如何にと引起して、さて事の次第を尋ねるに、思ひきや迂生自身が其怪物ならんとは、それも其筈、迂生は同臭の間柄とて、件のボーイに賂ひて、過分ながらも仕舞湯に浴したるに、其湯に浮游せる夜光蟲（ノクチルカ）の、迂生が身體髮膚に附きて、忽ち瑠璃光如來とぞ卽身成佛したるなりける。

とは卽ち、かの夜光蟲の現象を述べたるものであるが、想像力の巧みなる鹵男子は、雅致ある文章に依つて、生硬なる科學的事實を縱橫に生動させてゐる。かくして專ら「小國民」五年度より六年度に亘り、全誌面の到る所に、其の才能を發揮した。謂ふに子は、例の霞城山人とは、やゝ其の向ふ所を異にし、富麗なる自己の想像力に委せて、空靈神祕の世界を創造し、讀者をして遺憾なく想像の世界に陶醉せしめたる點は、他の遠く企及し難いものがあつた。

五　明治廿七年度

かゝる狀態の下に、第五年度を送つて、愈々第六年度を迎ふるに當り、「小國民」は空前の進歩を遂ぐべく、全誌面を上質紙に改め、口繪には和洋の多色刷と寫眞亞鉛版とを加へ、本文挿畫の大部分も、亦寫眞版を主とし、これが定價を倍額に上せ、我國の雜誌界に稀有といふべき異常なる大飛躍を遂ぐべく、五年度歲末號に於て、大々的宣言を發し、大に讀者を期待させたのであるが、突如內部事情によつて決行に至らず、却つて廿七年よりは、從來に比して紙數八頁を減じ、且三年度以降其の特色の一に擧げられたる洋木の標本畫すら中止し、豫期に反したる顚落振りを示して、早くも寂寞の感を與ふるに至つた。

然るに「小國民」の强敵「幼年雜誌」は、第四卷に入るや其の進步發展の目覺ましさが、明かに首肯せられる。卽ち先づ表紙の文字を橫列に改めたこと、口繪の多色刷石版畫に、一入の精彩を帶びたること等は曾て從來に見るを得なかつた點である。また欄別も、いさめ草、幼年立志談、おとぎ話、學びの栞、幼稚園、花むしろ（少年投書）、もみぢ葉（時事）とし、幼年立志談には、毎號大和田建樹の洗練せる筆致を以て、英雄豪傑の傳記一篇を揭載すること前年度に異ならず、又おとぎ話欄には、漣山人をはじめ、南新二等の、新舊とり〴〵のお伽噺を收め、挿畫も又各方面の腕達者を

網羅して、縱横無碍に健筆を揮はせ、特に科學的記事には西洋木版を多用し、花むしろ欄の連續漫畫は、すべて外國雜誌の奇拔なる挿畫を復刻して、獨特の新味を漂はせる等、極めて多種多彩に、全體を通じての挿入圖版は、寧ろ「小國民」を凌ぐの概があり、こゝに至つて兩誌の勢力は、正に伯仲の感あるを想はせた。

卽ち、「小國民」の第六年初刊が、從來に比して八頁を減じ、且新年附錄にも、一葉の石版大畫を添ふるみなるに反し、「幼年雜誌」は第四卷初號より、毎號本文七十二頁に增加し、猶ほ第一號には、幸田露伴の「文天祥」、山田美妙齋の「恩田木工」、江見水蔭の「雪松」、矢崎嵯峨の屋の「農夫仁吉」の四篇を收めて忠信孝悌の意を寓し、これが挿畫には、廣業、永洗、桂舟等いはゆる一流どころを集め來つて敏腕を競はせ、總紙數實に一百頁、挿畫大小五十五版に上るなど、其の威力は恰も前前年度に於ける「小國民」の盛觀を彷彿せしめるものがあつた。

殊に本年度の「幼年雜誌」に於て、最も目新しく感ずる一事は、小林永興が養父永濯の遺筆を模して、明治初期の小兒風俗を、最も克明に描寫し、清麗なる着彩を驅使して、獨特の手腕を振へることゝ、小林清親が「淡墨繪獨習法」に、獨自の筆法を以て、平易なる習畫の手本を描けることゝ及び博言博士イーストレーキが、「初步英語」に懇切なる指導振を示せること等にて、是等は實に本年度「幼年雜誌」の呼び物中の呼び物であつた。

なほ本年度四號以下、十一號に至るまで、都合八回に亘りて、松井柏軒が椽大の史筆を揮ひ、「東海俠」の題下に、一世の俠客清水次郎長の美談を傳へたるは、同人の歿後、未だ間もなきことゝて相當に注目を牽いたと想はれる。

第四卷時代の表紙

又「幼年雜誌」としては無くてはならぬ蓮山人も、亦殆ど連月缺かすことなく「奴鳶の幽靈」「鶯と風の神」「初午の太鼓」「紙雛と高砂」等、各時季々々に應じて題材を求め、多くは讀切の純然たる創作お伽噺を寄せ、いよ〳〵幼年讀者渴仰の中心となつた。なほ此の當時蓮山人は、京都の日出新聞に在社せる關係にて、これ等お伽噺の挿畫も、亦同新聞社專屬の畫工歌川國松の手に成るものが多かつた。

今こゝに、當時の蓮山人の作風を見るべく、「幼年雜誌」十四號(廿七年七月十五日)より、「蠅と

團扇」の一節を摘記しよう。これは「おとぎ話」欄の劈頭を飾れるもの、而して挿入の一圖は、即ち歌川國松の筆である。

文字でさへ、五月の蠅と書いてうるさいと讀ませます。實に世の中に虫も多いが、彼の蠅と云ふ奴ほど、うるさくも憎いものはありません。されば支那の學者も、此爲めに文を作つて、大に其罪を鳴らした位、御飯を喰べやうとすれば、膳の上へ集つて來る。書籍を讀まうとすれば机の邊を飛び廻る。また此斗りか、甚だしい時は傳染病の媒妁もする、實にはや有て益なく、無くも損なし、此世の厄介者とはこんな奴の事でしやう？

玆に又團扇と云ふ者があります。此は高の知れた紙と竹とで出來て居るものですが、暑い時には風を出し、寒い時には火を起し、數の功能のある中に、第一右の五月蠅い蠅をば、追立てる事に頗る妙を得て、麝に次いでの蠅の敵役は、實に此の團扇です。

或る日の事で、蠅は團扇の處へ遣て來ました。

團扇は見るより、おのれッ！　といひさま追拂はうとすると、蠅は其柄に縋つてさも神妙に、

（蠅）　ヤレ待て下さい團扇さん！　少し話す事がある。

（團）　何だ話がある？

（蠅）　サ、話と云ふのは他でもない。お前の身の一大事。

歌川國松の筆意

（團）　ナニ私の身の一大事だ、そりや聞き捨にならん。早う聞かせい！

（蠅）　されば さ、お前も兼て覺悟かは知らぬが、今でこそ團扇々々と、人に大層珍重されるがやがて秋風が立ち初めれば、お前はもはや棄たれ物、誰も顧視はしませぬぞエ。

（團）　シテ其秋風とやらは、一體何處に居るものぢや？

（蠅）　今は何處に隠れてゐるのか知れぬが、間もなく此世へ飛び出して、お前方を第一に追立てるから用心せんといかんぞエ。

（團）　成る程それは大變ぢや、したが蠅殿、其秋風とやらに逢はぬ樣には、何ぞ工夫は無いものかなア。（下略）

「小國民」と「幼年雜誌」

次に、泉鏡花が、「大和心」と題して、初めて其の作品を發表したのは、本年度「幼年雜誌」の下半期であつた。「大和心」は數回に亘る長篇小說にて、義俠勇敢の一少年が、其の愛犬と共に、橫暴なる一外人を屈伏せしめるといふ頗る痛快な物語であつた。尤も鏡花は、これより曩これと同巧異曲の「金時計」を作り、例の「少年文學」中の一篇「俠黑兒」の附錄として發表したことがあり、兩者共に少年の血を湧かせる好文學であつた。

然るに本年七月からは、愈々日淸戰爭が始まり、全國上下を擧げて、敵愾の氣分漲り溢れ、「討てや懲らせや」の討淸軍歌は、都鄙を別たず高唱され、出征の將兵を送る萬歲の聲々は、津々浦々に響き渡つた。こゝに於て一切の雜誌は悉く武裝を凝らし、國民の意氣をして彌が上にも昂上せしめたのである。

されば「幼年雜誌」も、亦これに準じて、逸早く「成歡の戰」を取上げ、「松崎大尉勇戰の圖」を掲げて、一段の光彩を添へた。卽ちこれが筆者は永洗門下の名和永年にて、固より錦繪風の想像畫に過ぎぬとはいへ、何分我國としては、前古未曾有の外國との戰爭ではあり、殊に其の劈頭の一戰に、松崎大尉は華々しき戰死を遂げたのであるから、國民の義憤ます〳〵激しく、大尉に對する悼惜の情も、亦甚だ深きものあり、「幼年雜誌」が、此の場面を描き出したことは、蓋し賢明の策と言つてよからう。

また、開戰後間もなく、漣山人は其の取材を轉じて時局に向け、「日淸戰爭地獄の閻書」と題して斬新奇拔の趣向を凝らし、戰死せる松崎大尉や、沈沒せる高陞號等を取扱ひ、大に誌面を賑はして、一入讀者の喝采を博した。かくて兩國間の戰爭は、日に月に擴大し、平壤の包圍攻擊に次いで海洋島沖の海戰、鴨綠江の渡江戰など、我軍大勝利の報は荐りに到り、更に一層國民の血を湧らせたが、「幼年雜誌」は亦これに卽應して、其の號外「征淸畫談」なる者を、每月一回づつ發行した。

第六年九號

一條成美の當選圖案

他方「小國民」は、改年と同時に、豫て懸賞募集（賞金參圓）したる表紙圖案を選びて、新年號以下約半年間に亙り使用した。これが當選の榮冠を獲たるは、信州の人一條成美にて、卽ち、幻燈の映寫を利かせて其の

一部分を差換へ得るといふ頗る優美高尚の圖案であつた。なほ成美は、後年與謝野鐵幹の「明星」誌上に、極めて新味ある小間畫を描き、青年子女の間に歡迎せられたが、惜いかな未だ其の天分を完成し得ずして夭折した。

これより曩「小國民」は、前年の期末より、歴史畫家の新進小堀鞆音を起用して、其の得意とする歴史、人物畫を描かせて、大に誌面に光彩を加へた。故實の正確なる、描線の緻密なる、絶對に他の追從を容さぬものがあり、此の點「小國民」の計畫の非凡なるに感ぜぬ者はなからう。謂ふに「小國民」は、既に數年來其の挿畫に關して、最も周到の用意を重ね、はじめ尾形月耕に依囑し、次に小林清親（並に田口米作）を立て、三轉して富岡永洗の富麗なる筆致を用ゐるに至つたが、今や新進の小堀鞆音を起用するに至つて、其の價値の一段と高まりしは事實である。而してこれ恐らくは太華山人の推挽に因るものであらう。さればこそ鞆音招聘に關しては、「小國民の挿畫」なる題下に、詳しく其の抱負を宣言してゐる。

本誌が、從來挿畫に心を盡せしことは、世の普く知る所なり。畫工を選み、彫刻師を選み、與に其の伎倆の十分を盡さしめて、明治の今日に成る挿畫の最高程度を、後世に傳へんと欲するの念あること、本誌の如きは恐らく他に其匹なかるべし。即ちこゝに小堀鞆音氏に請うて、其挿畫を揮毫せしめしも、亦これが爲なり。

小堀鞆音初期の版畫

小堀氏は土佐派より出でたる人にして、其故實に明かに、筆才の勝れること實に現今の壯年畫家中稀に見る所なるべし。從來絹畫にのみ心を專らにし、版下の如きは殆ど絶て描かざりしが故に、其聲譽の高きに關らず、諸子が印刷紙上に見るは、恐らく之を始めとするなるべし、諸子意を注いで鑑賞すること可なり。

蓋し古來版下畫は、概ね浮世繪師の手に成るものなるが故に、浮世繪師が最も版下畫に慣れて、殆ど版下畫を獨占するが如き有樣なり。而るに浮世繪師は多く、唯人物の動く形を寫すにのみ注意して、氣韻の最も重ずべきを知らず、殊に故實の如きに至りては、全くこれを不問不學に附し去り、或は奈良朝時代の人に建武中興頃の服裝させて、德川時代の家造りの中に住ませ、或は元龜天正の武夫に、鎌倉時代の鎧を着せるなど甚だしきは人物の姿勢を見よからしめんが爲めに、着けまじき所に鎧の袖を下げ、結ぶまじき

所に籐を結び、又は途方もなき形に太刀をつけさせ、紐を下げさすなど、言語道斷の事多し。繪畫は直接に人の眼を射るものにして、文字の足らざる所を補ひ、最も大なる益を人に與ふるものなるに、かくては一時の眼を僅かに喜ばすことはあらんも、益する所無きのみならず、少年の如きをば害すること甚だ多からん。されば本誌はこれまでも、かゝる誤のなからんことを期し、用意の周匝に、また巧妙なる畫工にのみ挿畫を托せしが、時に瑣少の誤あるを免れざりしは、遺憾に堪へざる所なりき。今や小堀氏に其挿畫を托するに至りては、其故實に毫末の誤無きはいふまでもなし、實に少年諸子を益し、且娯ましむること、大なるべしと信ずるなり云々。

以上の一文は、恐らく太華山人の筆する所であらう。如何にも此の言の通りにて、而も此の意味のことは、現代大部分の挿畫々家に對しても、正しく適用せらるべく、特に歴史畫に於て、一層其の感を深うするものがある。猶ほこゝに挿入せる一圖は、鞆音が「小國民」誌上に、はじめて發表する所にかゝり、かの赤穗浪士の討入の一場面を現したものである。

かくの如く「小國民」は、月耕、清親、永洗、鞆音と次第を逐うて其の執筆畫家を變更し、常に確實と新鮮とに工夫を凝らしたるも、其の科學的圖畫に至りては、到底日本畫家の能くすべき所にあらねば、それ等は正確なる原書に據るか、若しくは其の他の方法を講じて例の生巧館の西洋木版を利用し、努めて誤謬の無からんことを期し、以て和洋軟硬兩方面の特色を生かしたものである。

然るに、日清戰爭の勃發と共に、「小國民」はまた「幼年雜誌」以上の武者振を示し、直ちに表紙畫を改めて戰時色を漂はしめ、記事に口繪に、戰報の詳細を漏れなく掲げてこれが報道につとめ、就中黃海々戰の如きは全誌面の過半をこれに割き、兩艦隊遭遇のはじめより、激戰の經過、我將兵の勇敢等を、多くの戰鬪圖と勇壯なる挿畫とによりて、殆ど漏らす所なくこれを記述した。蓋し當時編輯記者の努力奮鬪は、眞に涙ぐましきものあり、これを今日の言葉を以て現さば、職域奉公を實踐せるものに外ならないのである。

大島少將の奮戰（尾竹國坡筆）

さて「小國民」は、開戰間もなく、尾竹國坡筆の「成歡激戰圖」を、多色刷石版に附して誌上に花を飾つた。尤も此の圖柄は、「幼年雜誌」の戰畫と同樣、依然錦繪の域を脫せず、殊に禮帽の大島少將が、馬上ながらに敵の軍旗を奪ふ有樣は、かの西南戰爭に於ける野津少將が、賊の軍旗を奪取する圖と軌を一にし、甚だ幼稚の感はあれ、砲煙叢がる只中に、多數の我兵が、隊

伍堂々として進擊する光景を描き、所々に戰死敵兵をも點在させるなど、紙上喊聲を聞くが如く、最も少年の意を得しものと覺しく、隨つて此の當時の「小國民」は、屢々版を重ね、其の發行部數に於ても、創刊以來の大部に達したとは、主筆研堂散史の直話なりしと記憶する。

こゝにいふ尾竹國坡は、即ち後の國觀にて、同人は當時鞆音の門に學び、而も未だ十三歲の少年畫家であつた。尤も國坡が、はじめて「小國民」に其の畫稿を送り、天才的幼年畫家として、廣く世間に紹介せられたるは、實に四年前のことにて、「日吉丸刀を奪ふ圖」を、二頁大に現して、早く其の筆勢の暢達を知らしめたのである。

却說、これより後も、「小國民」の口繪には、主として鞆音の手に成れる「原田重吉玄武門先登の圖」「平壤雷雨中の大激戰」「閑院宮殿下御奮戰の圖」等、次々に勇壯なる場面を描き出した。これ等は比較的軍裝にも誤り少く、且其の筆力の雄偉なる、正に作者入魂の技なるを思はしめたが、ただ添景の山岳、樹木等に至りては、鞆音一流の土佐風を彷彿せしめ、やゝ古今混淆の感なくもないのは、蓋し已むを得ないことであらう。

第九節　學齡館の少年書類

一　漂流譚其の他

學齡館は「小國民」の發行所である。此の書肆が、「小國民」を背景とし、其の勢力を利用して、幾多の有趣有益なる少年書類を出版して以て小國民讀者に提供したことは、既に前段屢々記述した所であるが、前後約十年に亙りて、如何に少年社會に貢獻したるかを、玆に總括して回想することとしよう。

石井研堂が、學齡館の「小國民」に據つて大を成したるは、恰も後年巖谷漣山人が、博文館の「少年世界」を舞臺として、所謂お伽文學の礎石を打樹て、遂に天下の第一人者となりしに等しい者がある。研堂散史は其の初め、かの「動物會」や、或は「十日間世界一週」や、「少年龜鑑」等の片々たる小冊子を編述したのであるが、やがて「日本漂流譚」を編むに至つて、全く前人未到の境地を開拓したるに庶幾い。「日本漂流譚」は、半紙判和紙和裝、四號活字百六十餘頁の大冊にて、清親、永洗、廣業等の口繪と挿畫とに飾られ、正續二冊より成れるものである。而して其の廣告文には次の如くに內容を概說して、讀者の興味を唆らせた。

本書は我國民の海國思想を養成せんが爲に編述されたる德川三百年間の漂流實談にして、或は漁獵、或は商業運漕業、或は公務のために航海し、暴風激浪の虐する所となり、帆裂け、綱斷ち、楫折れ、船摧け、糧食盡き、飲水空しく、千辛萬苦を嘗め盡し、絶海無人の荒島に漂着せるあり、裸身漆黑の野人窟に漂着せるあり、或は土隷として賣らるゝあり、兇賊の毒手に斃るるあり、國王の厚遇を受くるあり、土人を欺きて歸國するあり、其變幻の妙、文章の平易、一たびこれを手にする時は、遂に眠食を忘るゝに至るべし。

蓋し今日のいはゆる南方共榮圏は、すべて此の書の範圍内に屬し、チモル島、馬丹島、眞蒜、爪哇等は、何れも我勇敢なる冒險航海者の足跡を印した土地である。而も此の書は啻に此の地方の地理、風俗を詳說するのみならず、激浪暴風の難に遭うて、九死に一生を得んとする勇敢なる舟人の行動を寫すところ、眞に少年の志氣を鼓舞激勵せしむるものがあつた。

なほ研堂散史は、これを始として、次で「鯨幾太郎」なる一書を著し、鯨獵の壯快と、これに從事せる少年幾太郎が、廣漠たる大海洋を舞臺として、縱横に活躍したる情況を、一流の明快なる文章に書き現し、編中到る所に、專門的漁法をさへ加へ、巧みにこれを詩化したる手腕は、亦非凡といふべきであり、且小堀鞆音筆の、鯨獵に因る浦の賑ひを示せる口繪も、一々故實を正して描けるものであつた。

更に研堂は、日清戰爭の直後に當り、獨力を以て「航海雜誌」を發行し、大に海事思想の發達に寄與する所あつた。卽ち「航海雜誌は、國民の遠航性を發揮せんが爲に起る海事專門の雜誌なり。故に誌上に收むる所は、海事の學說雜報等、極めて趣味ある事項にして、文章は平易解し易きを主とす、又勉めて讀者の投書を募る、人もし一たび之を讀まば、膽大に氣勇に、蒼海を見る坦途の如くならん」と述べて、其の發行の目的を明かにし、これが目次を見れば、航海學の價値、コロンブスを追想す、ボート漕遊、船の所在を知る、太平洋、和船事業、ドツク圖解、龍田號の航路、漁翁島、船玉の神、天竺德兵衞、伊東海軍中將、亞米利加發見の歷史、ネルソン、ベルタン、濟遠號日記、戰鬪前の甲板、凱旋軍艦、浦鹽港の氷鎖、海圖等、數十項目を揭げたる有益の小雜誌であつたが、時期尙早の爲にや、或は他に事情ありしに因るか、遂に其の永續を見なかつたことは、甚だ遺憾とせざるを得ない。

二　少年博物志

明治廿六年十二月より、一部十二冊の叢書として、新に企てたる「少年博物志」は、實に現代稀に見る所の美本であり、且極めて意義深き好書であつた。これが發行の主旨に、

天下第一の美本出づ、題して少年博物志といふ、併し本志は、彼の動植鑛の三物に限れる如き

領内の狹き博物書に非ず、凡そ天上地下、及び人間の事物にして、眼に見るべく、圖に示すべきものは、皆網羅して此中に收む。珍奇の物見るべく、實用の物見るべし。其記事は正確平易にして、傍訓を施せり。實にこれ學生無二の金玉なり。本志發行に關して、弊館の奮發はいふまでもなく、彫刻印刷等の專任技師も、亦其業の進歩を促し、兼て熟練の效果を示さんとて、頗る注意を加へたり云々。

と語つてゐるが、これ必ずしも誇張の言ではなく、又天下第一の美本といふも、遲疑なく首肯するに足るものであつた。此の書の體裁は、四六倍判十六頁、一冊の價六錢と定め、其の表紙は丹碧金色を以て縱横に彩り、眞に絢爛眩目の美を呈露させ、口繪には、富麗濃密なる純木版十數度刷を應用して、動植物の生態を寫し、飽くまでも日本美術の特色を保たしめ、更にこれが本文には、最上質の洋紙を選び、當時なほ未だ一般に不廉を唱へたる寫眞亞鉛版を惜氣なく利用する等、我國の出版界に未だ曾て見ることを得ぬ極美の書冊であつた。

勿論、これが編輯者も、或は各記事の執筆者も、何等明記するところ無かつたが、只其の記述の正確と、簡單明瞭とを旨とし、短きは半頁に充たぬ者さへあれど、十分に要旨を玩味知了し得るに力めた。或はこれ例の鹵男子等の手に作られし者か、否か。

今其の第一、第二編の收載目次のみを掲げて、內容の大體を想像しよう。

第一編。口繪極彩色木版　孔雀の圖（富岡永洗筆）

記事。　獅子。雲の種類。海生物。孔雀。林檎。鯉。稻。金閣銀閣。日光山。綿。石炭。ホルン岬。パナマ峽。水牛。英國議院。大根。（亞鉛版二十個挿入）

第二編。口繪極彩色木版　菊花の圖（名和永年筆）

記事。　帝國議會。蟹。菊。夜半の太陽。鶴。甘藷。鐵。虎。ブラジル國。月世界。世界博覽會。熱海。鯨。陽明門。那智の瀧。秋海棠。茶梅。鰈と板魚。舟か車か。（亞鉛版廿四個挿入）

即ち十六頁の本文中に、廿數個の圖版を挿入して、記事と圖版とを相交錯せしめし點は、後年頻出を見たる教育畫報、理科畫報等に先行せる者と思はれ、正に發行者と、編輯者と、技術者とが、いはゆる三位一體となり、多大の犧牲を拂つて首尾完成したること言ふまでもなく、就中發行者が採算を無視して、かゝる極美の教育的良書を發行せる勇氣は、眞に敬服の外無いのである。

三　露伴の印度童話

幸田露伴子が、夙に印度の闍多伽に材を求めて、幾多未聞の奇話を紹介した一事は、亦忘るべきではあるまい。即ち次に示す所は、「小國民」五年十三號に見ゆる「棄老國」の一節にて、我國の姨捨山傳說の源流として知らるゝものである。

むかし〳〵棄老國と號ばれたる國ありて、其國に住めるものは、自己が父母の老い衰へて、物の役にも立たずなれば、老人は國の費えなりとて、遠き山の奥、野の末なんどに驅り棄つるを恒例とし、また一國の常法となし居けるが、こゝに一人の孝心深き大臣ありけり。日頃やさしく父に事へて孝養怠りなかりしが、月日の經つは是非なきことにて、其父漸く老いにければ、國法に順はむには、山にもせよ野にもせよ、里距れたる地へ棄つべくなりぬ。

されども元來孝心深き大臣の、如何で然る酷きことをなし得べき、事露はれて國法に背きたる罪に問はれなばそれまでなりと、深く地を堀りて密室を其中に造り設け、表面は那處へか棄てたるやうにもてなして、父をば其室に忍ばせ置き、猶孝養を盡しける。時にたま〳〵天の神ありて、突然に棄老の王宮に降り、國王ならびに諸臣に對ひて、手に持てる二の蛇を殿上に置き見よ〳〵汝等、汝等此蛇のいづれが雄にして、いづれが雌なるを別ち得るや、別ち得ばよし、別ち得ずんば、國王よく聞け、汝を亡ぼし、汝の國をも我神力もて滅すべし。七日の間に此棄老をば殄すべきぞと、嚴然として詰げければ、王は大きに驚き畏れ、群臣と共に頭をあつめて答辭をなさんと議れども、誰とて蛇の雌雄をば見定むべくもあらぬまゝ、たゞ當惑するばかりなり。

國の大事ぞ、等閑になせそ、若し何者にもあれ、天神の難問を能く解き開くを得ば、厚く賞與をすべきなりと、一國内に洽く知らしめて答辯を募るに、應ずるものも更になし。彼の大臣は家に歸りて、若し我が父の知ることもやと、例の密室に至りて、此由を述べけるに、そは難澁きことにあらず、軟耎にして細きものを蛇に近づけて其蹂ぐを雄と知り、靜かなるを雌と知るべしと教へければ、大臣は急に王宮に行きて此旨を云ひ出で試しみるに、果して其言の如く雄雌紛るゝかたもあらず、王は悅びて天神に對ひ、此は雄にして此は雌なりと答ふるに、其答誤りなければ、天神はまた一大白象を現して、此象の重さ幾斤兩ぞ、答へ得ずんば國を覆へさんと難題を出しぬ云々。

眞西遊記挿畫（工甘利とあり）

これより曩露伴子は、この種の物語幾種かを集輯し、「寶の藏」と題する一書を作り上げて、少年學齡館の少年書類

の好伴侶たらしめた。其の書の廣告文には、

此度露伴子が、少年諸君に紹介さるゝ寶の藏には、珍しく貴き眞實の寶が、さま〳〵籠めてあります。そして少年諸君の獲るにまかせてあります。鍵をもつて居らるゝ少年諸君は、隨意に戸をひらいて、其寶をおとりなさることが出來ます。實に面白い不思議の藏！　眞に美麗高尚の寶！　はて、どんな寶でせうか、寶は金銀？　寶石？　それよりも良いもの？　藏は世界で最も賢い人の建てたものです。はて、誰が建てたのでせうか、どの樣な鍵を用ゐたら開くことが出來ませうか、諸君は其鍵をたしかに持つてゐらるゝ筈です、不思議！　不思議！　鍵は？　鍵は？　智慧の鍵！　智慧の鍵！

と、極めて平易流暢なる言文一致體を以て記述してゐるのが珍しい。併しこれだけでは、餘りに抽象的に失して、よく內容の詳細を知り難い憾があつた。然るに露伴子は、更に一歩を進めて「眞西遊記」を作り、大に少年の志氣を鼓舞する所あつた。「眞西遊記」は、かの有名なる玄奘三藏の西域記に取材したる實說の印度紀行なれば、俗間に流布せる「西遊記」とは著しく其の趣を異にし、思想堅固なる三藏が、萬難を排して不毛の地を踏破したる精神氣力は、脈々として紙面に漲り、頗る迫力ある著述であつた。蓋しこれ露伴子が獨特の壇場にして、斷じて他の模倣追隨を許さぬものといふべく、さればこれが出版豫告にも、

眞西遊記表紙（木版多色刷）

世に名高き西遊記は、支那の一大奇書にして、誰しも知る所なれども、中には虛妄怪誕、甚だ事理に遠きことのみ多くして、我が鳳雛麟兒たる明治少年諸子が學窓の友とすべき者にはあらず、此の書は露伴氏に乞ふて得たる玄奘三藏が眞傳なれば、悟空八戒の如き妖精等は籠中に跳梁跋扈せずと雖も、彼の英邁勇猛なる玄奘三藏が、道の爲に萬死を冒して、十七年の星霜を西方諸國に費し、終に支那宗教上文學上に大功を樹てし事實。

は、殆ど記して漏らすなし。若し夫れ玄奘が、風骨凜々、精神烈々、西の方陽關を出でて故人無きところ、胡馬に鞭つて茫々たる沙漠を越え、雪に葱嶺に惱んで辛うじて印度に入り、苦學永年志氣遂に撓まざりしに至つては、豈諸子が學窓の友とするに足らずといふべけんや云々。

と強調し、此の書の感化の絶大なる旨を宣べてゐる。蓋し露伴子が少年物として著したる書類中正に白眉の一作と言ふに足るであらう。

四　戰爭と少年書類

霞城山人と「小國民」とは、最初より密接の關係を有し、隨つて山人が其の經營にかゝる張弛館を廢して、京都に歸臥したる後も、「小國民」に對しては、絶えず彼の地より稿を寄せ、內外の新智識を織り交ぜて麗筆を揮ひ、少年學術の涵養に寄與する所甚だ少しとしなかつた。而も山人は、今次の日清戰爭に際し、前古未曾有の大勝利に感激のあまり、獨特の意匠を凝らし、戰爭の經過を其のまゝに脚色して、「少年の夢」なる一書を著し、傍註して我軍勝利の四字を冠せしめた。これは菊判の美本にて、彩色刷の口繪其の他三十餘面の挿畫を加へ、極めて趣味豊かなる筆致を以て、間々滑稽を混じ、不知不識の間に、大勝利を謳歌したるもの、其の出版の廣告に依れば、

戰爭が見たいといふ熱望が終に夢となり、三少年先づ風船を飛ばして朝鮮に渡り、東學黨の磔の雨に手に汗を握り、京城の門外捕虜の體操に臍に茶を沸かし、黃龍に騎りて辮髮を鞭にし、猛虎を斃して新鬼童丸十萬の淸兵を走らす、活如來の來迎、革囊中の旅行、海底の異魚に豊島を知り、雲間の幻影に平壤を認め、中秋の月、避易の腑、金塊變じて勳章の明星となり、端艇化して檣頭の瑞鷹となるの類、果ては和尙島水雷蛸の大怪物、霞城山人が獨特の妙筆を揮ひ、奇想天外より來る。而も少年書類に缺くべからざる敎育薫陶の諸要素を含み、挿畫また極美少年社會近時著書多しと雖も、未だ曾て此の如く興味の多き奇書あるを知らず云々。

と記して、此の書の內容を明示してゐる。また、これと相前後して出でたる、佐竹萬三（秋雨）の、「少年と戰爭」と題する一書も、前記「少年の夢」とは別の意味に於て、少年机上絶好の讀物といふに憚らない。

これが著者佐竹秋雨は、海軍兵學校に敎職を奉じたる人にて、外國語の造詣深く、加ふるに多數の軍事書類に親炙する便宜あれば、夙に平易なる筆致を以て、軍艦兵器の解說を試み、屢々「小國民」誌上を賑はせ、隨つて讀者とも相識の間柄なれば、此の書一度出づるや、霞城山人の著述同樣至大の歡迎を受けたものである。但「少年の夢」は、主として幼少年者を目標とし、「少年と戰爭」は、專ら靑少年階級を目的とせることといふまでもなく、隨つて後者の內容には、多數の珍奇なる寫眞版を原書より轉載して、一入の目新しさを感ぜしめた。而も其の內容は、これが宣傳文に依りて明にするを得よう。

少年の見るべき戰爭とは何ぞや、將來の戰爭なり、文明の戰爭なり、奇觀の戰爭なり。現今歐洲著名の軍人、及び政治家が、一代の經驗卓識を以て、歐洲列國の現勢を看破し、今より數年

ならずして、震天動地の一大戰爭が、歐陸に現れ來るものと斷定し、相謀つて戰爭未來記といふ者を編せり。因て今其中より、新奇壯絶の戰爭を抄譯し、一紀事毎に編者が剴切の意見を附し、殊に鮮明なる寫眞畫を加へたれば、開卷活々、眞に實戰を看るの思ひあり、卽ち電燈の激戰あり、槍銃の晃めくあり、英佛艦隊の奮鬪は、地中海の水を朱に染め、氣球より墜落する爆發物は、精悍の英兵を震慴せしむ。其他奇異斬新の戰況は、紙上に動いて躍々たり云々。

と語り、未だこれを見ぬ少年の胸裡に衝動を感ぜしめた。蓋し此の一書は、歐洲各强國の軍備と武器の發達と、其の戰野の廣大とを絮說し、將來惹起すべき戰爭に就いて、一大示唆を與へしやに想はれる。さればこそ京都日出新聞の批評の一節にも、「電燈の夜戰、空中の爆裂彈、其他各國の軍備、咄嗟の間に各自が敵地に進入せんとする軍略の妙計神業、說き出して奇ならざるなく、而して我軍備の益々大切なる所以に及び、少年の志氣を鼓舞する至らざるなし」と記して、最大の贊辭を贈つてゐる。

五　修身畫訓其他

菊半截の小型判に依り、彩色畫と文字とを、各丁毎に相交錯せしめ、畫を見ながら文を讀み、文を讀みながら畫を娛むといふ、新しき趣向の下に、これが編纂を企て、題して「修身畫訓」といふ。其の文字は至極平易にして幼童にも解し易く、其の畫は極めて美しく、眞に可憐可愛の好册子であつた。

此の叢書は、毎月三册若しくは四册づつ發行を豫定し、而も一册の價貳錢といふ安價のもの、第一編「すゞめ子」、第二編「二宮金次郎」、第三編「石屋六助」といふ如く、主として偉人英傑の幼年時代と、教訓的要素を含める童話とを取混ぜ、表紙挿畫ともに雅致ある石版多色刷を用ゐ、而も强烈卑俗なる原色を避け、すべて淸素なる間色を驅使して、飽くまで氣品を保つべく工夫を凝らしたる點は、當時として敬服すべきものである。卽ち遙かに年を距てゝ、世間歡迎の焦點と成れる幼年用の繪本、又は繪雜誌の類が、夙くこゝに胚胎せることをも想はれ、隨つて「修身畫訓」の企劃は極めて意義深き者があつたと見てよい。

然るに此の小型叢書の漸く世に出でし頃は、恰も日淸戰爭の最中とて、戰爭双六とか、或は戰爭を描ける錦繪類にこそ、多くの興味は注がれたれ、この豆本「修身畫訓」は、遂に顧みる者少く、不幸時機に適せずして中絶するの外なきに至つたのは、事小なりと雖も、甚だ惜むべき事であつた。卽ちこれを想ふに、如何なる良書と雖も、時機に適せぬ場合は、折角の好計畫も、成功を見るに至らずして終ること、古今共通の因緣といふべきであらう。

なほ學齡館が發行したる少年圖書は、以上列擧したる者の外、或は露伴、鷗外、思軒、太華、霞

城、得知の六大文學家の作品を集めたる「少年雅賞」、又は太華山人の編纂かと思はるゝ「少年日本史」、霞城山人の「太郎冠者」「教育動物園」等、十種二十種の多きに上つたが、中にも「少年日本史」の如きは、其の題名に違はず、上代より近世までの主なる事歴を、平易明快の筆を以て記述し且富岡永洗が入神の密畫を、大判を以て二十餘面の多數に現はし、善美を盡せるものであつた。然るにこれ等の好書は、學齢館の廃業と共に、悉く市場に影を絶ち、最早や今日にては、其の名のみ存して、其の實を得難きは、甚だ遺憾とせざるを得ない。

第十節　博文館の少年書類

一　幼年玉手箱

「少年文學」の斬新なる企劃によりて、一大成功を收め、同樣の形式を用ゐた「歴史讀本」も、亦豫期以上の好果を得るや、更に進んで「幼年玉手箱」十二冊の出版に着手したのは、恰も三十六年一月であつた。此の叢書は一見「少年文學」の變體なるが如く、或は「幼年文學」の再現を思はしめたが、事實はやゝこれに反する者であつた。元來「少年文學」は、初め硯友社一派の手に成れる創作、續案を主として起り、次で偉人英雄の傳記を加味し、且これが執筆者をも、獨り硯友社にのみ依らず、多方面に亘りて其の適材を索むる等、出版者としても、相當の考慮を拂へることは認め得られた。

然るに今度創刊せる「幼年玉手箱」は、これとは全然別種の方向を辿りて、漸次成長を遂げんとした。即ち、其の形式を見るに、四六判百二十頁内外、本文には、專ら五號活字を使用せる關係にて、これを「少年文學」に比すれば、約五割方の分量を加へてゐる。併し「少年文學」に四號活字を以てして、「幼年玉手箱」に五號活字を用ふるは如何なる意味か、此の點甚だ是認し難いものがあつた。

なほ又「少年文學」が、表紙、見返、口繪及び挿畫等に亘りて、善美を盡せるに反し、「幼年玉手箱」にありては、申譯的に表紙と見返とに木版着色刷を應用せる以外、本文中には、一葉の挿畫すら無く、或は「少年文學」が、純粹の日本式製本に依りて、堅牢を旨としたるに異なり、これは赤紐の大和裝を以てして幾分脆弱の感もあり、前者の價十二錢に比して、後者は十錢ながら、其の大體より觀察して、何人も恐らくは前者を迎へ、後者を顧みなかつたかと想はれる。

次に其の全體の書目を擧ぐれば、第一編「狂言春駒」巖谷漣山人。第二編「紀元節」大川秋水。第三編「子供のてがら」高橋太華山人。第四編「幻燈會」巖谷漣山人。第五編「遊戯指南」坂田霧山人。第六編「幼年劍舞」江見水蔭。第七編「福笑ひ」南信二。第八編「西洋滑稽落語」松居松葉

第九編「小兒四十八癖」石橋思案外史。第十編「帆前船」坂田霧山人。第十一編「海戰の餘波」泉鏡花。第十二編「バノラマ」細川風谷の十二冊より成り、一ケ年未滿にして完結を告げた。

以上掲ぐる如く、「幼年玉手箱」の作者は、「少年文學」の執筆者が其の過半を占むるも、中には無名の作家もあり、且此の叢書の題意に適するや否や、稍疑ひなきを得ぬもあり、これが取材に統一を缺ける等も、其の成功を見なかつた一因ではあるまいか。

二　繪入幼年全書

特に繪入の二字を冠して、前記「幼年玉手箱」と相前後して出版されたものは、全部和紙和裝の幼年全書（半紙半截）であつた。此の叢書は多分坂下愛柳の監督の下に作られしやに想像せられ、其の形式の異なれると、且愛すべき挿畫を多用したる點に於て、幼年兒童の机上に、絶好の伴侶として迎へられたことは疑ひない。

其の中の一冊、坂下愛柳編の「幼年歷史」に就いて、これが紹介文を見るに、「是れ幼年の一代鑑なり、家庭快樂の紹介者なり、人生立身の恩惠者なり、卷中の一面餘白を剩して稚兒の誕生日、撰名者、父母、親緣、乳母の姓名より稚兒成長の模樣、及び小學卒業に至るまでの履歷を記入せしむ。加ふるに美麗なる挿畫數十箇と、唱歌、記憶日、歷史話、年中行事をも載せたり、あゝ是れ美麗なる書畫帖なり、優和なる金誠集なり、重豐なる日記帳なり、幼年これを携へ、父母これを傳へ、家庭團欒の下、徐かに之を讀み聞かせなば、一國の美風は起らむ、幼年は勿論、苟くも家門の繁榮を望まるゝ父母達は、本書を携へらるべし」と記し、其の意匠の斬新を謳つてゐる。

今、例に依つて、其の題名と執筆者とを記せば、繪入日本歷史（永江正直）。繪入幼年唱歌（佐々木信綱）。繪入幼年歷史（坂下龜太郎）。繪入修身讀本（鈴木倉之助）。繪入日本地理（鎌田勝之進）。繪入作文大意（田中勇吉）。繪入幼年遊戲（坂下龜太郎）。繪入理科讀本（坂下龜太郎）。繪入遊戲算術（坂下龜太郎）。繪入萬國歷史（加賀喜一）。繪入商業讀本（坪谷善四郎）の十二冊を出し、何れも定價一冊拾錢を唱へた。

尤も此の叢書の豫定目錄には、猶多くの種目を擧列して、幼年讀者の注目を牽いたが、何故か右の内の「繪入萬國歷史」の如きは、同形式を保つべき叢書なるに、これを四六判に改めて洋紙を使用するなど、其の最初の武者振の華々しかりしに比して、最後は甚だしく不統一に墮し、而も博文館の企劃變更に累せられ、前記の十二冊を以て一先づ終刊とした。

恰も、此の前々年の頃、澁江保（幸福散史）は、グリム童話中の奇談怪話のみを集めて、「西洋妖怪奇談」と題する一書を編纂した。卷中には小林清親の奇々妙々の挿畫十數面を加へ、甚だ趣味ある少年書であつたが、其の譯文は聊か少年に親しみ難く感ぜられた。

三　征清畫談

明治廿七年の秋、日清戰爭の漸く酣なるに當り、「幼年雜誌」の號外として、「征清畫談」の發行を企てたことは、蓋し意義淺からぬ者があつた。謂ふに時代を劃すべき此の大戰爭に當り、これを將來の少年に傳ふるに足るべき、最も正確詳密、且平易明快なる記錄を作る必要は、今更いふまでもなく而して「征清畫談」は、此の要望に應ずべき、好個の書冊と見るべきであつた。

さて、此の書の編輯主任は、軍事的記事に特殊の手腕を有する江見水蔭を擧用し、記事と共に重要なる繪畫に對しては、これも軍事畫の名手として評判高き武内桂舟に依囑し、二者共に全力を傾けて、其の精美を期したことは、正しく一大偉觀とすべきである。

かくて「幼年雜誌號外征清畫談第一」が、美裝を凝らして現れたのは、實に同年十月廿五日で、以後毎月一回定期發行といふ觸出しであつた。即ち先づこれが表紙は、例の生巧館の洋木を以て、上部に、激浪澎湃たる大洋の日の出を描き、下部の餘白に口繪目次を刷出し、周圍には無數の蜻蛉を群飛させて勝利の象徴とし、紙數百頁、口繪寫眞版四丁、內一丁は折込の大版を用ゐて一大光彩を放たしめた。

玆に一言を費さねばならぬ事は、寫眞銅版の利用である。曾て數年前、猶興舍製版所が、寫眞亞鉛版を以て、各雜誌の依賴に應じた一事は、現に前記せる通りであるが、同じく寫眞版とはいへ、「征清畫談」の口繪に使用せるは、かの小川一眞の創始せる寫眞銅版であつた。即ちこれを從來の亞鉛版に較ぶれば、版面緻密にして印刷上の效果著しく、且耐久力も優れ、洋木及び寫眞亞鉛版に代つて、將來に於ける雜誌の口繪、並にこれが挿畫として利用すべき價値の絕大なるものあるを認めさせた。

征清畫談の表紙

これより曩同年七月、博文館にては、初めて小川一眞の寫眞銅版を採用し、「日清戰爭實記」の口繪に充てゝ大に江湖の喝采を博したが、更に「征清畫談」にも、同じく寫眞銅版の口繪を加へ、名將勇士の肖像、戰地の風物、及び武內桂舟が、特に靈腕を揮へる、「大島少將船橋里の奮戰」（第一號十月廿五日發行の分）

と、「第二軍航進の圖」(第二號十一月卅日發行の分)とを挿入し、見る者をしてさながら實戰場裡に在るを想はしめたのは、確かに此の寫眞銅版の效果に依るものと言つてよからう。

「征清畫談」は、總紙數百頁に上り、其の第一號の內容をば、「高麗の浪風」、「豐島の朝霧」、「牙山の靑嵐」、「平壤の殘月」、「黃海の渡雁」等に別ち、これに附するに「日本魂」、「支那玉」、「戰爭文學」の類を以てし、東學黨の反亂より、黃海大海戰に至るまでの記錄をば、ほゞ順序を追うてこれを記述し、三十餘面の日本木版挿畫を以て、錦上に美花を添へたのである。

武內桂舟が、此の冊子の挿畫を描くに當りて、いかに周到の用意を拂へるかは、亦想像の外にて將士の服裝は更なり、戰地の風物にも心を盡し、且一圖を作るにも細心事に當れるものゝ如く、例へば黃海々戰の場面にも、「大鹿島邊煤煙見ゆ」の一圖は、只一面、茫々として涯なき水平線の彼方に、雲とも煙とも分かぬ一條の煤煙を描きて、敵艦の出現を思はせ、或は死を以て火藥庫を守れる比叡の一水兵が、全身完膚なきまでに、痛々しき重傷を蒙り、血は滾々として鈑上に漂ひ、戎衣裂け帽飛ぶも、猶ひとり嚴然として直立せるまゝ瞑目せる光景など、單なる木版畫にはあれど觀者をして感激措く能はざらしめた者で、挿畫の效果が、いかに本文を生かすかを思はせた。なほ次に掲ぐるは、第一號中に見ゆる「斥候の露營」と題する一文である。謂ふにこれは詩筆に富める水蔭得意の壇場といふべきであらう。

斥候隊町口中尉、竹內少尉以下十餘騎は、八月九日の夜、中和の林中に分け入りぬ。朱染亭の古堂に、一人の騎哨を出して、他は長驅の骨を休めむと、木の枝に馬を繫ぎ、草を褥にして橫はりぬ。されども秋の夜の肌寒く、白露に戎衣を濕して、夢結ばれぬは人々同じ。思へば任務いと重し、國に盡すの赤心は、此の時にあらはすべきに、明日は如何にして偵察を遂げんか、如何にして敵狀を索らんかと、それのみ心に描きてある中、晝のつかれに何時しか知らず、誰先きとなく後となく、とろりとろ〳〵と睡眠に就きぬ。

夜は更けて、最早や曉に近からんとするに臨み、騎哨の交代すべき時は來りぬ。一卒は起き上りて、露にぬれたる毛布を疊み、夜すがら蹄にて土を搔きて止まざりし馬の背に掛け、其上に馬具を載せて身仕度整ひぬ。枕にしたる背囊を擔ぎ、組合せたる銃の中より、我のを撰り取りて直ちに跨りぬ。手綱をゆるめて古堂の方に步ませ行けば、先なる騎哨、禮ほどこしぬ。此方よりも答へて、扨てその後、異なりたる事は無きかと言へば、前なる一卒欠伸なしつゝ、寔に穩なる夜なりきといふ。さらば御身は行きて早く休み給へ、我今より代るべしと、未だ言ひ終らざる時なりき、不意に敵の一小隊ばかり、林間をくぐりてあらはれぬ。一發の銃聲は後なる一卒の手にて發せられたり、露營の人々は一時に起上れり。事あるか、と一同叫び、急劇に身支度して皆馬鞍に躍りつきぬ。「乘馬急步」の號令と共に、前面に向ひて走せ去りぬ。

嗚呼、朱染亭の秋の夕、誰か蕎麥の花を白しといふや。

これぞ町口中尉等の、悲壯なる最期を意味する文句である。其の壯烈なる戰死を描かずして此の一句を用ふる、實に餘韻深く、千均の重みあるを感ぜしめる。

然るに此の「征清畫談」も亦、發行所の規構改革に由りて、早くも其の第二號の誌上に「從來大に江湖の名聲を博せる征清畫談は、幼年雜誌と共に、本年度を以て廢刊し、更に來春より、少年世界と題せる雜誌に於て之が欄を設け、雄大なる史筆と、鮮麗の挿畫を以て、一層明快に戰爭の進行武夫の偉勳等、細大叙し來りて、世界歴史上の一大壯觀、大光景を全うし、諸君の眼前に躍躍せしめんとす、其新面目、新尤彩は、更に少年世界を取つて讀め」と記して、遂に果敢なくも終止符を打つに至つた。

第三編　躍進時代

第一節　「日本昔噺」の出版

これより曩博文館では、巖谷漣山人に囑して、「日本昔噺」と題する一叢書の出版に着手した。勿論この企劃は、出版者の發意に依るか、或は作者の提案になりしか、其の何れなるにせよ、漣山人がお伽噺といふ別乾坤に、不動の地位を確立して、天下第一人者の榮冠を贏ち得るに於て、此の一叢書の刊行は、最も意義深きを想はしめる。卽ち漣山人は、從來とても、「少年文學」に、將た「幼年文學」に、或は「幼年玉手箱」に、それ〴〵二三篇を擔當したとはいへ、全部十二冊より成れる叢書を、よしそれが片々たる冊子なれ、獨力にて編纂執筆する一事は、當時として頗る稀有とすべく、況や此の叢書が、古來世上に流布せる「昔噺」なりしだけに、編纂上の用意も、必ずや尋常一樣ならぬものが有つたに相違なからう。

「日本昔噺」の第一編が、美裝を凝らして世上に現れ出たのは、明治廿七年七月のことで、恰も日清戰爭の開始と同時であつた。卽ち世間一般の人心が、戰爭に夢中になつてゐる時、凡そ戰爭とは

絲の遠い此の叢書を、敢然として繼續發行せる書肆の勇氣と熱意とは、實に敬歎の外なく、而も同年々末に至つて、一切の文庫、叢書の類を、擧げて中絶廢刊に附し、悉く二雜誌に併合したるに拘らず、獨り「日本昔噺」のみは、依然としてこれが出版を存續し、遂に克く完璧の美を成したる一事は、我兒童文學史上に、最も偉大なる足跡を印したものと言つてよい。

「日本昔噺」は、其のはじめ全部十二冊を以て、首尾完成の豫定であつた。然るに發表後に於て、豫期以上の好評を博し、重版に次ぐに重版を以てする盛況を來したる爲、其の勢に乘じて更に十二冊を追加續刊するに至つたものである。聞く所に依れば、最初の十二冊は、一篇の原稿料五圓の約束なりしところ、好成績の結果として、十三編以後には壹圓を增加するに至つたといふ。いかに物價低廉の時代なりしとはいへ、今日よりこれを見れば、何人も其の稿料の尠きに一驚を喫するであらう。

この叢書は、「桃太郎」を第一編として、毎月平均一冊宛の割合もて進行した。極彩色の石版表紙と、本文中に十餘面の大型挿畫を加へてゐる。殊に初編桃太郎の揮毫を擔當せる富岡永洗が、其の執筆に當りて、いかに苦心經營したるかは、遺されたる彼の草稿に、幾度となく朱を施し、屢々塗抹改削せる痕跡の歷然たるもの有るに依つて、これを證し得られるのである。又編者は、第一編の卷首に、次の如き抱負を述べて、讀者の注意を促す所あつた。

幼年諸君へ。　黃金丸の初聲から、不圖お馴染になつた此の漢、當春玉手箱の露拂ひに、覺束なくも春駒を乘り出した間もなく、今度は又昔噺の獨舞臺、思へばよく〳〵の御緣でがな。

桃太郎表紙（富岡永洗筆）

さてとの昔噺は、元より昔より有り觸れた物ばかり、それを事新らしく書き立てるは、入らざるお世話のやうなれど、どうしたものか赤本類は、とんと影を晦ました今日、僅かに乳母が添乳の伽に耳から耳へ傳へられるばかり、目から目へ傳へるべき、書いたものが頗る少い。

そこで例の兒煩惱、これが如何にも殘念さに、兎に角一まとめにして置きたいといふ、若いに似合はぬ老婆心から、辛うじて求め得た二三の參考書と、僅かに殘る記憶を力に、挿畫と唱歌

「日本昔噺」の出版

の合槌を賴んで、かくは打つて出でたる次第、由來を聞けば有難くもなけれど、そこがそれお馴染甲斐に、相變らずの御贔負を、先以てお願ひ申し置く。

大人諸君へ。　又しても氣樂な子供だまし、それも我手から出さうとはせず、有りふれた昔噺の請賣三味、さりとは氣が知れぬと、そんじよそこらのお小言は、兼てより覺悟の前なれど、當時かゝる氣樂な役廻り、この作者ならでは先づは有るまじ。

夫れ蟹は甲良に似せて吾穴を掘るとかや、思へば此も其類か、雷門で賣る「とんだりはねたり」は、元よりお子供衆のおなぐさみ、大人諸君のお目ざはりなら、目をつむつてお通りあれ、それともお宿元へのお土產なら、さアさ召しませ〳〵と爾云。

此の序文に依つて、編者の存意は略窺ひ知られよう。尤もこれには多分の樂屋落もあり、且現代には最早や通じ難き洒落も含まれ、すべてに草双紙の臭味を脫しきらぬ感はあれど、此の時代としては此の程度の書き振も、敢て異とするに足らないのである。

「日本昔噺」は、固より幼年兒童を對照とせることゝて、其の文體措辭も、これを彼の「少年文學」及び「幼年玉手箱」等に比して、一段と平易に、一段と碎けたものでなければならぬが、事實は相應に凝つた點もあり、時に美辭麗句を用ゐて、形容を悉にせる個所さへ見られ、隨つてやゝ難解の節すらなくもないが、今日に比して、一般に讀者の程度高く、苟くもこれを讀む者には、この書き振にて十分に理解し得られたことであらう。なほ次に示すは、「桃太郎」の一節である。

むかし〳〵或る處に、爺と婆がありましたとさ。或る日のことで、爺は山へ柴刈りに、婆は川へ洗濯に、別れ〳〵に出て行きました。

時は丁度夏の初旬、堤の艸は綠色の褥を敷いた如く、岸の柳は藍染の總を垂した樣に、四方の景色は青々として、誠に目も覺める計り、折々そよ〳〵と吹く涼風は、水の面に細波を立てさせながら、其餘りで橫顏を撫でる鹽梅、實に何とも云はれない心地です。

婆さんは適宜處に盥を据え、其中へ入れて來た汗染みた繻絆や、着古した單衣を、代る〳〵取り出しては、底の小石から小鮎の狂ひまで、手に取る樣に見え透く清流に浸して、頗りにぼちや〳〵行つて居りますと、やがて上水の方から、一抱もあらうと思はれる、素敵滅法大きな桃が、ドンブリコツコスツコツコ〳〵〳〵と流れて來ました。婆さんは之を見て、さて〳〵見事な桃ではある、妾も今年で六十に成るが、產れてからまだ此樣な大きな桃は、つひに見た事が無い。然し喰べたらさぞ甘味からう。一ばんあれを拾つて行て、お爺さんの土產にしやう。それがよい〳〵と、獨り點頭きながら、手を伸ばしたが屆きません。四邊を見廻しても竿はなし一寸途方に暮れましたが、やがて工夫を考へて、流れて來る桃に向ひ、「遠い水は辛いぞ、近い水は甘いぞ！　辛い處は除けて來い、甘い處へ寄て來い！」と、手拍子を面白く取て、二三遍

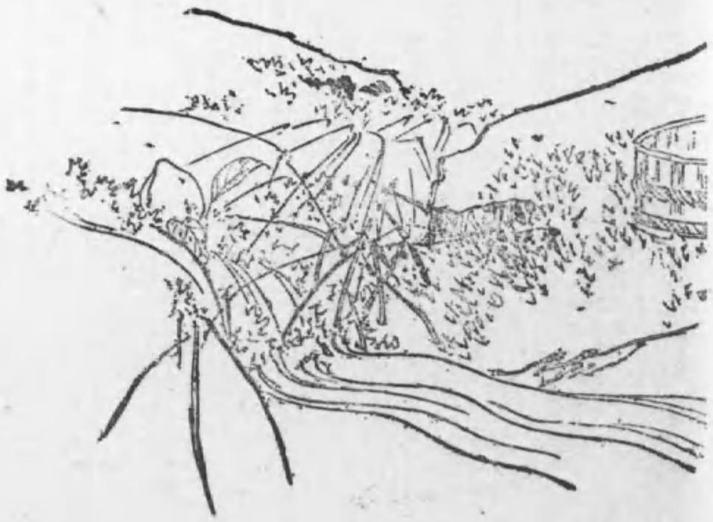
「日本昔噺」の田版

繰り返して言ひました。すると不思議にも件の桃は、次第々々に寄て來て、果は婆さんの前で止まりました。かうした文體を以て、すら〳〵と話の筋を進めてゐる。然るに十三編以下、卽ち後期の諸篇を見ると、其の文體にも可なりの手心を加へて、漸次形容詞を少くし、子供に聞かせる「昔話」としての眞價を認むるに至つた。次に掲ぐるのは、第十八編「浦島太郎」の書振りであるが、これを初編の桃太郎と對照すれば、編者の幼年兒童に對する見解が、一段の進境を示しつゝあることを認め得られるであらう。

むかし〳〵、丹後の國水の江と云ふ處に、浦島太郎と云ふ、一人の漁夫が在りましたとさ。

ある日の夕方、此の浦島太郎は、例

の通り漁に出た歸途、濱邊から自家の方へ來やうと思ひますと、十一二を頭に、十歳、八歳位な子供が、大勢寄てたかつて、一匹の龜兒を捕へまして、彼方へ引張つたり、此方へ引張つたり、散々玩弄にした揚句、石をぶつけたり、棒で撲つたりして、酷い目に遭はせて居ります。浦島は情深い男ですから、これを見て可愛さうに思ひ、「コレ〳〵、お前達はそんなに龜兒を苛責めて……それぢやア今に死んでしまうぜ」と云ひましたが、惡戯盛りの子供達は、中々云ふ事を聽きません、「なアに死んだつてかまうもんか、面白いからやれ〳〵」と、尙も亂暴に苛責めますから、そこで浦島は考へまして、「コレコレ、お前達はまことに好兒だから、その龜兒を爺さんに呉れないか」「厭な事たア、此奴は吾等



達が捕へたんだもの……』『イヤ、それは道理だが、爺さんだつて只で呉れろと云ふんぢやないぞ、その代りお錢をあげるから、つまり其の龜兒を爺さんが買うんだ、ネ、よしか！　それでお前達は此のお錢で、何でも好きな物を買つて遊びやア、その方がどんなに良いか知れやしないぜ。ネ、好兒だからさうお爲！」と、優しく云ひ聞かせますと、子供は邪氣の無いもので、すぐ又その氣に成り、「それぢやア爺さん！　龜兒はやるからお錢をお呉れよ」と、やがて龜兒とお錢と取り替へまして、「みんな來い〳〵」と、其儘何處かへ行つてしまひました。

「日本昔噺」二十四冊（各冊定價金五錢）は、本文三號活字を使用し、全頁を花枠に飾り、十行二十字詰、一冊の分量約四十頁内外、これに見開の挿畫數面を加へ、別に各冊それ〴〵其の人を異にして、序文と唱歌とに賑々しく卷頭を飾つた。

此の「日本昔噺」の卷頭を飾れる名士の序文には、其の文體にも、思想にも、亦大に首肯すべき者があつた。左は其の一例である。

巖本善治。　子供は人として不完全にあらず、只幼稚なるのみ。幼稚は宛ながら小き藏の如し。惣ての寶物を此に密藏す。されば其小きによりて輕んずべからず、小きが故に一入大切にせざる可からず、之を開出するに於て甚たく謹厚ならざれば、恐らくは大傷害を來さん。孟子曰く、大人は小兒の如しと、ミルトン曰く、大人みな曾て一度は小兒たりきと、小兒を輕んずるの教育に眞の教育なし、小兒を輕んずるの邦家に文明國なし、故に文明國の教育は皆な小兒の爲に厚うす、兒んや其國の慈愛なる父母に於てをや。

父母元來其子を愛せざるものなしと雖も、只だ知らざるが故に之を害ふこと多し。余曾て論じて曰く、尤も多く人の子を殺すものは其親也、尤も多く人の子を愚にするものも亦其親也と、此れ決して矯激の語にあらず、亦必ずしも一家の私言にはあらず。子供等が勤勉熱心なる日々の事業は、惡戯と稱せられて屢ば制止せらる。子供等が奇警鋭敏なる日々の質問は、うるさしと言はれて屢ば擯斥せらる。彼等が障子に穴をあけるは、豈只だ惡戯たらんや。他日望遠鏡を窺つて天文を望むの好奇心玆に淵源す。彼等が早く人形を毀すは、何ぞたゞ亂暴とのみ言ふべけんや。他日解剖室に入て利刀を操どり、奮つて百體の組織を攻究するの趣味此の邊に由來す。尋常の親此理を知らず、屢ば制止し屢ば叱責し、以て其好奇心の發育を塞ぎ、其勤勉力の成長を抑ふ。此れ他日曚々たる遲鈍者となつて英氣なき愚昧の人たるもの、抑も其親の所爲に係るにあらずや。

されば彼等が「おはなし」を好むの天性も亦た略ぼ祕義の存する所を察すべし。夫れ「おはなし」は小供の爲の無上の美味なり、他の何物に厭くときも、獨り此ものには厭くことなし。啻に厭かざるのみならず、屢ば同じきものを接けて、其度の重なるほど彌よ之を珍重す。「おはな

し」に限りては、必ずしも新奇のものを要せざると見えたり。惟ふに彼等が「おはなし」に於けるは、他日大學教場に臨んでの講義に於けるが如きか。其厭くことなくして續々所望するの嗜慾は、尤も長養せざるべからず。

故に母たるもの、好く此の祕義を辨じ、彼等が遊戯奔走に勞れて……卽ち自ら研究する實地の事業に稍や厭を來して……或は寢ころびて母の慈愛ある顏を眺め、或は夜な〳〵夢に花境に入らんとするの門前にて、彼等にとりては最と妙なる音樂たる「おはなし」を聞んとするの時はたとひ其の幾度び繰返されるものなりとも、英氣を新鮮にし、語調に力を入れて、爽快に話しきかすべし。

かくせば昔物がたりは、斷えず今日の物がたりとなるべし。況や昔物がたりは、大率名僧達士の趣構に成れるをや。編成點色の妙、言外にあり、能く之を味ひて、其眞意を傳ふる時は、諸種の知識此に含まれ、高尙の道德亦此に存す。余は昔物がたりが、今日の今よりして明日の昔に至る迄、永々久々に小供等の美味たらんことを望むもの也。（明治廿八年八月）

また、此の叢書の挿畫を擔當せる畫家が、何れも當代に於ける版畫界の名手といふばかりでなく、從來絹本にのみ力を效して、版畫方面に携らず、而も世間的に高名を馳せつゝある人々をも、出來得る限りこれを網羅して、此の叢書に揮毫させたことは、「日本昔噺」の聲譽を一層高くしたものと見なければならぬ。

これは全く餘談ではあるが、當時は未だ文部省展覽會などの開催もなく、新進の畫家等は、其の名聲を博すべき手段を知らず、あたら天分を有しながら、其の苦心の作品は、單に一部好事家の間にのみ鑑賞せられるに過ぎぬ狀態であつた。故に販賣率多き出版物の挿畫を描き、其の筆名を顯す時は、名聲漸く天下に遍く、たま〳〵繪筆を負うて地方遊歷に出づるも、挿畫を通じての知己多く延いては作畫依賴者の認識を深からしめる上に、著しき效果あるものとせられ、爲に後年「世界お伽噺」の發行當時は、靑年無名の畫家が、各方面より傳手を求めて、其の挿畫の揮毫を引受くべく盛んに割込運動を試みるといふ、一種奇妙の現象を呈するに至つたこともある。

次に、「日本昔噺」の全種目と、これに執筆せる畫家人名を列擧して見よう。

第一編 桃太郎　富岡永洗
第二編 玉の井　小林永興
第三編 猿蟹合戰　村田丹陵
第四編 松山鏡　武內桂舟
第五編 花咲爺　水野年方
第六編 大江山　歌川國松
第七編 舌切雀　三島蕉窓
第八編 俵藤太　藤島華僊
第九編 かち〳〵山　寺崎廣業
第十編 瘤取り　山田敬中
第十一編 吻臭太郎　梶田半古
第十二編 文福茶釜　鈴木華村

第十三編　八頭の大蛇　尾形　月耕
第十四編　兎と鰐　高橋　松亭
第十五編　羅生門　筒井　年峰
第十六編　猿と海月　久保田金仙
第十七編　安達ヶ原　小堀　鞆音
第十八編　浦島太郎　永峰　秀湖
第十九編　一寸法師　小林　清親
第二十編　金太郎　右田　年英
第二十一編　雲雀山　中江　玉桂
第二十二編　猫の草紙　淺井　忠
第二十三編　牛若丸　橋本　周延
第二十四編　鼠の嫁入　川端　玉章

右の如く各冊其の筆者を異にして、縱横に才筆を揮はせ、正に百花爛漫の美觀を呈現した。また編者漣山人は、大江小波の號を用ゐ、且東屋西丸なる者をして筆記せしめたる如き形式を採つた。大江小波の別號は、曾て一度「幼年文學」にも使用した所であるが、大江はもと巖谷家の舊姓であり、小波に對しての對句かとも想はれる。東屋西丸が架空の人物なりしことは、今更いふまでもあるまい。

かくして「日本昔噺」は、明治廿七年七月より、翌々廿九年八月まで、殆ど毎月一冊づつ定期的に發行して、首尾滯なく完結を告げた。此の叢書が、新領土臺灣の國語學校の教科書として採用せられ、また獨逸東洋語學院の教材に供せられたることは、世間周知の事實であつた。なほ漣山人は此の書の完結後約十年を經て、これを袖珍の合卷に改裝するに當り、著しく文體を訂正して、よく時代の傾向に適應せしめ、更に進んでは、晩年、別途に最も平易にして最も正確なる、卽ち定本「日本昔噺」を集成すべき腹案を有し、夙に桃太郎の一篇を脫稿したのであるが、これは不幸にして未發表に終り、遂に此の計畫の畫餅に歸したことは、獨り編者の遺憾のみならず、我國兒童文化の發育上最も大なる損失であつたと言はざるを得ない。

最後に、吾等の記憶に今猶ほ殘るものは、「日本昔噺」が、其の新刊發賣毎に、これを世間に告知する爲、特に其の文案に妙想を凝らし、奇警なる意匠の下に、讀者を魅了せしめた一事である。蓋し本叢書は、其の各冊の挿畫、序文、唱歌の作者を悉く別にしたると同樣、又廣告文に於ても、篇籍文體を異にして、讀者の注意を喚起するに努めたもので、當時の少年が、いかに廣告文を重視したるかは、これに依つて想像し得られよう。

浦島太郎。　罷り出でたる者は御存じの浦島太郎でムる。此の中龍宮へ參つて、さま〴〵の馳走をうけ、其上かず〳〵の土產を貰うて、只今歸り途でムる。何がさて、龍宮と申す處は、又とない面白い處でムる。さりながら、この面白い處を、只ひとりで見て參つたは、まことに興が薄いことでムるによつて、是よりは皆の衆へ、龍宮の話を語りて聞かさうと存ずる、坊ちやんも嬉ちやんも、さア〳〵來さしめ〳〵。

一寸法師。　一寸御免遊ばせよ、この一寸法師といふ可愛らしい坊さんが、お椀のお舟にお箸の

棹をさして、はる〴〵と京へ上り、さる邸に御奉公に出ましたが、其後お姫様のお供をして、旅に出ました途中、恐しい鬼に出逢ひましたのを、指の先ほどの一寸法師が、杖にしてゐる針で鬼の金てこ棒を追拂つたといふ、それは〳〵面白いお話、さアおとなしくしてお聞き遊ばすんですよ。

安達ケ原。 汝は安達ケ原の鬼婆を知りなすか、いかに婆は恐しき鬼婆であるよ、坊主、それはその鬼婆に會ひし所の坊主が、押入の中の人間の屍骸、それは鬼婆が食ひかけし所の屍骸を見て、いかに驚きなせしかを見よ、而してその坊主は、遂に鬼婆に食はれしか、否、彼は遂に逃げ去りし、エツサツサ！　エツサツサ！

雲雀山。 一筆示し參らせ候、此本は雲雀山と申して、中將姫の事をば、面白く書いた本に御座候、中將姫と申す名は、定めし皆様も御存じと存じ候、これは繼母の讒言にて、遂に山に棄てられしこと露ほども恨みに思はず、朝夕佛に仕へて、遂に極樂に往生せし程の賢女に御座候、尚委しくは本文を御覽下され度く、まづは廣告まで、あら〳〵かしこ。

以上細說せる所の如く、「日本昔噺」の出現は、我兒童文化史上の一部分に、最も偉大にして、畫期的なる效果を齎らしたものと言ふべく、殊に足利時代以降、主として口づてに流布したる「昔噺」を擧げて、これを集大成し、正確にして美麗なる一叢書を作り上げたる點に於て、啻に一人一社の名譽とするに止まらず、將に湮滅せんとする古典を複元して、而も完好に邇き「昔話の定本」を得たることは、國家教育の上より見るも大なる幸福としなければならない。

第二節　「少年世界」の創刊

一　「少年世界」と漣山人

廣くそれ〴〵の各階層を目標として、明治廿二年以降、專ら多種多樣の雜誌と、各種類の叢書、全書、文庫類を、矢繼早に發行して世間を驚かしつゝある博文館は、創業六ケ年を經過して、玆に一轉機を畫することゝなり、從來の叢書と雜誌との一切を統合して、新たに「太陽」と、「少年世界」との二大雜誌に總括し、其の全力をこれに傾注するに至つた。正にこれ惜みなく舊套を脫却して、未知の新衣を着するの觀あり、即ち廿七年十二月發行の各雜誌終刊號に、漉色紙四頁を費して堂々たる主意書を發表したるは、眞に出版界の一大驚異であつた。

前古未曾有の日清戰爭は、我國の大勝利下に着々歩武を進め、皇師十萬遼東の曠野を席卷し、旣に旅順の堅壘を陷れ、將に威海衞を攻略して渤海灣口を制壓するの態勢を示し、我武維れ擧り、洋々たる戰勝の新年を間近にして此の宣言書を一讀したる讀書子は、悉く手を額にして新雜誌發刊の

日を翹望したのである。卽ち先づ順序として、「少年世界發刊の主旨」を一閲しよう。

日本第二の維新は來らんとす。土地百倍、人口十倍の清國と戰うて大勝し、東洋隨一の强國となり、世界の雄邦と伍し、覇を宇内に爭はんとす。其局面の廣大なる、何ぞ第一維新の比ならんや。此大局面に立ちて斡旋すべき我國民は、偉大なる覺悟なかるべからず。

第二の國民として、他日日本帝國を双肩に擔ふべき我少年諸君は、今より大に剛健雄大の氣象克己忍耐の德性、明截透徹の智識を發揚せんことを要す。

時運の進潮夫れ斯の如し、弊館亦將に明年一月より、從來刊行せる二十餘種の諸雜誌を合同し更に大に弊館の全力を擧げて「太陽」及び「少年世界」の二大雜誌を刊行し、一方には益々日本を世界に知らしめ、一方には大に智識を萬國に探るの途を啓かんとす。「少年世界」は殊に我が少年諸君の爲めに發刊す。從來の幼年雜誌、日本之少年、學生筆戰場、及び婦女雜誌は、曾て日本全國少年男女が非常の喝采を博して、其名聲夙に海外に揚れり、今其精英と長所とを拔きて「少年世界」の内に存すべく、又之が程度は、主に中小學學齡諸君に適するを標準とし、文章は明快平易に、繪畫は精密鮮麗に、當今諸雜誌中に其比類なく、殊に少年世界に於ける第一位の雜誌たらしめんことを期す。

今や弊館は、少年文學家の泰斗として、靈妙秀慧なる意匠家として、廣く天下に知られたる巖谷漣山人を聘して「少年世界」の主筆たらしめ、總て當代高名の大家が丹青を凝らしたる文章繪畫を揭げ、最も斬新奇拔なる趣向を以て、讀者をして娛樂の間に良德を養ひ、愉快の裡に明智を得せしむべし。「少年世界」は實に雜誌社會に於て、第二維新の先鞭を着くるものなり。他日日本帝國を擔當し、偉大なる國民たるべき我少年諸君は、之に由つて其德性智識を發養するを得、更に新文運の光明に資するを得ば、獨り弊館の名譽に止まらざるなり云々。

右の如く、新雜誌「少年世界」に對しては頗る非常の意氣と希望とを懷いてゐる。なほ博文館當局者の語る所に依れば、過去數年間に亘りて經營したる同館の諸雜誌は、其の種類の雜多なるに拘らず、これが發行部數は意外に少く、中には纔かに二三千に過ぎぬもあり、最も多き者と雖も、七八千を出でず。未だ一萬の聲を聞く者殆ど稀に、隨つて勞の少なからぬに對して、功の多からぬ憾があり、こゝに於て此の際從來發行の二十餘種を打して一丸とし、各員一致協同してこれに全力を傾盡するの、寧ろ效果あるべしといふに意見の一致を見るに至り、戰勝の廿八年一月を期して二大新雜誌を創刊すべく、大英斷の擧に出でしものといふ。

殊に「少年世界」の主筆として、新たに巖谷漣山人を招聘したるは、新雜誌の前途に對して、一大炬火を點ぜしものであつた。當時漣山人は、京都日出新聞の文藝部主任として、相當重要の地位を占め、廿八年四月を期して同市に開催せらるゝ第四回内國勸業博覽會と、平安神宮鎭座祭といふ

重大なる盛典も、既に眼前咫尺の間に迫れるあり、隨つて文藝部の活躍を要すること固より言を俟たぬ所であつた。

かゝる際に當り、其の主任者を失ふことは、新聞社として相當の痛手を感じたに相違あるまい。尤も漣山人一身よりすれば、既に二年有餘を其の地に過し、歸心漸く募りつゝあり、且「少年世界」の主宰たることは、生來最も好める兒童文學に對してこれが適所を得るのみならず、將來の大成を期する上にも、亦好個の地位を得るの感あり、特に親友紅葉山人の理を盡したる勸說もあり、並に硯友社員大橋乙羽の切なる希望もあり、遂に意を決して日出新聞社を退き、上京して博文館編輯局に投じたのである。こゝにいふ大橋乙羽は、もと渡部又太郎といひ、近く大橋家の籍に入りたる人にて、當時博文館の支配人として、編輯部員として、三面六臂の活動を試み、且八面玲瓏、圓轉滑脫、才氣渙發して往く所佳ならぬはなく、數年ならずして同館の經營上偉大なる功績を樹つるに至つた。されば若し此の人だに健在せば、博文館の出版事業は、更に一大飛躍を遂げしに相違なからんを、惜しい哉明治三十四年六月病に罹つて世を早うした。蓋しこれ啻に一書肆の損失といふばかりでなく、我國出版文化の發達上にも、甚だ遺憾の極みであつた。

二　「少年世界」の陣容

新生の「少年世界」は、本文の欄を分ちて、論說、史傳、科學、小說、遊戲、文學、寄書、雜錄、征淸畫談、學校案內、遊覽案內、新刊案內、時事等とし、且春夏秋冬の四季に分ちて、約二十頁に充つる特別讀み物を附錄として添加すべく豫約した。

これに關して、「幼年雜誌」時代の假想敵「小國民」は、第七年一號の誌偶に、「名まで剽窃」と題して、「近來、府下の或雜誌製造所より出すといふ何世界とかいふ雜誌は、四五年前、少年書院といふ所より發行せし赤本の名に少しも異ならざる由、俳優團十郎には、初代も二代もあれども、雜誌の二代目はこれが初ものなるべし、馬肉屋の看板のやうなビラの出ることならん」と皮肉を書いてゐる。併し事實に於て、新裝を凝らして現れたる「少年世界」を見るに、もはや「小國民」の敵とは思はれず、其の內容も外觀も、また分量も、程度も、兩者の間には、著しき差異を生じ、隨つて「幼年雜誌」時代の如き角逐は、遂に再び見るを得なかつたのである。

「少年世界」の第一卷一號は、廿八年の初日出と共に、賑々しく全國書肆の店頭に飾られ、これが發行部數も、最初の希望通り萬臺に達し、なほ且再三重版して、新しき讀者の要求を滿たしたるやに記憶する。其の一號表紙の肩には、「本誌は幼年雜誌、日本之少年、學生筆戰場、少年文學、幼年玉手箱を合併改題したるものなり」と、二號活字を以て標示し、新雜誌の有つ責任を明かにしてゐる。又表紙畫の意匠は、展ける白扇の面に嵩高なる富士を現し、扇面中に橫書にて「少年世界」の

四字を並べ題した。これは吉田晩稼の謹嚴なる筆意に俟てるもの、晩稼は「日本昔噺」の表紙にも、亦毎編揮毫してゐる。次に中央部の色紙形に、口繪、大附錄等の重要目次を掲げ、下部の空地には、地球儀、滿開の櫻、双眼鏡、樂譜、樂器、圖書、アルバム等、總て少年の愛好すべき高尚なる學用娯樂品のかず〳〵を適宜配置したる點は、未だ從來に例を見ぬ貴族的の者にて、「小國民」の平民的なるに較べて、著しき懸隔あることが認められる。

且それは單に外裝ばかりではなく、亦內容に於ても、「少年世界」の編輯方針は、漸次「小國民」に遠かり、獨自の地歩を占めつゝ活歩した。卽ち過去數年に亘りて、天下少年の人氣を集めたる「小國民」が、漸く其の威力を失ひ、貴族的文學的に高踏濶歩せる新生の「少年世界」が、これに取つて代らんとするは、正しく時代の趨勢の然らしめる所と見るべく、所謂新陳代謝の常道より觀すれば、かゝる現象も亦何等不思議とするに足るまい。かくして「少年世界」は、爾後十數年の久しき、嚴然として其の勢力を保持しつゝ、幾萬少年の愛好の中心となり、新鮮にして高渾なる文學藝術の養成に力を致したる一事は、兒童文化史上の一大偉觀として、永く記憶に存すべきであらう。

三　「少年世界」の記事

創刊の第一號を披見するに、主筆漣山人は、「日の丸」と題する時局向新作お伽噺を以て小說欄に異彩を放ち、江見水蔭は、「海上の初日出」なる實際的冒險談を寄せ、依田學海翁は、「英武蒙求」の題下に、古名將の逸事を蒙求式に竝べて得意の史筆を呵し、其の他佐々木信綱の「詠歌法」と、大和田建樹の「作文法」と、野口寧齋の「作詩法」とは、三者相並んで少年文學修練の指針となり、更に、芳菲山人（理學士西松二郎）は、「初日の出」に天體の學理を說く等、博文館が傳統の主義方針とも見るべき多數名士の顏を揃へしことも、確かに此の雜誌の異彩といふべく、加ふるに新年附錄として、宮崎三昧道人の「小荊軻」、川上眉山人の「一夜天下」、渡邊霞亭主人の「雷神」を添へ、三篇とり〴〵の趣向を凝らして喝采を博した。また口繪には、寫眞銅版に依つて「皇太子殿下の御尊影」を奉掲し、武內桂舟筆の「神功皇后三韓征伐

少年世界創刊號表紙

の圖」を極彩色石版二枚折を以て挿入してゐる。元來此の石版畫は、生慶堂（三間七兵衛）の製版印刷に俟てるものにて、巧みに網目を利用して其の效果を縱横ならしめ、隨つてこれが畫面にも著しく新味の掬すべきものがあつた。

かくて「少年世界」は、毎月二回づつ發行を續け、主筆蓮山人は、主として日清戰爭の事實に題材を求め、「鳶ほりよりよ」「大和玉椎」「駄法螺」「降參龍」「白旗よわいや」「起上り小法師」「油斷鯛敵」等、極めて輕妙洒脫の筆を以て當意卽妙の意匠を凝らし、趣味滿點の新作を次々に發表したが、中にも高千穗の鷹を取扱へる「鳶ほりよりよ」の一篇は、最も世評高く、且「少年世界」獨特の讀み物として迎へられた。而も此等諸篇の挿畫は、すべて武內桂舟の揮毫に成り、月を閱して益々其の精緻と巧妙とを效し、後には小波桂舟一丸となつて、此の雜誌の價値を重からしめた。

尤も「少年世界」は、元々「日本之少年」及び「學生筆戰場」等を併合したるものだけに、從來これ等に據つて文章の練磨を圖り、或は懸賞文に應募することを、唯一の希望とし名譽ともせる一部上層の少年にとりては、「少年世界」の程度低きに聊か飽き足らぬ節もあり、隨つて幼年向のお伽噺や、其の他の卑近なる記事を廢し、これに換ふるに投書欄を擴張し、且其の向上を望む意味の要求も、亦相當多かつたのであるが、併し「少年世界」としては、何所までも當初の面目を保つことに努め、第七號より表紙畫を改めて、益々其の負ふところの使命を明かにした。

少年世界表紙（一卷七號）

改正後の表紙を見るに、陸軍式服裝の少年に軍旗を捧げさせ、海軍裝をなせる少年に軍艦旗を持たせ、此の二人が渾圓球上に相對し、周圍に無數の蜻蛉を群飛させ、最下部に天童二人を配して地球を受持せしめてゐる。卽ちこれを創刊時の表紙意匠に較ぶれば、一段と幼稚に、且この雜誌固有の眞價が初めて認められるに至つた。

かゝる有樣なれば、從來「日本之少年」や、「學生筆戰場」の愛讀者たりし高級の少年は、次第に此の新雜誌より遠ざかり、一方には又後から後からと、新しい讀者が風を望んでこれに集つたので創刊後數月を出でぬ間に、其の讀者層には亦著しい變化を來したが、此の如き現象は、過度期に於ける一時的異變と見るべきであらう。

次に、「幼年雜誌」時代より、引續き實際上の編輯事務に携れる坂下愛柳は、事情あつて第五號限り退社し、これに代つて新たに武田櫻桃（櫻桃四郎）が、助筆として來り加つた。隨つて「少年世界」第六號には、「坂下愛柳氏都合有之退館致し候に付、更に武田櫻桃氏を助筆に聘し候、同氏は兼て詞海といへる文學雜誌を發行し、後また風俗畫報にも從事して、斯道に經驗少なからぬ人に御座候云々、巖谷漣」と、新記者紹介の一文が掲げられ、ついで櫻桃は「ブランゴ・エンカラダ號」の海戰記を以て、「少年世界」に初見參した。猶ほ前任者坂下愛柳は、解任後杳として其の消息を聞かなかつた。●

既に述べたる如く、「少年世界」は其の卷首第一頁以下の二三頁をば、論說欄に充當したが、これには相當高尙の文章さへ揭げられ、他の記事に比して、稍不釣合なるやに思はるゝ者さへあつた。今、次に示すは、第三號の論說欄に見ゆる一文にて、石橋忍月（友吉、法學士）の「乾坤第一春」と題するもの、忍月は曾て創刊當時の「少年園」に、有名なる「レツシングの比喩談」を連載して好評を博し、また例の「少年文學」にも、「矢部川懷古」の一篇を草すべく、屢々豫告を見たるに拘らず、何故か遂に未發表に終つたことがある。

乾坤第一春。　淡々の春味、正に輕軟風裡に點色す。此時試みに新晴を趁うて、遊杖を郊外に曳かば、諸君は燦たる梅花の春心を示すを見ん。

香も淸、色も淸、神も亦淸、天地の精を鍾めたるものは是梅花に非ずや。吾人請ふ諸君と共に梅の美を尋ねん、梅の美は疎にあり、水に臨んで一枝橫ふところ、思はず吟腸の穢濁を洗ひ去らしむ。數點の白、晶々着し得て多きを用ゐず、最も憐れむに堪へたり。

梅の美は淡にあり、流水疎離、月始めて晴るゝ時、顏遠く格高き淸姿を塵表に見る、正に是れ乾坤の第一春、此時や、雲に連るの萬朶、王位に誇るの牡丹、必ずしも羨むに足らず、況や俗桃妖李に於てをや。

梅の美は潔にあり、骨相稜々、樹半ば枯れて格自ら高く、衣裳淡々、疎影浮く時、顏却つて遠し、殘月に立つ處、冱寒を凌ぐ處、纖塵を絕つ處、暗香の飛ぶ處、淸絕秀絕、世間敢て潔の比すべきなし。

梅の美は瘦にあり、又幹に在り、屈蟠老蛟の如く、寒皐に臥し、悠然として牡丹を笑ひ、櫻を笑ふ。古への詩人梅の配を求めて獨り沅湘岸畔の芳蘭を推す、宜なる哉。

と論じてゐる。謂ふにこれ等の文體は、今日大人用の雜誌にも見難き拮屈難解のものなれど、當時の少年は、大體に於て漢文の素養深ければ、かゝる文章も、さしたる困難を感ぜずして、一氣に讀破し玩味したものである。

四　「少年世界」の進歩

次で同年四月より、京都市岡崎に於て、第四回內國勸業博覽會が開設せられ、戰勝後の人氣沸騰せる時代とて、世人は皆京都へ〳〵と足を運び、頗る盛況を呈した。「少年世界」は、逸早く此の好題目を取り上げて、其の第八號(四月一日發行)の誌上に、卷頭の論文として記す所あつた。

第四回內國勸業博覽會は開かれたり、戰勝の最中に當り、春風駘蕩の候に乘じ、山紫水明の地に於て。京都は古へより、日本衆美の庫と稱せらる。東山の眉黛愛すべく、鴨河の鏡面清らかなり、山には蘭若多く、河には花柳臨めり、柳櫻をこきまぜて、都ぞ春の錦なりけるとは、今なほ昔に異なるべしや、天然の美既に盡せり、之に加ふるに西陣の織物、清水の陶器をはじめ幾多人工の美を以てす、京都は平時に於て既に一の美術館たり。

況や平安神宮構造全く成りて、桓武帝の靈位茲に鎭座ましませり、千載一時の盛典は、恰も征清軍が振古未曾有の偉勳を相映發し、神人共に慶せり。

然るに此の千秋の佳節に際し、膨脹的國民が精を殫せし各種の出品を網羅したる一大博覽會さへ此の地に開かれたり、京都の偉觀此に於てか大なり。

吾人は少年諸君と共に、我國民が殖產の志切にして、國威外に發揮せられたると同時に、工業美術等の內に盛なるを賀する者なり、之を證するものは博覽會にあらずして何ぞ。

と、筆鋒を盡して力說せる外、大和田建樹の實地見物記を揭げて、其の內容外觀の大體に就きて報道する所あつた。

さて「少年世界」は、第七號を期して、表紙の意匠を變更したが、同時に春季附錄として、印度のお伽噺(上田萬年)、佃十成(遲塚麗水)、二十卑怯(幸堂得知)の三篇を、二十二頁に收めて夫れ〳〵の特色を發揮した。卽ち上田萬年が古代印度の物語に一隻眼を有せることは、旣記せるところにて、又幸堂得知の二十卑怯は、淸兵の敗戰ぶりを滑稽化したもの、蓋しこの老作家の最も得意とする所であらう。

かくて後半期に入るや、七月一日號には、夏季附錄として、長靴(容膝堂主人)、小彌次喜多(石橋思案外史)、弓太郎(幸田露伴)の三篇を、例の如く二十餘頁に收め、且本文全體の內容にも、相當の改革が施された。併し何故か創刊以來本誌の一特色と認められたる石版多色刷の口繪は、第十五號の武內桂舟筆「雷雨中の基隆城占領の圖」(一頁大)を最後として廢止せられ、これより專ら寫眞銅版の見開圖を以て代用したるは、聊か落莫の感なくも無かつた。

併しながら「少年世界」の口繪筆者には、多方面の名畫家を網羅して、一入の新意匠を競はしめた。卽ち桂舟永洗兩名の外、水野年方、村田丹陵、伯々部金洲、淺井忠等が、交互に麗筆を揮ひ、

就中伯々部金洲が、黄海々戰後の樺山提督の剛壯の狀を取扱へる「月下劍舞の圖」や、桂舟が臺灣討伐の凄慘なる一場面に取材したる『田中石松の冒險」や、或は永洗の理想に出でたる「伏魔將軍少年を追ふ圖」の如きは、最も見事な出來榮で、何れも勇壯の狀紙面に溢れ、少年間に嘖々の好評を博した。

なほ十月一日發行の第十九號より、三度表紙畫を改め、旭日、櫻花、陸海軍を巧みに案配して、又もや著しく高尚優雅のものとし、第四回附錄には、從來の讀物を止めて、「脇屋義治初陣の圖」と題し、寫眞銅版八頁大の額面用印刷物を添加した。更に蓮山人の卷頭お伽噺は、十四號以下漸く時局問題より一轉して、專ら少年の親み易き、途上坐邊觸目の物象を假り來つて、巧みにこれをお伽噺化し、奇想天外より落つる妙味を發揮して、縹渺たる想像の世界に讀者を誘致し、彌々出で〻彌々趣あり、殆ど端睨すべからざる者となつた。

第一卷後半期に於ける記事中、特に出色の觀ありしものは、尾上新兵衛の「近衛新兵」と、水蔭佳水協作の「膀胱船」を擧げねばなるまい。蓋し前者は、少年の最も知らんとする軍隊生活を描寫せるもの、卽ち先づ適齡に達して、身體檢査に合格し、上京して近衛の兵營に入り、次で教練行軍及び日常の行事等をば、餘す所なく實地に詳密に、間々滑稽諧謔をすら交へて、趣味深く記述した る好讀み物にして、讀者をして身其の境地に在り、親しく軍隊生活に浸るの想あらしめた。蓋し未だ曾て何人も手を染め得ず、又何れの雜誌にも發表されなかつた軍隊內の事實に直接したる未來の新兵達は、これを讀んでいかに多くの豫備智識を受け得たか計り知り難きものがあり、それだけに又尾上新兵衛の盛名は、俄然少年間に持囃され、「近衛新兵」の作者は果して何人か、相當の長期間これを知る者がなかつた。然るに此の覆面の作者は誰あらう、後のお伽口演の大立物久留島武彥其の人であつた。

次に「膀胱船」は、頗る奇拔なる構想の下に、其の名題の如き奇妙なる船を泛べて、東京灣より外洋に出で、遠州灘附近まで海上旅行を企て、途上種々の危險に遭遇するといふ水蔭一流の冒險小說であるが、只其の乘船が膀胱の集合體なるを以て、特に周到なる用意をめぐらせる點に、少なからず讀者の注意を牽かせ、且目新しさを覺えしめたかと思はれる。

立野志郎といふ少年がありました、それが不圖考へましたのは、牛の膀胱を澤山集めて、それで船をこしらえ、それに乘つて海を渡つて見ようといふ大膽千萬な遊戯です。算術の教師に就きて調べて貰ひますと、素より膀胱にも大小があるが、先づ〳〵平均空氣を滿たした處で、其重量が二匁ある物と見做し、處で其浮泛力が六百三十八匁三分いくらといふ物になる。然らば乘手の體重や、携帶品等を合せて、其重量に堪へるには、餘程の膀胱が無ければならぬ。先づ志郎の體重が、十貫三百匁としたところで、其他に、シャツ四十三匁、ヅボン下四十三匁、上

衣八十九匁、ヅボン八十三匁、帽子三十四匁、外套百四十二匁、靴下十三匁、ヅックの鞄九十八匁、合せて衣類に屬する重量が五百四十五匁。

此の又他に、小刀三十七匁、手帳三十六匁、鉛筆三本三匁六分、半紙三帖三十二匁四分、魚扠二百八十六匁、晴雨計三十一匁、時計十七匁、網四間二十五匁、安全燈二十九匁、マッチ十個三十匁、合せて携帶品に屬する重量が九百〇三匁、更に飲料水五升二貫四百三匁五分、石油一升四百七十匁、食料品（道明寺、ビスケット、罐詰、梅干、鰹節）五貫六百七十匁、食料其他に屬する重量が八貫五百四十三匁五分。

といふ極めて緻密の計數を算出したところに、この一篇の特色が見られた。而もこれは算術の名手竹貫佳水の考案に成つたものであらう。

なほ、下半期の讀物の中、みやつこまろと名のる覆面の作者が、「新竹取物語」と題して、例のアンデルセンの小指姫を、數回に亘つて連載したのも、其の挿畫の面白さと共に、幼年讀者の一粲を博したもので、或は此の覆面の人は、小西增太郎ではなかつたか。詳しいことは不明である。

第三節　「小國民」の沒落

「幼年雜誌」の創刊以前から、少年教育を標榜して、終始變らず、最も着實穩健なる編輯方針を堅持し、後には「幼年雜誌」と競爭しつゝ、絶えず斬新奇拔の考案を凝らして、斷然其の追從を許さず、以て一日の長を誇りし「小國民」も、明治廿八年「少年世界」の創刊を期して、兩誌の間に大なる懸隔を生じ、互に其の行路を異にするに至れることは、前段に既記した所である。

明治廿八年は、「小國民」の第七年度に相當してゐる。而も「小國民」の形式は、何等前年に異ならず、依然として菊判五十六頁の本文中、約三分の二は、主として戰記若しくは戰地の地理風俗等を以て充たし、或は戰死將卒の肖像を寫眞亞鉛版に複製して表紙の表裏に揭げ、「碧血碑」の題下にそれ等の略傳を收むる等、宛然たる戰爭雜誌の觀を呈し、從來此の雜誌の特色としたる科學歷史等の一般記事は、一邊に押しやられて、洵に寥々たる有樣であつた。

また口繪には、大部分二枚大の多色刷を使用し、鞆音金秋の外、梶田半古、尾竹國觀等の戰爭畫をも挿入した。殊に今年度第三號に見ゆる、鞆音筆「雪中斥候の圖」の大版畫の如きは、猛烈なる吹雪の光景を、如實に現出せんが爲に、態々胡粉地の一刷毛を加へて、美麗なる畫面を斜に拂ひたる手法は、猛風雪の襲來を實地に見る想あり、石版技工の優れたる手腕も窺はれて甚だ見榮があつた。又同じく七號の「牛莊市街戰圖」と、同九號の「田庄臺燒討圖」とは、共に人工的原版色によりて、特殊の新味を漂はせんと工夫する所あつた。勿論この二版は、技術の點未だ完璧に至らず、折角の意匠も工夫も、畫面やゝ朦朧に失して、十分の效果を收め得なかつたが、兎も角も「小國民」

が、挿畫々家の撰定と其の印刷技術の方面とに、不斷の努力を惜まなかつた一事は、大に多としなければなるまい。

これより曩前年度の口繪にも、鞆音筆「後醍醐天皇笠置御夢」の場面を、寫眞亞鉛版に現し、其の要部々々を切抜きて、石版着色刷に現はせるは、即ち亞鉛版と石版との併用に俟ちて一新機軸を出し、以て技術的の效果を示せるものにて、正しく其の編輯者が、絶えず技術者と接觸を保ち、兩兩相倚りて、製版印刷上の改良進歩を圖りし證左と見るべきであらう。

却説、「小國民」は、第七年度に入るや、劈頭第一號に於て、「海軍の信號」と題し、多くの圖版を挿入して、手旗信號の詳細なる解説を試みたるところ、端なくも海軍法規に觸れ、編輯人發行人共に告發せられ、こゝに早くも禍の根の張られし感があつた。尤も「小國民」は、夙に海事思想の涵養を期し、毎號これに關する記事に力を傾けしことゝて、恐くは此の手旗信號の如きも、專門家の教示に俟てるものなりしやに想はれる。

已にして日清戰爭は其の局を結び、次で三國干渉の問題勃發するや、小國民記者は義憤止まず、特に其の卷頭の一頁を費し、「遼東半島」なる題下に、次の一文を掲げて、强く讀者の注意を喚起したのである。

遼東半島とは、讀者も知る如く、清國營口、海城、安平河以南、旅順口まで、曾て我征清軍が雪に臥し血を蹂み、硝煙彈雨の間に占領したる地にして、媾和條約第二條（これより曩小國民は、媾和條約文の要點を掲げてゐる）により、清國より我に讓與したる所なり、然るに去月十五日の御詔勅中に「露西亞獨逸兩帝國及法朗西共和國ノ政府ハ、日本帝國ガ遼東半島ノ讓地ヲ、永久ノ所領トスルヲ以テ、東洋永遠ノ平和ニ利アラズト爲シ、交々朕カ政府ニ慫慂スルニ其地域ノ保有ヲ永久ニスル勿カランコトヲ以テシタリ」とある如く、三友國は、半島の所領に就て忠言せり、是に於て、至尊陛下は、更に平和を害し、民生の疾苦を釀すに忍びさせ給はず、且つは清國既に講和の誠を致し、我交戰の理由目的は、天下に炳（あきらか）になりし今日なれば、かの半島を還したりとて、我大日本帝國の光榮と威嚴とを毀損する所なしと思召され、

石版寫眞版並用の一例（部分圖）

「小國民」の沒落

遂に三國の言を容れさせ給ひ、清國へ還附し給ふことゝなれり。嗚呼吾が親愛なる讀者諸子、寛宏にして御慈愛にまします　御聖意の程を奉戴し、海岳の御洪德を頌し奉るべし。

と、感激に滿てる一文を草してゐる。而も言外に、日本國民としての記者の心情の現れあることに何人も必ず氣づけることであらう。

方面を轉じて記す。「小國民」は、曩に明治廿三年の第三回內國勸業博覽會の開設に當り、かの「少年園」と共に筆を揃へて、相當多數の頁を割き、何回にも亘りてこれが詳細を報道したるが、今回の第四回博覽會には、好都合にも中川霞城山人が現地に在住する關係にて、「博覽會隔週報」と題し日出新聞畫工芳洲の實寫圖を添へて、每號これが報道に勤めしのみならず、學齡館よりは別に太華研堂、輒音等を京都に出張させ、霞城山人とは自ら別の觀點より、其の內容を檢討批判して記述報道せしめる所あり、併せて京都奈良邊の名勝古跡や、或は該地の風俗習慣等、道途の見聞にして苟くも少年に傳ふるに足るべきは、細大漏らさず詳密に記述して誌面の異彩たらしめた。中にも研堂散史の博覽會見物記中の、「油繪を觀る」の一章は、相當思ひ切つた批評を下してゐる。

第四回內國勸業博覽會なる美術館の樓上に、油繪類の出品僅かに四十餘點あり、これ我國今日油繪界の精を聚め、粹を鍾めたるものといふべし。

入りてこれを一見するに及び、これが我國油繪の精粹なるか、兼て、鑑査を嚴にして陳列を許したる美術品と聞きしは、斯の如きものなるかと、呆然自失、餘りに失望の末、終に數行の批評を試むるの止むを得ざるに至れり。

東京渡邊氏の琵琶法師の圖。先づ場內第一の出來なるべし、蕭洒たる法師、身體を後方に反らせて柱にもたせ、彈奏自ら樂むの狀、高澹無欲、景情共に到れり。

東京松井氏の形見の圖。軍人の未亡人が、夫の遺物を前に置き、二人の子に教誨する樣なり。夫人が、滿目淚を浮べて未だ泣かず、季子を顧みし顏貌、最も筆者の苦心を見る。幾多縱覽人をして泣かしめたるも無理ならず、唯、泣き居る長女の姿勢未だ堂に入らず、夫人の年齡、二子ある人としては若すぎるの感あれば、この長女は畫かざる方却てよかるべきか。

大阪山內氏の瞽女の圖。二人の瞽女、寺子屋的頑童にいたづらされ、泣き出さんとする狀、先づ難なし。

東京黑田氏西洋婦人背面の圖。裸體の婦人鏡面に對して髮を理むる、所謂裸形婦人畫なり、意匠平凡、筋肉を寫して婦人の特質たる豐艶を缺き、見るに足る點なし、唯赤裸の奇畫なるを以て、世人の口に上りしは、黑田氏の爲に幸といふべし。然れども同氏が俗論の如何に拘らず、シャパン派の新畫風を輸入したる功は、決して沒すべからず。東京淺井氏の支那戰後の家屋の圖。主點定まらず、凄味足らず、同原田氏の素戔嗚尊の圖。水中より頭をもたげたる八頭のお

ろちは、數尾のだつの迷ひ出でたるが如く、少しも神怪の相見えず、尊の服裝亦奇醜なり、之を、日本畫鈴木松年氏の群仙の圖と共に、和洋拙畫の一對とすべきか、而して二氏共に當代知名の人々なり。

この他、平壤沒落後の圖、朝鮮人喫煙の圖、田舍の圖、薄暮村歸の圖、山行の圖、春山樓閣の圖、肖像圖等あれども、視線を引くほどの伎倆を見ず。

數年以來、美術といふ文字流行してより、美術の範圍は大に其版圖を擴め、現今にては、大森の麥藁細工も、俗の俗たる團子坂の菊細工、入谷の朝顏細工、亦美術人形と廣告し、理髮店も美術理髮、醫者にも美術外科療治の自稱あり、果は詐欺師の廣告にも、美術內職の吹聽あり、而して博覽會美術館內の油繪は、これ等の美術品と、相距ること若干ぞや、噫。

當時の雜誌編輯者が、あらゆる科目に亘りて、一隻眼を具有し、其の好惡是非を甄別するの能力ありしは、此の油繪の批評によつても、大體想像し得るであらう、勿論少年を對照としての批評として、專門的見地よりすれば、正鵠を得たるものなりや否や、遽に知り難しとするも、濫に他に依存することなく、自己の受持てる雜誌に關しては、極力自己の才能と經驗とを驅使して、最善を盡さんとする熱意は、蓋し賞讃すべきであらう。

飜つてこれを思ふに、現代の少年雜誌記者も、せめて文展の紹介位は、暫く考慮に入れては如何

終刊の小國民表紙

少年に美術の必要なき筈なし、滿誌單に興味中心の作品を、流行作者の手に俟つのみを能事とせず自ら進んで、美術といはず、科學といはず、軍事といはず、あらゆる方面に研鑽を重ね、且其の手腕を揮ふべきは、少年雜誌記者の天職ではあるまいか。偶々研堂散史の「油繪を觀る」を紹介するに當り、此の感を深うせざるを得ない。

却說、第七年度の「小國民」は、其の第十八號の誌上に、「平壤包圍攻擊の一周年を回想し」て、次の如き極めて激越なる一文を揭載したるところ、ゆくりなくも治安妨害に問はれ、爲に同號は殆ど未發送のまゝ、全部沒收せられ、同時に發行停止の嚴命を受けたのである。

嗚呼會國。嗚呼、諸子の父上兄上又は伯父上が、平壤城の合擊に、肝膽を碎いて死力を竭した

るは、昨年の今月今日に非ずや。爾來、風雪の中、霜露の間、堅氷を嚙み凍飯を喫し、可愛の子弟妻女を顧みるに遑あらず、唯前往北京城を蹴破せんとせり。宜なり海陸破竹の勢を以て日東の光輝を八荒に灼々たらしめたること。

而して終末に於る光景如何。魯國の、かの遼東半島讓與に反對するは、自國の東洋侵略に不利なるが爲のみ、利己以外一理なきなり。我政府の之に對する政策は、有るが如く沒きが如く、一たび膝を屈して、笑を世界に求め、諸子の父兄の新墓の土未だ乾かざるに、見す〳〵占領地を還附せざるべからざるに至れり。嗚呼天下廣しと雖も、吾國民と軍人ほど憐れなるものは、それ幾何かある。

近來の外國新聞は又傳へて曰く、魯國盟主となり、清國の償金に關して云々すと、志士は演說を禁止されて、內閣の責任を正す能はず、新聞紙は停止されて外交の操縱を論議する能はず、すべて盲啞の日本たる今日、何んぞ好んで其間の消息をいふべけんや。

然れども、少年諸子覺悟せよ、吾國民の敵は、內國に在らずして海外にあり、正に上下心を一にして、其嚮ふ所を定むるに如かざるを、今日の世界は、正理の世界にあらずして威力の世界なることは、利己の貪慾のために、暴力の威嚇を以て其策を全ふしたる魯國の例に照して知るべし。我に威力あらば百の魯佛ありとも、何ぞ恐るゝに足らんや。

他年若し、魯國暴を吾に再びせば、搏擊一番、浦港を奪ひ、黑龍江を泝り、長驅直ちに彼堡を覆し伯林巴里を蹂躙し、大日本國民の實力を示さんのみ。斯くありてこそ、遼東廣原幽鬼の靈始めて地下に瞑すべきなり。平壤大捷の一周年に際し、敢て諸子に檄す。

以上が卽ち其の全文である。かくの如く憂國の至誠を披瀝し、頗る異色ある好文字を列ねたるも事苟くも政治問題に關するを以て、直ちに發行停止の悲運を招くに至り、前後七星霜、少年雜誌界の大王を以て自任し、我國少年社會に最も厚き信望を有ち、最も廣く讀者を有したる「小國民」はこゝに突如として而も永久に地上より其の影を沒することゝなつた。

さりながら「小國民」が、愛國心の迸るところ、非常なる勇氣と熱意とを以て、此の堂々たる大文章を揭げ、遂にこれに殉したるは、其の平生の主義主張に對しても、何等恥づべき所なく、此の雜誌のこれに依つて玉碎したることは、寧ろ其の終を完うせる者といふべきであらう。

一方「小國民」の發行停止に關して、「少年世界」十九號の時事欄には、「曩には少年園の條例違犯あり、今また「小國民」第七年十八號治安妨害發行停止の不幸を見る。本誌と共に、少年の伴侶たるもの、その再び解停の恩命に接するまでは、其可憐の聲を聞く能はず、噫小國民！」と、寧ろ好意的の報道を試みてゐる。卽ちこれに依つて見れば、「少年園」も亦この頃まで存續しあり、且條例違犯によつて、其の發賣を停止せられしことが明かに知られ、又「小國民」に對する「少年世界」

の態度も、もはや「幼年雜誌」時代の如き葛藤を見ず、これが編輯上にも、格別の差異を示して、全く別方面を辿りしことが思はれ、「少年世界」の地位の益々堅實に赴きつゝあることを窺ひ知られるのである。

第四節　「小國民」の功果

「小國民」は、明治廿二年七月創刊以來、年を經ること實に七年、號を重ぬること約百三十餘冊、此の間同一の編輯者に依りて、絶えず誌面の改善に力め、時には、大膽驚くべき編輯方式に出で、或は採算無視に等しき手段をさへ用ゐ、慶を讃者に頒つことに專らにして、亦他を顧みなかつた如きは、到底營利第一主義の出版者の夢想だも爲し難き點であつた。さればこそ天下の少年は、靡然として此の一雜誌に傾倒し、絶對に他をして追隨せしめなかつたのである。

卽ち、これを想ふに、「小國民」の營經者が、其の編輯上の全權を、擧げて主任記者の存意に委し毫も容喙する所なく、自由に、奔放に、大膽に、十分に、其の手腕を揮はしめたる大度量が、この好果を齎らしたる最大の原因と見なければならぬ。編輯主任者も亦經營者の意の有る所を慮り、心を他に移さず、專念其の事に當り、かくして兩者は渾然一體となり、以て能く其の妙諦を發揚し得たものと言はねばならぬ。而も斯の如きは、後來の雜誌經營者の努めて模倣すべき美點ではあるまいか。

「小國民」は、常に讀者の上に立ちて、指導啓發を旨とすること七年間曾て變る所がなかつた。それ故にこそ讀者との交渉も、亦最も緊密なる連絡を保たれ、文章の投書には、親切周到なる添削を試みて注意を促すと共に、更に實益と娯樂との方面にも、隨時新しき工夫を案出して、讀者との關係を增大した。

例へば、「種子交換會」を設けて、讀者相互の間に、種苗の贈與を行はせ、「日本第一大物盡し」に各地の名物を報道せしめ、或は「工夫畫」「變化戲畫」「連續漫畫」の類に、讀者の考思を競はしめるなど、何れも兩三年の長きに亘りて、終始其の誌面を賑はせたものである。

讀者の考案せる變化戲畫の一例

また此の雜誌が、繪畫の進歩發達に寄與したる功績は、甚だ顯著なるものがあつた。殊に繪畫の利用によつて、記者自らの趣向に出でし者の中、「教育幻燈會」「小兒百面相」、若しくは「繪兄弟」及び「續繪兄弟」等は、最も讀者の歡迎する所となり、分けても「繪兄弟」正續數十面の記述は、大人の讀み物としても面白く、同誌の讀者間には、これが連載を希望する者頗る多かつた。次に日清戰爭時代に見ゆる二三を、挿

畫と共に再現させて見よう。

(一)月夜に釜をぬく。 頭は鐵砲玉を防ぐべく、足は丈夫の藁鞋ありて嚴寒を凌ぐべく、これで第一軍に從はゞ、銃丸も嚴寒も釜わん釜わん。

月夜に釜をぬく

(二)父のまねする子。 坊ガ、父ニ於テノ帽子ヲ被リ、ソシテ、靴ヲモ穿キ能フ、帽ノ中ニマデ、坊ガ、靴々ト笑フベク試ミル。

(一)肩車。 坊「とうさん、肩車は何で作つたの」「肩で作つたのさ」「そんなら口車は」「口車は虚言と辨口で作つたの」「鼻車は」「鼻車なんつてないよ」「齒車は」「時計の中にあるの」「支那の軍艦はいつでも手ん車い」

(二)騎兵。 「今斥候に出て往かなければならんのだのに、肩車の對にするから、寫生する中正面向いてじつとして居れなんツてのんきな編輯者だ」

(一)三角塔。 いかに洋語が洒落に入りにくくても、眞白な雜誌も出せぬし、若し乞食の題なら埃及のピラミツトを、一分程のシラミトルと洒落るんだが。

(二)海坊主。 理科學の開けるに從ひ、おいらも成り立ちさうでない、丁度蚊帳を質入した貧乏人の様に、カガクウ、リガクウで攻られる哩。

三角塔と海坊主

かやうな短文の中に洒落を混ぜ、いはゆる寸鐵殺人の妙味を含めさせ、出づる毎に讀者の腮を外さしめたもので、これは研堂散史の創案に依ること云ふまでもない。

謂ふに「小國民」の編輯は、部内に、熱意に富める主筆研堂の博識多才と、鹵男子の明敏なる頭腦と、縱横の文才とを兼ねるあり、外に高橋太華山人の國史と美術とに力を注ぐあり、更に中川霞城山人の理科博物、及び少年社會の指導方面に麗筆を揮ふあり、而もこれ等の人々が、覆面して各得意の方面に其の力を恣にし、名利を超越して少年の教育薫陶に貢献したる一事は、かの賣名と利得とを旨とする者の、遠く及び難き美點といはねばならぬ。

太華山人の「日本十八勇將傳」「本朝五將軍傳」及び「和漢忠烈傳」等は、連續數十號に亘りて、附錄式に取扱はれ、精密なる挿畫（永洗、桂舟、輒音、半古）と相俟つて、「小國民」の特色の一となつた。而も太華山人は、一

「小國民」の功果

方美術の方面にも、絶えず讀者の認識を深めることに意を注いだ。次に掲ぐるは、第六年九號に見ゆる「美術學校の卒業製作」と題する記事にて、こは啻に太華山人の審美眼を窺ひ知るばかりでなく、今日これを讀むも、別の意味に於て、甚だ妙味を感ぜしめるものがある。

美術學校の創立以來未だ幾年ならざるに、此に其卒業製作の好成績を得たるを見て、余は其當局者の苦心と修得生の熱心とを感ずると同時に、又此美術の眞に我が國人の天性に適するものなることを深く信ずるなり。顧ふに大學其他諸學藝を教ふるの學校其數多く、其卒業生亦甚だ夥しけれども、顯著なる好成績を得しこと此美術學校の如きは少なかるべし。これ決して教授の方法其宜しきを得たること他の諸學校より優れたるにあらず、即ち天禀此好成績を得べきもの、此生徒否此我が日本人に存するに由るのみ。

聞く、美術學校生徒が、日々業を修むるに、其時間の短きを歎ち、教師に迫り校長に請ひ、數時間を増し、休業の時間にも外に出づるは稀に、皆其室に閉ぢ籠りて、修業に餘念なく、退校の時刻に至るも退かんとせず、屹々輟まず、身心の疲るゝを忘れて、唯暮色の來るを憂へ、小使に促さるゝこと再三にして後校を退くこと常なり。故に小使は此學校に使はるゝことを最も厭ふとぞ。これを他の學校生徒が、學を修むるに比すれば、果して如何ぞや。事故によりて教師の缺勤し其課の休みとならんことを喜び、試驗前なりとては休み、試驗後なりとては休み、運動會の下稽古なりとて、何なり彼なりとて、休みの多からんことを希ふは、諸學校生徒の常なるに、獨り美術學校生徒が其業を娛むこと此の如きものは、豈奇ならずや。凡そ業の進むは自ら好むより甚だしきはなし、其成績の著しく他より勝るゝこと亦宜なるかな。

同校は其卒業成作物、其他教授に關する事柄を世の有志者に知らしめんが爲め、四月十三日（明治廿七年）より十六日まで、校内に授業成績物展覽會を開いて篤志者の縱覽を許せり。蓋し其各課の成績に就いては、觀る人の心によりて、是非一樣ならざれども、其進歩の著しき一點に至りては、舌を捲きて驚かざる者なかりしなるべし。

校内陳列の多き、一々記すべきにあらざれど、卒業製作にのみ就いてこれを觀るに、鑄金科には石川己七雄氏の蘭陵王の像、武田三四郎氏の菅公の像、宮田辰太郎氏の龍女の像あり、何れも名作にして、僅々四年の修業なるに、いかにしてかくまでと思はるゝばかりの成績なるが中にも、蘭陵王は面貌體格最も面白く、衣服の如きも頗る鑄にくかるべく見ゆるを、事もなげに木彫よりも巧なる如く仕上げたるは、巧手腕といふべし。

彫刻科には、大村西崖氏の聖德太子の立像、白井保次郎氏の老子、宮本二七郎氏の西王母、何れも刀法正しく、敢て自ら一機軸を出すの跡あるを見ざれども、これより進まば其變化測られざるものあらん。蒔繪科には、藤岡注多良氏の武藏野蒔繪の香棚、意匠といひ手際といひ、巧

妙言ふばかりなし。此他石川準禮氏の山水蒔繪の硯箱、津村米太郎氏の山水蒔繪の料紙箱、秋月復郎氏の萩蒔繪の文臺、武谷富造氏の櫻蒔繪の手箱、或は意匠を以て、或は技術を以て、或は緻密を以て、或は風致を以て、各其巧みを競へり。

又繪畫科に在りては、其卒業生最も多きが故に、其間に巧拙の甚く相異るあるも素より宜なれど、中に就いて下村晴三郎(觀山)氏の熊野御前花見の圖を絶品と推すべし。最も深く土佐光長の筆意を學びしものと覺しく、人をして伴大納言の繪卷物を見るが如き思ひあらしむ。次には本多佑輔(天城)氏の王昭君嫁胡の圖、拔群といふべきか。荒涼寂寞の胡地を獰猛獸の如き胡人に擁されて、絶世の美人白馬に騎して行く、おのづから絶好の畫題たり。これを撰むこと既によし、況や之を描くに足る氏の手腕あるをや、幾千の觀客、此前に立ちて去る能はざりしも宜なり。次には倉田德松(松濤)氏の武藏野の景、古人以外に一新奇を出さんとせしもの、其着想や稱すべし。西洋畫に趣きを取りしが如き痕迹あれども何ぞ病むに足らんや、粗野に流れずして韻致に富むこと此の如く多きは、凡手に能はず。

島田佳矣氏の德川式室內裝飾圖案、關保之助氏の藤原式室內裝飾の圖案は、共に苦心の程顯はれて有益なること他に勝る遠けれども、展覽會の觀客に左程注意を牽かざりしは遺憾なり。されども技藝を害するは俗人の嗜好に投ぜんとする一念より大なるものなし。二氏念頭に置かずして可なり。

此他、西鄕規(孤月)氏の俊寛鬼界ヶ島の圖、見るべしと雖も、溝口禎三郎氏の菅公左遷の圖、岡本勝元氏の楠公訣別の圖、横山秀麿(大觀)氏の村童猿舞を觀る圖、其製作に經營慘澹の痕は明かなれども、稱すべき程にあらざるぞ口惜しき。

抑學校は平等に多くの生徒を導きて進むべきものなれども、美術の如きに至りては、必ずしも然る能はず、其中に傑出するもの一二人を出さば、其功を奏したるものといはざるべからず。然るに今多くの卒業生を出して、優等のものを得たること一科に二三人に上るは、豈異數として悅ぶべきにあらずや。

蓋し本校の教師には、繪畫に橋本雅邦先生あり、彫金に加納夏雄氏あり、彫刻に高村光雲氏あり、鑄金に岡崎雪聲氏あり、何れも皆其道に於て、今日の泰斗として世の普く仰ぐ所の人ならざるなく、殊にこれを總管するに岡倉覺三氏の才と學とを以てす。是れこれを以て彼の教へざるも且つ美術の思想ある我が國人、否我が國人中最も厚くこれを好み、これを樂む此生徒を養ふ、今日の好結果あるも亦偶然にあらずといふべし。

と同情ある筆致を以て、美術學校の卒業生を祝福し、其の製作物を品隲するに炬の如き美術眼を以てするところ、當時斯の人ならでは爲し難かつたものと思はれる。而も亦此の記事を讀める少年

中、恐らく其の幾人かは、志望を美術界に立つるに至れることと、亦疑ひなき所であらう。

次に、中川霞城山人が、其の得意とする科學談の外に、一般社會の動向に就いて、或は少年に諮問し、若しくはこれを勸告せる記事も少くなかつたが、特に「大將人形の祭に就て」と「小國民の爲に玩具の乏しきを訴ふ」の二篇は、共に「小國民」の卷頭を飾れる卓說にて、識者をして大に敬讀せしめたものである。

大將人形の祭に就て。三月三日に雛人形を祭り、五月五日に大將人形を祭りたるは、維新前のことにして、且節句なるもの丶廢せられざる時代のことなり。

維新の革新は、百般の舊弊陋習を打破一掃するに急なりしかば、深くも物の性質を研究せずして廢止したるもの極めて多し。雛祭、大將人形祭の如き亦其一となさゞるを得ず。何となれば雛祭の優美なる、大將人形の勇しき、男女小兒の祝祭として最も教育上に裨益あるものなればなり。

さればこそ、一旦廢せられたる二種の人形も、一時其影は隱したれども、いつとなく社會の迎ふる所となり、數年以前より又もや復活の勢を得て、年々歲々、都鄙共に二種の人形の漸く流行を見るに至りしなれ。されど今日の有樣を見るに、新曆と舊曆との差ありて、甲地に於ては陽曆の三月三日を以てし、乙所に於ては陰曆の上巳を以て雛を祭り、五月五日も亦之れと同じく、陰陽舊新一ならず、從つて小兒の快樂幸福を感ずることも、一般の祝日たりし昔の日に比ぶれば、同日の論にあらず、成るべく此の如き祭日は、一般に同時に行ひてこそ興味多けれ、區々にては快樂も大ならず、幸福を感ずることも深からざるなり。

余は常に此の小兒の祝日を回復せんことを慫慂し、且つ各地同時に此祝祭を執行せんことを希望したるに、玆に本年は此希望を達すべき好機會を得たり。他にあらず、曩に我　皇兩陛下の御結婚滿二十五年の御祝典を擧げさせられたる三月九日是れなり。實に此日は吾輩臣民の長く記念すべき大祝日にて、雛人形を祭るには此上もなき吉日なり。現に京都は余が其日出新聞紙上に此事を唱道したるより、此日を以て雛祭したる人多く、唯本年のみならず、今後は三月九日を以て舊時の桃の節句とし、長へに我　皇兩陛下の萬々歲を祝し奉らんと云ふ。獨り京都のみならず、誰の考へも亦一なり、他の地方も此日を以て雛祭の日とし、長く記念となさんと云ふ人多し。

一體祝祭の如き風俗事は、人の感情に印して、無限の趣味あるものなれど、此人事は又其時の時候と和して、而して感情に入るものなれば、縱し此度の大典が、雛祭に好機會なりと云ふも柳も桃も更に春を裝はざる時候ならんには、余は決して此大婚の日を以て雛祭に適當とは認めざるなり。唯時候も上巳に近く、桃柳も將に紅綠を吐かんとする時季なりしかば、好機會なり

と信じたるなり。

雛祭は三月九日といふ無上の好記念日を得たり、復た新舊暦に拘はる可からず、大將人形も之と同じく、陰暦陽暦の五月五日の外に、最も大切なる日を得て、都鄙共に此日を以て男の子の祭日となしたきことならずや。而して古來此祭は初夏に於てしたれば、矢張り之も夏ならざる可からず、然らざれば人の感情には入り易からず、是に於て余は此祭典は四月三日を以てせんことを茲に讀者に告げんとす。是れ卽ち　神武天皇祭の日にて、猶ほ彼の大婚の記念日と同じく、吾輩日本の臣民、就中男兒は　天皇の武德を仰ぎて、尙武の士氣を養はざるを得ざるの日ならずや。

されば女の兒は、三月九日を以て、雛御夫婦を祭り、畏こけれども其御前に草の餅献じ、白酒奉りて、萬々歳を祝し、供御の御膳も自ら調理して庖厨のことを習ひ、女子の家政に於けるの智識を遊戯の中に學び、兼て婦道の教訓も得べく、男の兒は四月三日に大將人形を祭りて、神武天皇の御德を慕ひ奉り、武具甲冑種々の武者人形を見て、武勇の氣質を養ふ方便ともなさば男女の教育上、一は優美、一は武勇、これにましたる刺戟はあらじ。（以下略）

小國民の爲に玩具の乏しきを訴ふ。　兒童の玩具は、國々の文明の程度に從ひ、多寡あるは疑ふ可からず、一國の文明いよ〳〵高くして、其國の兒童社會に、いよ〳〵有益の玩具多く、教育が間接に玩具の上より及ぼす所の勢力は、實に甚だ大なるを知る、されば吾輩少國民諸子の爲め茲に一たび眼を玩具の上に注ぎて觀察を下す、復た甚だ重要なる事件なるべし。

我國幸に幼稚兒童の爲めに造れる玩具の多き、決して彼れ歐米に比べ、劣らざるを知る。試みに去つて坊間の所謂人形屋なるもの〻店頭に立て、大小種々の玩具、殆ど數ふる遑無かるべし。然りと雖も吾輩をして其缺點を言はしむれば、教育家の考案に成りしもの、尙ほ甚だ多からざるを認む、學術上の裨益あるもの多からざるを認む。是れ豈兒童の爲めに幸福なりと云ふを得ん、されど近來此種有益なる玩具の日に新案に成り、若くは西洋の輸入物、又は模造品ありて、漸く富饒を致すの傾あるは、深く兒童の爲に喜ばずんばある可からず、然らば茲に玩具の乏しきを訴ふとは、何種の玩具を指すか、請ふ試みに左に其要を說かん。

幼稚の玩具は已に其種類多く、敢て乏しきを感ぜざるも、年稍々長じ、十歳より十四五歳に至れる少年の玩具の多からざること是なり、近來少年書類の印行日に新を競ふは、誠に此年齡の兒童の爲めに滋味を與ふる好食餌なりと雖も、玩具は獨り圖畫書籍に止まらざるなり、尙ほ他に種々の物件無かる可からず、幼稚の遊戯をして次第に其歩を進ましめ、間斷なく新材料を與へて、終に生活職業の社會に導かんと欲すれば、唯幼稚者の玩具のみを以て足れりとせず、進んで各年齡に應じ學業に階級あるが如く、玩具にも亦次第に遊戯よりして生活の實務に近寄ら

しむるの工夫を要するや無論なり。

然るに不幸我國目下の景況は、五七歳までの幼稚には、優に玩具の恩物あるも、此より年齢長ずれば、書籍の外殆ど恰好の物品無く、誠に寥々の觀あるは遺憾限り無し。

少年には各天賦あり、能力あり、其能力天賦は、事に臨み物に觸れて顯はれんとす。されば父兄故らに之に玩具を與へざるも、自ら撰みて、畫を好む者は砂上に描き、工を愛する者は自ら水車を作りて細流に轉ぜしむるが如き、隨意に其天性に驅られて、遊戯に我能力を練習するに至ると雖も、父兄たる者彼が意向に放任し置く可きにあらず、況して斯ては往々性癖の爲め、他日に害を及ぼすこと無きにあらざるをや。されば成るべく其天賦稟性に應じて、早く適宜の玩具を與へ、以て正當なる啓發を遂げしめ、生活社會に出づるの練習をなさしむるに如かず、坊間既に此種玩具の二三は無きにしもあらず、例へば昆蟲捕獲の具、大工道具の一揃、金石採集の用具、禽獸剝製の用具の類、今は購求し得べしと雖も、其價の不廉なる、未だ廣く世の少年の需用に入り難し、他なしこれ多くは西洋の品に倣ひたれば、我國人の生活の度に應ぜず、小錢を以て購ひ易からざるなり、工夫を施し折衷斟酌せば、價を減ずる必ず著しきものあらん。

左に掲げたるは、獨逸にて彫刻を好む兒童の爲にしたるもの、歐人が少年の教育に心を用ゐる、夫れ此の如く到らざる無し、我教育家が獨り少年に書籍を與ふの利益を認め、眼光未だ他に向はざるは何が故ぞや、宜しく我國今日の情況に應じ、畫を好むものに容易に繪具一式を與へ得るが如く、手輕なる大工道具を與ふべし、簡單なる彫刻道具を與ふべし、草花培養の具、粘土細工の具、化學試驗の具、電氣機械の類、寫眞撮影の道具、鵝爾華尼鍍金の道具、其他此種有益なるもの尚ほ少なからざるなり。

父兄たる人、請ふ無益の費を省き、子弟の爲に此類の玩具を新調せよ、註文せよ、購求せよ、玩具を製する人亦宜しく教育家及び各技術家に就き新材料を得て、兒童の爲に技藝教育の玩具を作るべし、一國の文明は實に玩具の如何によりて徵するを得、殊に日本人は工藝美術に先天の能力あり、之が誘導に怠るべからず、是れ茲に少年の爲高等なる玩具の乏しきを訴ふる所以なり。

右に掲げたる「大將人形祭」の說は、霞城山人が最も熱心に唱道したる所にて、京都日出新聞を始め、「少年園」にもこれを寄せて、大に輿論を喚起したものである。また「玩具論」に至つては、今日よりこれを見るも、甚だ敎へらるゝ點多く、確に卓見といふべきである。

斯くの如く「小國民」は、啻に少年のみならず、敎師父兄の參考に資すべき意見をも、常にこれを採用する一方、更に挿畫の如きも、新陳代謝の用意を忘却せず、淸親永洗に次いで、小堀鞆音、梶田半古を起用して、專ら日本木版の美を發揮すると共に、洋畫には茂木習古、佐久間文吾、渡部

金秋等を集めて、縱横に其の能才を驅使せしめたが、これ等は美育に專志せる太華山人の理想に出でしものかと想はれる。

此の故に、僅々六十頁内外の小雜誌ながら、居然として雜誌界の大王を名乘り、かの「少年世界」の出現まで、如何なる同種類の雜誌をも、絶對に追隨せしめず、嶄然一頭地を抽きて、覇を稱したる一事は、亦偉とすべきものである。

第五節　再生せる「少國民」

突如として發行停止の嚴命を下されたる「小國民」は、遂に再び解停の恩命に接し得ず、仍て同年十一月十二日、即ち停止後五十八日を過ぎて、新たに「少國民」と題して更生するに至り、小は少となり、號數も舊を追ふことなく、單に第一號として取扱はれた。記者の辯明には「名稱は何にてもよきことなれば、本誌は少國民の題名にて爾今發行すべし、況や小さき國民に比すれば、少き國民の方が、意義も幾分か妥當なるをや」と記して、讀者の諒解を求むる所あつた。

勿論、多年培ひたる「小國民」の地盤は、意外に牢乎たる者があり、小は少に變り、且つ其の誌面にも、「小國民」時代に於けるが如き潑剌たる精彩はこれを認め難かつたに拘らず、熱心なる讀者は、双手を擧げて、「少國民」の再生を祝賀し歡迎した。其の第一號の卷頭には、發行停止に關して至極婉曲なる一文を掲げてゐる。

「君、君、君！　此間の便船に、魯西亞の雜誌は來たかい。「來ないさ。「僕も大層待ツてたが、まだ來ないよ。どうしたんだらう。「聞けば發行停止ださうだ。「エ、發行停止。それは一體何ぢやい。「雜誌の發行を政府からさし止めるのサ。「外國にそんな規則があるの。「有るツて、治安妨害か風俗壞亂のことを書くとさし止めるのさ。「治安妨害、風俗壞亂、えらい六ケしいことだネ。字引で引かないと分らない。「治安妨害は、政治上について、治安の妨害、風俗壞亂は、みだりがましき卑陋のことを書いた時サ。「それで分つた。聞いて見れば尤ものことだネ。そしてあの雜誌は、どツちを喰ツたの。「治安妨害。「そりやア氣の毒だ。「かわいさう

再生せる少國民表紙

ヨ。「一寸でもいゝから見たいネ。

この時後より呼ぶ聲あり、「三郎、どうしたんだ。早く汲んでおいで。「ハイ、只今。今、水汲みに往く途中なんだ。長咄しで、爺に叱られた。それで僕も、ちやんの妨害、發口停止だ。アハヽヽヽ。あばよ。（此の記事には二少年の立話する傍に、巨大なる人面の口部に、二本の鎹を打込む圖を掲ぐ）

何れにもせよ再生の「少國民」は、曩日の「小國民」に比して、外裝內容とも、著しく見劣りがあり、いかにも俄造りの間に合せ物といふ感じがあつた。かくして本年度內には、一號より三號までを豫定の期日を違へず發行した。然るに一方、今春來惱みの種となれる海軍信號の條例違犯問題も、無事解決を告げたことゝて、こゝに猛然として新鋭の意氣を振ひ起し、舊時に優る面目を發揮して、其の使命達成に邁進することゝなつた。

卽ち、明治廿九年度の第八年「少國民」は、讀者の豫期に反せず、大飛躍、大發展を示し來つた。而もそれは全く型破りのもので、從來の少年雜誌には未だ類例のない新工夫の下に織出されし破天荒の形式であつた。先づ、每月一日發行の分を甲種と名け、十五日發行の分を乙種とし、甲種の編輯には、主として太華山人が擔り、乙種は從前の如く石井研堂の手に編輯せられた。然るに甲種の形式は、赤門紙四六倍判三十二頁（他に普通洋紙四頁を加へて少年の投書欄に充つ）の大冊子にて、乙種「少國民」は、菊判百餘頁とし、定價は共に五錢に引上げ、交互にこれを發行するといふ新機軸を出したのである。

併しながら少年用の雜誌に、四六倍の形式を採用するの是非は、多大の疑問があつた。曾て「幼年雜誌」は其の第二卷（明治廿五年度）に此の形式を用ゐて、まんまと失敗を招ける先例もある。然るに今甲種「少國民」が再びこれも踏襲したのは、果して策の得たものであらうか。尤も學齡館は兩三年前「少年博物志」を發行して、四六倍判形に相當の自信あるらしく、さう思つて見れば、甲種「少國民」は、「少年博物志」の再現、若しくは其の變體とも考へられ、これが內容にも多數の寫眞銅版を使用せるのみならず、當然木版畫とすべき輒音筆の歷史畫風のものすら、すべて寫眞銅版を以て現出した。

殊に改新第一號の甲種「少國民」は、其の年の干支に因みて、全卷悉く猿の記事のみを集め、或は動物學上より見、美術上より見、傳說童話より見て、約十數種類を收錄し、正に猿號ともいふべく、編輯者の苦心努力の尋常ならぬを看取し得らるゝも、これが爲に誌面著しく單調に墮し、どの頁もどの頁も、繰る每に猿ばかり現れ、折角苦心の意匠も、凝り過ぎては却つて獨善に陷り、爲に讀者の興味を牽くこと薄く、旣に此の一冊を以ても、失敗の兆歷然たるものがあつた。

然るにこれに反して、乙種「少國民」は、依然として菊判型を堅守し、且緻密周到の編輯振にて

多種多様の記事を集め、口繪にも從來通りに、石版多色刷の外、二三丁の珍奇なる寫眞銅版を加へ、これが内外全體を通じて、頗る變化に富み、且卷末の十餘頁を開放して、專ら少年の投書（文章、笑話、考物、互報、其の他）に充つる等、恰も舊「小國民」の延長とも見られ、爲にやゝ「少年世界」の後を追ふらしき感なくもなかつた。

かくの如く甲乙兩種の編輯形式は、果して讀者の歡迎を受け難く、多くの熱心なる投書家は、寧ろ此の際甲種を廢して、專ら乙種のみを發行ぜられ度しと、再三希望する所あり、且實際の賣高にも、甲乙兩種の間には、可なりの距ありしものゝ如く、早くも半ケ年後には、此の新制を破却して乙種型のみとし、漸く讀者の意を充たして、其の信用を維持したのである。

此の爲に甲種「少國民」は、たゞ六冊を發行したに過ぎなかつたものゝ、世にいふ過を改むるに憚る勿れで、「小國民」が自ら非を悟りて、此の勇斷に出でしことは、甚だ賞讃すべきであらう。元來、學齡館は、「少國民」の發行に、全力を傾盡すると共に、各種の良心的出版物を續發して、少年社會に貢獻する所多かつたが、惜いかなこれ等の企劃は、「小國民」の發行停止に依りて一頓挫を來し、爾來何等の新刊書も企てられず、且唯一の生命たる「少國民」も、何處となく漸く生氣に缺け辛うじて孤壘を守るらしく感ぜられた。

由來學齡館の經營者高橋省三は、「小國民」の進歩發展を期するを自己の天職とし、燃ゆるが如き熱意の下に、殆ど採算無視にて今日に及べるが、かの條例違犯といひ、又發行停止といひ、矢繼早の痛手を蒙りて、内部にも漸く運轉の圓滑を缺くに至り、遂に其の勢の趨くところ、これが一切を擧げて、全國大賣捌所北隆館の手に委ね、脆くも退陣せざるを得なかつたのである。

「少國民」が、事實上北隆館の手に移りて、其の發行所名を變更したるは、翌九年度（明治三十年）第一號よりである。而も研堂太華兩者は、依然として此の雜誌の爲に精勵奮闘を繼續し、且從來の熱心なる投書家も、これを支援するに吝ならず、北隆館移讓後の「少國民」は、悉なく其の發行を繼續し、相當の成果を收めしことは事實である。

併しながら新發行者は、前者と異なり、專ら營利を主とせる關係にて、收支計算に其の重點を置けるにより、この方針は亦直ちに誌面に影響を及ぼし、用紙は次第に粗惡となり、挿畫も鞆音半古等の影消えて、當時の二流どころなる前田竹坡、尾竹國觀兄弟の外、無名作家の手に成れる粗畫を多くし、曾て「小國民」の特色と見られし西洋木版は、全然廢止せられて一も殘らず、隨つて記事は追々に學術面より遠ざかりて、興味中心の長篇讀み物を主とするに至つた。併し只此の間、「少年夜談」と、「富士山奇觀」の二種の臨時增刊を出して、特殊の光彩を放たしめたるは、蓋し其の最後の美を飾れるものと云ふべきであらう。

はじめ北隆館は、「少國民」の發行權を獲得するや、同時に「少年倶樂部」と題する投書專門の一

雜誌を創刊し、兩々轡を竝べて、大に天下に雄飛を試み、同時に「少國民」の勢力發展に努めた。即ち明治三十年一月を期して、これが第一卷を發刊し、爾後毎月一回づつ發行を繼續して、兩三年に及び、而してこれが編輯には、渡邊光風を迎へて主任たらしめた。光風は歌文の妙手として、夙に青年間に名聲ある人である。

「少年倶樂部」は、菊判百十二頁の堂々たる雜誌にて、表紙に石版三度刷を用ゐ、口繪として新樣式の着色寫眞銅版畫（二枚大）一葉を添ふるも、其の性質上挿畫は無く、本文全部五號二段組に依り、卷頭には主任記者の論文一章を掲ぐる外、他は全部讀者の投稿を以て塡め盡せるもの、これが欄を分ちて講論室（論說文）、文談室（小說、新體詩）、淸談室（紀行文）、奇談室（內外史談）、通信室（書簡文）、雜談室（雜錄）、笑話室、和歌、漢詩、俳句等とし、殆ど當年の「少年文庫」に類する傾きがあり、其の收容せる投書家人名に依つて、「少國民」の同胞たることは、一見極めて明かであつた。又これが投書家中には、現今浮世繪の研究を以て知らるゝ田中喜作、東京文理大敎授神保格、及び鈴木三重吉等の馳驅するのが見られた。

一方既に落潮を來せる「少國民」の經營は、漸次困難に赴けるものゝ如く、其の挽回亦容易ならず、殊に營利を主とする以上、發行部數に比例して、冗費を省くこと固より當然なれば、兎角萬事が消極に墮し、何等の思ひきつたる改善も施すに難く、かくて月を閱し年を經るまゝに、益々其の存在を危ふからしめるに至つた。

されば にや研堂散史の述懷にも、「發行者の都合にて、發行權を北隆館に移してよりは、用紙製版漸く粗惡になりたれば、予は第十一年廿三號限り、編輯を辭して關係を絕てり、その時、十一年間里子に預りたる幼兒を、親元に返す如き、一種悲愴の情有る旨を述べたる別辭一篇を付けて後繼者に引繼ぎたりしが、そは販賣上の不利の爲めか、終に登載されずして已み、雜誌も其の後一年まで續刊せざりしが如し」と記されてゐる。

少年倶樂部の表紙（石版着色）

かくて「少國民」は、それより幾程もなく、北隆館の手を離れて、鳴皐書院（上村才六）の經營に歸し、專ら投書專門のみすぼらしき形體となりて、辛くも餘喘を保ちつゝあつた。これが新經營再生せる「少國民」

者上村は、賣劍と號する漢詩人にして、勿論營業上の才に乏しく、且雜誌其の者が最早や存在を忘らるゝ狀態なれば、到底これを維持すべくもなく、やがて三轉して日本橋方面の某赤本屋の手に移され、こゝにて兩三號を發行したるまゝ、遂に全く其の形骸を沒するに至つた。とは恰も日露戰爭の初期、卽ち明治三十七年夏の頃なりしかと記憶する。

回顧すれば、假令其の名稱こそ「小」を「少」に改めたれ、十有餘年の久しきに亘り、廣く少年間に愛讀せられ、且つ多大の貢獻を效せるだけに、其の最期の有樣の、朝日に消ゆる霜柱にも似たる果敢なさには、眞に一掬の涙を催さしめるものがあつた。なほ其の後「小國民」の名に因つて、新たにこれが發行を企つる者二三あつたが、何れも所謂三號雜誌の不幸に終り、一として發育を遂げ得なかつたのは、時代趨勢の然らしむる所か、但しは其の名稱の、既に世に飽かれしが爲か、それとも宣傳の足らざりしか、或は運營の圓滑を缺ける爲かは知らねど、兎も角も「小國民」は、其の發行停止と共に、斷然これを葬り去るが、寧ろ賢明の策では無かつたであらうか、否か。

第六節　「日本お伽噺」の發刊

巖谷漣山人は、「日本昔噺」全部廿四冊を完成せしめ、更にこれに引續き、非常の勇氣と自信とを以て、「日本お伽噺」二十四冊の編纂に着手し、堂々として其の總目次を揭げて、天下の幼年兒童に宣傳するや、彼等は等しく双手を擧げて贊意を表し、これが發刊の日を翹望した。尤もこれより曩「日本昔噺」第廿二編猫の草紙の末尾に、「日本昔噺がいふ、もうあと二篇でおしまひですよ、日本お伽噺がいふ、其次には私が控へて居りますよ」と輕い意味の豫告を記して、昔噺の愛讀者に知らしめたのは、昔噺が漸く終列に近づいて、少なからず寂寞を感じつゝありし兒童に對して、此の上もなき天來の吉報であり希望の光明であつた。

蓋し「日本昔噺」が、主として古來のいはゆる「昔話」を集錄したるに反して、今次の「日本お伽噺」は、國史上の事實、並に日本古來の傳說に材料を採り、且其の時代より見るも、國初より現代に亘り、何れも幼年兒童に最も親み多きものを選みたる等、昔話以上の效果を齎すべきは、亦云ふまでもあるまい。

「日本お伽噺」は、下記の種目によつて成立つてゐる。（括孤內は作畫者）

第一編	八咫烏	（久保田米僊）	第二編	田村將軍	（水野年方）
第三編	玉取	（梶田半古）	第四編	源三位	（尾形月耕）
第五編	八幡太郎	（筒井年峰）	第六編	武藏坊	（右田年英）
第七編	一休和尙	（鈴木華村）	第八編	東照宮	（小堀鞆音）
第九編	姨捨山	（梶田半古）	第十編	川中島	（山中古洞）

第十一編　玄武門　（久保田金僊）
第十三編　鎭西八郎　（尾形　月耕）
第十五編　朝比奈　（筒井　年峰）
第十七編　草薙劍　（小林　永興）
第十九編　文覺上人　（梶田　半古）
第二十一編　高千穗　（鈴木　華村）
第二十三編　熊本城　（水野　年方）

以上の編次を見るに、必ずしも時代の順序を逐はず、やゝ前後交錯の感あり、例へば「草薙劍」の如きは、「八咫烏」の次に入り、終篇の「宇治川」は源平時代の物語なれば、寧ろ「高千穗」を以て終篇とすべきが當然であらう。さればこそ最初發表の豫定目次には、「宇治川」を第七編とし、「玄武門」を十二編に入れ、更に十三編より再び時代を溯りて、相當順序の正しきものあつたが、中途より執筆畫家の遲速によりて、其の順番に可なりの不同を生じたものである。

「日本お伽噺」は、「日本昔噺」と同じく、多色刷表紙に一定の色紙形を劃し、これに內容を代表すべき人物を現し、挿畫は各冊とも十版內外を加へ、他に附錄として、作者が從來「少年世界」に發表したる短篇のお伽噺一篇を添へ、總頁數七十頁前後を數へた。卽ちこれを前の「日本昔噺」に比

第十二編　白虎隊　（橋本　周延）
第十四編　最明寺　（鈴木　華村）
第十六編　櫻井驛　（水野　年方）
第十八編　日吉丸　（小峰　苔石）
第二十編　和唐內　（高橋　松亭）
第二十二編　鬼童丸　（富岡　永洗）
第二十四編　宇治川　（武內　桂舟）

すれば、其の分量幾分多く、隨つて彼の價五錢なるに對し、是は六錢となり、其の容積よりすれば寧ろ廉價なるを思はしめた。而して第一編「八咫烏」が、世間待望の裡に世に現れしは、實に明治廿九年十月、「日本昔噺」の完成後滿一ケ月目であつた。作者の勉勵亦想ふべしである。

また「日本昔噺」は、名家の序文と、唱歌とを以て、賑かに其の卷首を飾り、一種の異彩を放たしめたが、「日本お伽噺」にありては、それ等の附屬物を全廢し、とれに代ふるに作者が最も得意とする意匠の下に、各篇それ〴〵其の趣を異にしたる一文を添加し、大に父兄等の感興を深からしめた。次に參考としてこれが二三種を摘記しよう。

題川中島。　彼は月下に老狸の怪を斃し。是は雨中に獄門の首を探る。彼が智、能く雲雀の巢を知れば、是が明、忽ち浪士の術を破る。勝千代、勝つて兜の緒を締め。虎千代、虎更に翼を得たり。君不見、千曲の激浪石に咽ぶの處。甲越の二將鋒を交ふるの時。正に是、双龍九霄に珠を爭ひ。兩虎深山に宍を欲す。壯哉壯絕、快哉快絕。近江冠者。

玄武門。　日本お伽噺編者ヨリ少年諸君ヘノ報告。

一、我ガ日本お伽噺ハ、其第十一編ヲ以テ、此ノ玄武門ヲ占領セリ。
一、我ガ親愛ナル少年諸君ハ、一日モ速ク此ノ書ヲ繙クベシ。
一、此ノ玄武門ヲ繙ク者ハ、我ガ日本お伽噺ノ如何ニ面白ク、且ツ有益ナルヤヲ認ムルト同時

ニ、我ガ日本軍ノ、如何ニ忠誠ニ、且ツ勇猛ナルヤヲ知ルニ餘アラン。

一、又附錄トシテ卷尾ニ添ヘタル降參龍ハ、聊カ寓意ヲ有セルモノナリ、諸君其心シテ讀ムベシ。終リ。

鎭西八郎。之を九州に放てば、則ち九州を併呑し。之を大島に流せば、則ち大島を占領す。風來つて、虎愈々猛に。雲起つて、龍益々靈なり。彼の琉球に漂着して、遂に彼國に王たりしが如き。識者は其妄を笑はんも。予は寧ろその奇を欣ぶものなり。噫鎭西八郎！　眞個神州の快男兒は是！　坂東三郎。

最明寺。お伽氏曰、吾好んで謠曲を誦し、就中彼の「鉢の木」を愛す。此書題して最明寺と云へるも、其記する所は、主として鉢の木の美談にあるもの亦之が爲のみ。見よ、執權の微行、隱士の廉直、雪夜の閑談、爐中の盆栽、鎌倉の勢擅、褒美の新領、曰く粟飯、曰く痩馬、曰く松、曰く梅、曰く櫻、一として詩的ならざるは無く、一として道義的ならざるは無し。彼の東鑑、北條九代記等に此の事の見えざるが爲に、直ちに以て虛誕と爲し、之を史外に排せんとする輩は、共にお伽噺を語るに足らず。日本お伽外史。

朝比奈。一、朝比奈三郎義秀を五月人形の列に編入すること。

建議案理由。

元來五月人形なるものは、專ら尙武を主とするものなり。見よ、彼の神功皇后、武內宿禰と云ひ、八幡太郎と云ひ、加藤淸正と云ひ、金太郎と云ひ、桃太郎と云ひ、若くは彼の鍾馗と云ひ一として武を奬め、勇を鼓するの具たらざるは無し。玆に朝比奈三郎は、其遠征の偉業に於て武內加藤に讓らず、其拔群の勇力に於て、八蟠太郎金太郎に劣らず、將た鬼ヶ島を平らげ、惡魔を挫くの功名に於て、彼の桃太郎、鍾馗等を凌ぐものあり、然るに彼を擧げて是を採らざるは、不公平も亦甚しからずや。此を以て余等同志相謀り、今般此の冒險的快男兒を薦めて、新たに五月人形の列に加へんとす。我尙武國の少年諸君、希くは贊成あらんことを。右提案者。

大江三郎、以下十二萬三千四百五十六名。

小楠公（櫻井驛）。河內之國四條畷。見事拜殿又玉垣。祭神楠正行公。遠近老若弔ニ忠魂一。櫻井驛路聞ニ遺訓一。詞與ニ拜領短刀一尊。吉野山中題ニ辭世一。扉共ニ滿山櫻花一存。二十三歲最期戰。一死奉レ酬君父恩、嗚呼古來金言不レ欺レ我。忠臣出レ從ニ孝子門一。黑樂天。

右の如く或は漢詩を模し、又は狂詩に倣ひ、漢文に似せ、軍の公報に擬し、議會提出の案文に依る等、單に四五種に就いてこれを見るも、夫れ々々の新味を發揮し、技巧縱橫意匠奇警なるを感ぜしめた。卽ちこれを以てたゞ文學者の餘技と見るは當らず、かの現代一部の童話集に於ける、あらずもかなの阿諛的序文に比すれば、勝ること萬々と言はねばならぬ。

次に、本文中の「姨捨山」の一節を摘記して、其の文體の構成、並に作者が觀點の變遷を窺ひ見ようう。

東山道の信濃國に、姨捨山といふお山が御在ます。此處は昔時から月の名所で、今でも十五夜に成りますと、わざ〳〵遠方から、お月見に行く者がある位ですが、全體此のお山を、何故姨捨山と云ふだらうと云ふと、これには仲々面白いお話があるので御在ます。

むかし此の信濃の國に、一人の殿様が御在ました。その殿様は、大の奇麗好で、汚い物は大嫌でしたが、人間でも年を取ると、皺が寄つて汚く成りますから、そんな物は見るのも厭だと仰有つて、少しもお側へ寄せつけず、遂には國中へお布令を出して、お爺さんでもお婆さんでも年を取つた者は、片端から殺してしまふ様に命令ました。すると、丁度その姨捨山――其時分にはまださう云ふ名はありませんでしたけれども――そのお山の近所に、一人の百姓が居りましたが、此の百姓の處にも、一人の阿母さんが御在まして、もう大分年を取つて居りますから矢張り殿様のお布令通り、殺してしまはなければなりません。

けれども百姓は、まことに孝行な男でしたから、なんぼ殿様の仰有る事だと云つて、現在自分の阿母さんを、殺す事はどうしても出來ません、と云つて殺さないで置けば、殿様の方から役人が來て、無理に殺してしまひますから、これは如何したものだらうと、種々に考へました揚句、寧その事此の阿母さんを、何處か人の知れない處へ連れて行つて、そうつと捨てゝ來たら可いだらうと、其處で或晩阿母さんを負ひまして、近所のお山へ登つて參りました。

日本お伽噺表紙の一例

丁度その晩は十五夜で、お盆の様なお月様は、空の中央へお上りになり、其處をキラ〳〵お照らしなさいますから、まるで晝間の様に明るう御在ます。

百姓は阿母さんを負つてエッチラ、オッチラ、山路を登つて參りますと、何と思つたか阿母さんは、息子の脊中に負さりながら、途中の木の枝をビシ〳〵折つては、路へ捨てゝ居りますから、百姓も變に思ひまして、「阿母さん、何してるんです？」と聞きましたが、阿母さんは只笑つて、何とも其の理由を云ひません。

其の中に、絶頂へ參りましたから、百姓は阿母さんを其處へ下して、「さて阿母さん！　貴女も御存じの通り、此度は殿樣のお布令で、貴女を殺さねばならないので御在ますが、私が子の分際で、何してそんな事が出來ましやう、其處で仕方が御在ませんから、今晩貴女を此のお山へ捨てゝ參るので御在ますが、何卒勘忍して下さいまし」と、泣きながら云ひますと、阿母さんは別に怒りもせず、「いゝえ、妾の樣な者はもう年を取つて、何の役にも立たないから、何處にゐたつておんなじ事だ、それよりもお前こそ、まだ年も若いのだから、隨分稼業に精を出して殿樣によく忠義をお仕！　妾の事は決して案じるには及ばないよ」と、素直に聞分けてくれましたので、百姓も安心しまして、「それでは御機嫌宜しう」と、阿母さんを其處に置いて、又お山を下りて參りました。

右の記述を、曩の「日本昔噺」の文體と比較檢討すれば、使用の文字著しく平易になり、且當時流行の一種の讀み癖ある當て字も亦甚だ少くなつたことが知られ、殊に前に「ムいます」とあるのを、此の叢書には、「御在ます」となつたことが注目せられ、又作者の筆意が次第に教育的に變りつつあることも肯かれ、大體に於て一段の進境を見たるは疑ひなき事實である。

兎もあれ「日本お伽噺」は、いはゆる「お伽噺」であるから、よしそれが國史上に著名の事實なるにせよ、强ひて正確なる史實に依ることなく、傳說的の妙味ある條々は、寧ろ進んでこれを取入れ、飽くまでも興味本位に終始したるは、正しく作者の勇斷といふべく、甚だ敬服に値すべきものである。卽ちかゞありてこそ「日本お伽噺」は、何處までも日本お伽噺にして、絶對に日本歷史噺ではなく、隨つて「玉取」「姨捨山」等の如き、當然「日本昔噺」に編入すべき題材をも、躊躇なく取つてこれを加へ、一層興味を多からしめたる點に、其の用意の程も窺はれよう。

なほ博文館は、これと同時に、「日本歷史譚」二十四冊を並行的に出版して、高低兩方面の讀者に滿足を與へた。「日本歷史譚」は、純然たる歷史物語にて、而も「日本お伽噺」と扞格せざる程度に、於て、これが題材を擇び、少年用歷史書に經驗多き大和田建樹に其の執筆を依囑した。今、「日本歷史譚」の總目錄を一瞥すれば、

第一編	日本開闢	（山田　敬中）	第二編	畝傍山	（村田　丹陵）
第三編	三韓征伐	（寺崎　廣業）	第四編	聖德太子	（水野　年方）
第五編	菅公	（梶田　半古）	第六編	九郎判官	（筒井　年峰）
第七編	曾我兄弟	（尾形　月耕）	第八編	惡七兵衞	（水野　年方）
第九編	相模太郎	（山中　古洞）	第十編	楠公	（小林　永興）
第十一編	日蓮	（武內　桂舟）	第十二編	大塔宮	（歌川　國松）
第十三編	豐太閤	（小堀　鞆音）	第十四編	七本槍	（筒井　年峰）

第十五編　關ヶ原（高橋松亭）
第十六編　水門黄門（水野年方）
第十七編　四十七士（中川華舟）
第十八編　平田篤胤（遠藤耕溪）
第十九編　櫻田門外（小峯大羽）
第二十編　七卿落（池田輝方）
第二十一編　彰義隊（小山光方）
第二十二編　城山（宮川春汀）
第二十三編　平壌（永井寸昂）
第二十四編　威海衛（小山光方）

とある如く、神代より日清戰爭に至るまでにこれが材料を求めてゐる。なほ其の序列に二三の前後せるもの有るは、「日本お伽噺」同樣、作畫家の遲速に因るものである。此の叢書は、紙數八十頁內外、本文に四號活字を用ゐ、挿畫は一冊七八個を限り、且つこれが文體も編者一流の穩健なる國文調に依り、相當の讀應へあるものであつた。又其の全部の完成は、「日本お伽噺」よりは稍遲れ、而も其の成績は、因よりそれに遠く及ばなかつた。

曾て出でたる落合小中村合編の「歷史讀本」は、當時として最も斬新に、且つ非常なる名文を以て書かれ、其の妙所には、一重二重等各樣の圈點を附して、好文の讀者の注意を促したものであるが、この「日本歷史譚」はそれと趣を異にし、只年代順に有名なる史實を漁り、其の人物の行蹟、時代の趨向を知らしむることに努め、隨つて最も健全なる讀み物として、高等小學以上の少年を對照としたものである。

日本歷史譚表紙の一例

即ち、幼年兒童は先づ「日本お伽噺」に依つて、國史上の概念と趣味を享け、進んで「日本歷史譚」に、正確なる史實を學ぶを得、兩々相俟ちて、教育上の效果を大ならしめた點は、此の二種の叢書の相雁行して出版せられし理由と見るべく、其の目的は完全に達成せられたものと想はれる。

されば「日本歷史譚」の廣告文にも、「我邦古來より、現今に至るまでの歷史中、最も著名なる事蹟にして、幼少年諸君の忠君愛國の思想を養成せしむるものを選び、平易流暢の筆を以て記述したるものにして、皆是れ金玉の文、幼少年諸君座右の友として、立志の端を開き、兼て歷史を知らしむ云々」と强調してゐる。

第七節　軍歌の流行

少年社會に廣く軍歌の流布を見たのは、明治二十年前後よりのことであらうか。はじめ十四年に伊澤修二の努力に依つて、文部省編輯の小學唱歌（全三冊）、幼稚園唱歌（全一冊）が出て、こゝに漸く音樂教育の普及を期することゝなり、次でそれとは別の目的に於て、其の翌十五年には、外山正一（丶山）、矢田部良吉（尙今）、井上哲次郎（巽軒）が、「新體詩鈔」と題する一卷を編みて、大日本圖書株式會社より發行した。新體詩なる名稱は、此の時より始まつたものかと思はれる。蓋し從來我國にて詩といへば、通例漢詩を意味したもので、特に此の新しき試みに對しては、新體の二字を附加して、それと區別する要があつたのであらう。

「新體詩鈔」は、いはゆる尖端をゆく青年間に、可なりの好評を博した。又これが內容は、テニソン、ロングフエロー等の外國名詩の飜譯を主とし、加ふるに各自の創作を以てしたが、中にも西南の亂の一場面を歌へる「拔刀隊の歌」（吾は官軍我敵は、天地容れざる朝敵ぞ）とか、或はテニソン「英國輕騎兵進擊の歌」（一里半なり一里半、並びて進む一里半）などは、勇壯活潑の調ありて、早く軍隊內に於ても用ゐられしものか、たま〳〵歸休兵士の歌ふがまゝに、見やう見眞似にて、小學校の遠足行進の場合などに、屢々歌はれたものである。

なほ此の他に、「あゝ正成よ正成よ、公の逝去のこの方は、黑雲四方に塞りて」の、楠公を詠じたものとか、或は熊本鎭臺籠城の歌とか、さては熊谷敦盛の哀歌とかゞ、何處からともなく次々に傳播し來り、大阪名古屋邊の小出版社の手に依つて、何々軍歌集と題する小形の冊子が幾種となく出現した。勿論これ等は、只雜然と歌詞を集錄するに止まり、曲譜は附されなかつたものゝ、大部分は七五調であつたから、總て一率の調子で歌はれた。

かくて明治廿七年、日淸戰爭の開始と同時に、國民の敵愾心を昂揚すべく、參謀本部編輯官橫井忠直は、逸早く「討淸軍歌」を發表した。さらでだに士氣旺盛なる少年は、寸時もこれを看過することなく、爲にこの軍歌は、さながら燎原の火の如き勢を以て、都鄙の別なく瀰漫した。尤もこれが歌詞は、必ずしも高邁雄大とは認め難いが、素直に聖戰の目的を述べ、飽くまでも敵軍を膺懲すべき要ある旨を强調せることゝて、却つて俗耳に入り易く、文學的價値は兎もあれ、これこそ眞の意味の軍歌なるやに想はれる。

「討淸軍歌」は、第一膺てや懲らせや、第二北京まで、第三丈夫、第四叡慮の各章より成り、各章長短一ならず、殊更に曲譜を附けなかつたので、かの拔刀隊の歌と同樣、任意我流に依つて歌ひこなしたとは云へ、はじめて軍歌らしい軍歌が、こゝに生れ來つた次第である。

討淸軍歌　第一、膺てや懲らせや。

其一、膺てや懲らせや清國を。　清は御國の讐なるぞ。　東洋平和の讐なるぞ。　伐ちて正しき國とせよ。　御國の權利を妨ぐる。　傲慢無禮の敵を伐て。　東洋平和の義を知らぬ。　蒙昧頑固の敵を伐て。　うてやこらせや清國を。　うてやこらせや清國を。

其二、膺てや懲らせや支那兵を。　御國に刄向ふ支那兵は。　御國の高誼を蔑視する。　政府を助くる弱兵ぞ。　其數如何に多くとも。　概ね烏合の族のみ。　武器の形は揃ふとも。　畫ける美人に異ならず。　豐島沖の海戰に。　彼の軍艦は碎けたり。　成歡驛の陸戰に。　彼の軍隊は敗れたり。　斯くも碎くる軍艦と。　斯くも敗るゝ軍隊は。　たとひ幾萬ありとても。　いかでか我に當るべき。　うてやこらせや支那兵を。　うてやこらせや支那兵を。

第二、北京まで。

支那も昔は聖賢の。　教ありつる國なれど。　代を易へ歳を終る儘に。　次第に開化のあとしざり。　口には中華と誇れども。　心の野蠻は反比例。　其蒙昧を破らずば。　我東洋の夜は明けじ。時とそ來れいざ來れ。　豐榮昇る旭の旗を。　北京の城に押し建てゝ。　無明の闇を照らすべし。　これぞ名に負ふ日の本の。　皇御國の務なる。　皇御軍競ひつゝ。　進めや進め北京まで。

第三、丈　夫

我丈夫は山行かば。　草むす屍海往かば。　水づく骸と昔より。　誓ひて國に盡しけり。　人生僅か五十年。　命惜みて萬代の。　名を汚すべき事やある。　息ある限り進み擊て。　君に捧ぐる命ぞや。　國の譽を增す身ぞや。　敵の矢玉を脊に負ふな。　面を向けて進み往け。　進み〳〵て顧みず。　斃れて止まぬ魂は。　東洋平和の守護神と。　末の代かけて祭られむ。　進めや進め益荒雄よ。　進めや進め益荒雄よ。

第四、叡　慮

夫れ此たびの戰は。　たゞ朝鮮の爲ならず。　東洋前途の安寧を。　圖らせ給ふ叡慮なり。　叡慮の程を畏みて。　此目的を遂ぐる迄。　君の御爲國の爲。　平和の讐を夷げよ。　軍旗の下はすめらぎの。　玉座の前に均しきぞ。　健氣に働き叡慮に。　あづかることを心掛け。　また上官の命令は。　畏き勅語と服從し。　水火の中も彈丸の。　雨や霰も厭ふなよ。　此精神だに撓まずば。　如何なる事か成らざらむ。　黄金の鵄も雲井より。　赫奕く勳功を待つならむ。　平和の基礎を永遠に。　建てゝ勳功を完うし。　叡慮を安んじ奉り。　凱歌を揚げて旋るべし。

以上がその全章である。固より何の新機軸を出せるにはあらねど、天下を風靡したるは事實である。然るに一方、「新體詩鈔」の編者の一人外山〻山は、「我海軍」と題し、特に破格の七八調を以て

勇壯なる一篇を作つた。勿論これにも曲譜はなく、又その調の異なる爲に著しく歌ひ惡くかつたので、少年の口には上らなかつたとはいへ、當時かゝる異調を用ゐたのは珍しく、同じゝ山作の「往け〳〵男兒」と共に、各雜誌面を賑かに飾つた。

我海軍。

朝日に輝く日の丸の旗。　閃く皇國の軍艦共よ。　千島の果より沖繩迄も。　開闘この方異國の敵に。　一度も今迄穢されざりし。　貴き海岸守れや守れ。　寄せ來る敵艦幾百あるも。
千尋の底へと沈めてしまへ。

亞細亞に又なき此島國に。　天の惠で生れし者は。　幼き時より海には出でて。　暴風も恐れず波にも怖ぢず。　我をも攻めんとする者あらば。　武勇を比べん怒濤の中に。　寄せ來る敵艦幾百あるも。　千尋の底へと沈めて見せむ。

風吹き浪立つ嵐の時も。　妻子の爲には沖へと出でて。　命を惜まぬ日本男兒。　何ぞや恐れん敵の軍艦。　浪をば枕に死ぬるも覺悟。　君あり國あり又墳墓あり。　寄せ來る敵艦幾百あるも。　千尋の底へと沈めて見せむ。

弱き船にて大海渡り。　異國の海岸荒して廻り。　鬼神なるぞと呼ばれし者は。　大膽不敵の汝の祖先。　彼より受けたる武勇を以て。　天晴れ守れや我神國を。　寄せ來る敵艦幾百あるも。　千尋の底へと沈めて見せむ。

水雷大砲甲鐵艦を。　自由に扱ふ非凡の手練。　皇國に仇なす敵のあらば。　萬里を隔つる國なりとても。　一々汝の力で懲らし。　國旗の威嚴を天下に示せ。　寄せ來る敵艦幾百あるも。
千尋の底へと沈めてしまへ。

この軍歌は、今度の日新戰爭を歌つたものではないが、其の勇壯快活なことは、かの山田美妙齋の「敵は幾萬」と共に、海陸軍歌の双璧とも見られ、更に「往け〳〵日本男兒」に至りては、一層激越に、一層奇拔に、一層愉快なものであつた。

往け往け日本男兒。　千歲の一遇ぞ。　開闘の昔より。　鍛へたる我の腕。　試すは今の時。
失ふな此機會。　神の敵人の敵。　うち殺せ此腕で。　起て丈夫往け丈夫。　往け〳〵天下に
周く武勇をしめせ。

知らざるか我敵は。　大惡の人非人。　大國とこれ誇り。　小國をこれ侵す。　野蠻をばこれ
極め。　非道をばこれ盡くす。　不義の賊詐僞の賊。　亡ぼせや亡ぼせや。　起て丈夫往け丈
夫。　往け〳〵天下に周く武勇を示せ。

惡むべし我敵の。　惡虐は比類なし。　辜なきを虐殺し。　婦女子をば辱かしむ。　汝には母
なきか。　汝には妻なきか。　泣く姉妹なく子あり。　其聲を聞かざるか。　起て丈夫往け丈

夫。　往け〳〵天下に周く武勇を示せ。

敵軍の兵卒は。　强盜か豺狼か。　彼は我母の敵。　彼は我妻の敵。　我姉妹女子の敵。　神國の清き血を。　敵軍の畜生に。　穢さすること勿れ。　起て丈夫往け丈夫。　往け〳〵天下に周く武勇を示せ。

うちころせ大砲で。　文明の大敵を。　衝き崩せ劍をもて。　蠻族の巢窟を。　東洋の文明を。　進むるは我が力。　擊て〳〵突け〳〵。　君の爲め國の爲め。　起て丈夫往け丈夫。

往け〳〵天下に周く武勇を示せ。

次に、中村秋香の「皇國の旗」も、亦頗る異色あるものであつた。

百千のいかづち、空に轟き。　うづまく煙は、海を覆ふ。　龍は雲に躍りて、稻妻ほとばしり。

虎は風に吠えて、激浪さかまく。　天柱みる〳〵碎け、地軸たちまち拆け。　濟遼逃れ、廣乙敗れ、高陸沈みて操江は降る。　あな心地よや、勇ましや。　皇國の旗の、日の光。　先こそ躍け、豐島の海。

大砲小銃、鬨の聲。　峯を動かし、谷を搖り。　屍は積みて、山をなし。　血はたゞよひて、川を漲らす。　一壘落ち、二壘破れ、三四五六、みな支へず。　風聲鶴唳、逃げ散る敵。　飛鵄流電、追ひ擊つ味方。　あな心地よや、勇しや。　皇國の旗の、日のひかり。　またも躍く成嶽の山。

浪しづかなる、瑞穗の國。　秋津島山、うら〳〵と。　今こそ昇れ、朝日影。　空には翔る、八咫烏。　錦の御旗や、導くらん。　海にはをどる、大小魚。　大御船をか、負ひまつる。

東洋半球、あまぎる雲霧。　黃海萬里、しまける浪風。　これより晴れて、けふより和ぎて。

四百餘州、風おだやかに。　野末山おく、おしなべて。　靡くや旗の、日のひかり。　躍くけしきを、明日こそは見め。

かくて日清戰爭漸く酣となるにつれ、我軍連戰連勝して國威大に揚り、諸家の名作も亦續々現はれたが、中にも兩三年來、每號の「幼年雜誌」に、長篇の史詩を寄せて異彩を添へたる佐々木信綱は、こゝに方面を一轉して、かの黃海々戰に於ける、松島艦の一水兵が、敵彈を受けて瀕死の重傷を蒙り、而も死に至るまで、烈々たる軍人精神を忘れなかつた一美談をとつて一篇の軍歌を草し、「幼年雜誌」に揭載したるが、卽ち「勇敢なる水兵」の原歌である。

この「勇敢なる水兵」は、後に相當の訂正を加へ、且壯快なる曲譜を附して、小學生の愛誦に適せしめた。爾來四十餘年、今日なほ放送軍歌として、屢々世人の耳を打つに見るも、軍歌の力の偉大性を示すものと云ふべきである。

右に揭げる如く、日清戰爭の逸話、美談、戰況を主題とせる新作軍歌の數は、實に夥しいものが

あつた。殊に前記の「勇敢なる水兵」（煙も見えず雲もなく、風も起らず浪たゝず、鏡の如き黄海は、曇りそめたり時の間に）や、或は「豐島の海戰」（雞の林に風たちて、ゆき來の雲の足早し）等は、其の歌詞の優れしのみならず、作曲者の技巧は、能くこれに調和し、こゝに全く軍歌の面目を一新するに至つた。

これを始として、戰爭を歌へる主要の歌曲をば、最も多く最も廣く網羅集成して、「大捷軍歌」（全八冊）が、銀座の樂器店十字屋より發行せられ、遍く全國に行き亘つた。かくて戰後、やゝ年を經て、これ等の日清戰爭軍歌は、殆ど其の影を潜め、やがて大和田建樹の「鐵道唱歌」（汽笛一聲新橋を、はや我汽車は離れたり、愛宕の山に入り殘る、月を旅路の友として）の流行を見ることゝなつた。蓋し戰後の建設時代に、かゝる常識的唱歌の出現するのは、當然の順序といはねばならぬ。

「鐵道唱歌」は、菊半形約三十二頁を一冊とし、先づ最も旅客の多き東海道線を發行し、次で山陽線、東北線と、次々に出版を見たものゝ、やはり東海道線が斷然優位を占め、他の諸線は、多く歌はれずして終つたかと想はれる。聞く所に依れば、これが出版者開成館は、此の唱歌の宣傳弘布に於て、前人未發の一新機軸を出し、先づ簡易なる手風琴を主とする樂隊を組織して、新橋驛を起點とし、東海道を終點の神戸まで、線路に沿うて順次西下させ、各驛々の小學校兒童に對して、其の妙味を鼓吹した。

然るに此の宣傳方法は、果して異常なる效果を奏し、「鐵道唱歌」の評判は、津々浦々にまで轟き渡り、これを知らざるを恥とする有樣であつた。なほ「鐵道唱歌」に就いては、後年線路の延長、驛の增減等により、鐵道省にて新たに懸賞募集し、極めて優れたる作品を得しこともあり、或は高名の作家に依つて、分擔執筆せられしこともあれど、此の種の趣味は、既に時代に遲れしやら、それとも宣傳宜しきを得なかつたか、さして弘布を見ずして終つた。

また此の當時、「鐵道唱歌」の流行に促されて、小中村義象の「世界一週唱歌」（天地も榮ゆる大御代に）、石原和三郎の「電車唱歌」（玉の宮居は丸の內）、大和田建樹の「散歩唱歌」「公園めぐり」等が次々に出で、一時唱歌集全盛の觀を呈したものゝ、而も一として「鐵道唱歌」の壘を摩するは無かつた。

唱歌の作者といへば、大和田建樹、石原和三郎、田村虎藏等の名聲を忘却してはなるまい。卽ち大和田建樹は、ゆく所として佳ならぬはなき健筆家なるが、殊に少年用唱歌にかけて獨特の手腕を有し、其作風最も諧調に、最も平明に、最も流麗を旨とし、また石原和三郎（高師所屬教師）は、やゝ程度低き幼年向の唱歌に長じ、「幼年唱歌」全十冊に、其の才能を縱橫ならしめた。かの「桃から生れた桃太郎」「京の五條の橋の上」の牛若丸、「熊にまたがる金太郎」、さては「舌切雀」、「浦島太郎」、「花咲爺」など、古來有名なる「昔噺」に材料を取り、これを幼年兒童の趣味に適合せしめ、

時には「はツけよいや殘つた」「犬が綱ひくエンヤラヤ」などの、滑稽の文句をすら加味して、短篇中に全體の要素を織込ませたる手腕は、非凡の二字を以て評すべきであらう。

幼少年用の唱歌、即ち大和田建樹、石原和三郎等の作歌に對して、其の作曲を受持てる人の中に最も適者と思はるゝは、田村虎藏であつた。此の人も亦高師附屬に在職して、兒童の趣味嗜好を會得すること深きにや、構想の妙は、能く歌詞を生動させ、歌曲一致の眞諦を發揮した。

蓋し謂ふに、幼少年用唱歌の曲譜は、なほ幼少年用圖書に於ける挿畫の如く、挿畫の巧拙が、文句の死活を左右するに等しきものがあり、これを譬ふれば、大和田石原の兩者は、お伽噺に於ける蓮山人の手腕に似たりといふか、果して然らば田村虎藏は、恰も蓮山人の脇役たる武内桂舟の地位に類するものであらう。要するに軍歌、唱歌の變遷は、正に時代の傾向を支配するものなれば、これが作者は、いかなる短篇零章と雖も、苟くもする所なく、最も周到の用意の下に、指導的立場に於てすべき要あることを、痛感せしめられるのである。

第八節　少年雜誌一括

前來縷述し來つた少年雜誌は、主として「少年園」「少年文武」「小國民」及び「少國民」、「幼年雜誌」並にこれが後身たる「少年世界」の一部分であつた。「少年世界」は、爾後三十餘年の生命を存續せるものなれば、これが消長に關しては、別に項を改めて、更に細說精叙することゝし、玆には以上の記載に漏れたる各種の雜誌を一括して、其の概略を記すことゝする。

理學士吉岡哲太郎が、吉岡書店を創めて、明治文壇の新作家を網羅し、新著百種の題名の下に、續々發刊して好評を博したる一事は、あまりにも世間に有名の事實である。即ち紅葉山人の「風雅娘」「色懺悔」、露伴子の「風流佛」、蓮山人の「いもせ貝」「蓬庭篁村の「掘出し物」の如きも、皆この新著百種中の一篇として、世に送り出されてゐる。

然るにこの吉岡書店が、「新國民」と題する少年雜誌を創刊したのは、實に明治廿六年一月であつた。定價七錢、送料一錢、當時としては可なり見榮ある者とせられ、流石は吉岡書店の計畫と頷かれもした。今、其の發刊の辭を見るに、これ亦頗る堂々たるものである。曰く、

十九世期の文明は、高加索須人種の文明なり、二十世期の開化は、應に蒙古種族の開化なるべし。今や十九世期將に盡きんとして、次期開化の曙光は、業に已に東海に發せり。我神州は東方開化の淵叢なり。我同胞は亞細亞文明の先導者なり、內四千萬の同胞をして天下最惠の民たらしめ、外五億の黃色同族をして文明の恩波に浴せしむるの重任は、夫れ誰にか委せん。少年諸君、諸君は我が新日本を形成する新國民なり、諸君を措て復た他に此重任を委すべきものなし、諸君勉めんか、旭旗其威を東海に輝かし、櫻花其芳を四隣に薰せん。諸君の兩肩は、千鈞

の重任を擔ふと云ふべし。

人生れて男子たる既に幸、此有事の時に當りて生る更に幸、而して此重任を負ふ、大丈夫以て榮とすべし。然れども遠きに行く者必ず其行李を調ふ、任重き者、豈其準備無くして可ならんや。苟くも養ふ所素あり、學ぶ所源非されば、半途挫折し、大業成らざらん。諸君大に修養する所あつて、以て亞細亞新文明の先導者たれ。

本誌は專ら諸君の大業を幇助するを主眼として新陽に當つて現はるゝものなり、其記する所は論あり說あり、史傳、文藻、理科、工藝、苟くも少年に裨益ある者、博採精選、遺る所なし。特に東西先輩の高論卓說に至つては、雲の如く聚り、雨の如く發し、一意大器を養成せんとす請ふ發刊の日を待つて此言の虛ならざるを知了せよ。

と、具さに其の抱負を述べ、恰も今日の東亞共榮圈に屬する亞細亞民族をして、日東文明の惠澤に浴せしめんことを期したるは、其の成功の能否は別問題とするも、先見の明、眞に首肯せざるを得ないものがある。而も此の雜誌は、理想の高きに反比例して、世に迎へらるゝこと薄く、遂に永續を見ずして消滅したるは遺憾であつた。

新作小說の專門出版を目ざせる春陽堂が、「學窓餘談」と稱する相當高級の少年雜誌を創めたるも亦この前後なりしやに記憶する。主筆松島剛は、地理學者として知られたる人、而して「學窓餘談」の內容は、著しく學科偏重の傾きありて、趣味に缺くること夥しく、爲に多く世に流布せずして終り、次で其の後身ともいふべき「今世少年」の出づるに及びて、こゝに初めて有力なる一雜誌を加へ、「少年世界」と並び存して、相當多數の讀者を吸收した。

さて、「近世少年」の編輯主宰者は、別人ならぬ、曩に「少國民」の編輯を辭して、暫く閑地に在りし石井研堂其の人であつた。多年「小國民」に鍛へし編輯技能を巧みに驅使して、新雜誌「近世少年」に當りしことゝて、其の內容外觀共に見るべきもの多く、表紙の寫眞版應用二色刷も優れて麗しく、特に陸海軍將校を煩して軍事上の知識を注入する一方、各專門家の博物理科の記事に重點を置ける一事は、正に往年の「少年文武」を想起せしむるものがあつた。猶ほ此の雜誌には、後年冒險小說の著述に知られ、更に成功雜誌社を經營して相當の成果を收めたる村上濁浪が片腕として力を注いだ。そして「今世少年」の主催の下に、神田青年會館に讀者大會を催して、大にこれが宣傳に力めたるは、蓋し最も新しき試みであつたと云へよう。

然るに將來有望視せられたる「近世少年」が、僅かに兩三年の壽命を保つに過ぎなかつたのは如何。これ恐らく其の發行者の熱意の缺けし結果ではあるまいか。何となれば、春陽堂は、單行小說書の出版にこそ力を注ぎたれ、自家專門外の少年雜誌に至りては、其の經營の手段自ら異なり、煩瑣の事務徒らに多くして、利益これに伴はず、加ふるに他の有力雜誌との競爭に勝ち難く、爲に經

營者をして、匙を投ぜしめしにあらぬか。かゝる例は往々にして有り、「近世少年」も亦此の轍を踏めるものか、否か。

次に「少國民」、及び「少年倶樂部」の發行所と同一系統らしき一社が、「童子軍」なる題下に、菊判型の可憐なる幼年用の雜誌を發行し、卷中には竹坡國觀等の挿畫を多く盛り、「少國民」よりも更に程度を低くして、專ら小學生の要求を充たさんと志し、其の成長を待望せられしも、これは何故か、早くも三號雜誌として終を告げた。

また日本橋松岳堂の發行にかゝる「おもちや文庫」は、考へ物、畫探し、ポンチ畫、笑話、なぞなぞ等、專ら幼年兒童の娯樂方面を狙へるものにて、「このお手遊び文庫には、お子供衆へお慰になるべき面白をかしき事や、奇妙不思議のものが澤山書入れてありますから、日曜日などのおもちやには至極適當の雜誌であります」と、諸雜誌面に絶えず廣告して頻りに宣傳に努めた。毎月一回發行一冊七錢、其の趣向は敢て斬新ではなかつたが、異色ある新雜誌と見られた。

かゝる中に、最も特色ある存在と認められ、專ら農村少年の指導を目ざして現れたのが、本鄕の幼年農業雜誌社の企にかゝる同名の小雜誌であつた。これは菊判三十餘頁、一冊三錢送料五厘、口繪には石版多色刷の花卉、蔬菜、果實、家畜等の正確美麗なる標本畫を加へ、記事は主として農業の進步改良を促し、各種の栽培法を說き、其の一部分を讀者に開放して、各自の研究機關とし、或は種苗購入の代辨を營むなど、甚だ面白き組織に成り、隨つて農村在住の少年を利する所少くなかつた。而してこれが經營及び編輯の任に當れるは、靑柳浩次郎といひ、我國に於ける蜜蜂飼養の先鞭を着け、又箱根山附近に箱根養蜂場を設けて、相當手廣く種蜂の販賣に從事したるは、知る人ぞ知る所であらう。

同じく專門的のものに、麴町益友社の發行にかゝる「少年史海」があつた。此の雜誌は、東西古今の歷史、傳記、逸話等を網羅して、異なる特色を發揮した。卽ち「古今の英雄豪傑の愉快なる眞面目は、眼前に見るべく、學者文人畫士等は、皆几を對して共に語るべし、殊に萬國無比なる我大日本帝國の有樣、外交の有樣等、讀み去り讀み來れば、俯仰感慨、雄心勃々たる者あらん」といひこれが內容をば史箴、史海、史傳、史譚、史唾の欄に分ち、挿畫には、豊公征韓出師の圖、空海の彫佛、正宗鍛刀の圖、北條早雲の像など、正確にして珍稀なる圖樣を選び、久米邦武、足立栗園、加藤咄堂其の他名士の寄稿を集め、或は懸賞の史論をさへ募集して、相當の意氣を示したが、惜しいかな、これも亦永續せずして終つた。

また「新少年」は、江口嘉尙を主筆とし、麴町の新少年社より、日淸戰爭の直後を期して創刊したるもので、其の發刊の主旨に、「日東の大帝國、今や國運伸張の時なり、第二の國民たる少年諸君は、實に偉大の責任を有す、雜誌「新少年」は、諸君の益友として、戰後第一の新年を期し、正に

社會に出でんとす。「新少年」は諸君をして快樂と共に眞と美と善とを修養せしめんことを期するものなり、諸君これを友とし、以て趣味と利益とを享受せよ」と呼號してゐる。

「新少年」は、其の欄を別ちて、新少年(論說)、學術、文學、史傳、地理、文苑、講義、雜錄、文林(投書)、評論の十項目とし、僅々四十餘頁の誌面に、相當賑かなる記事を盛り、挿畫は殆ど稀なるも、口繪の寫眞版風景畫は、殊に鮮明美麗を極め、やゝ往年の「少年園」を彷彿せしむるものがあつた。

此の他、勝田孫彌の主宰せる「海國少年」は、其の名題の如く、海事思想の鼓吹に力むると共に少年の投書に重點を置ける關係にて、一部投書家の歡迎を受け、兩三年に亘りて續刊したるやに記憶する。

また一方、地方に在りては、大阪の「少文林」京都の「兒童教育」、名古屋の「文壇」等が、一般的に認められた。殊に「少文林」は、梅原龜七の發行にかゝり、口繪に簡素なる二色版一葉を挿み本文菊判約四十頁以內、其の過半を少年の投書欄に充て、一冊一錢五厘といふ驚くべき安價を以て提供した。

名古屋の「文壇」は、奧田南陽なる一商賈の手に創められ、全誌悉く少年の詩歌文章を以てし、各地に數百の支部を設けて、原稿及び代金を收納させ、支部長の寫眞を登載するなど、專ら商利商略を考慮して稀に見るの成果を擧げ、遂には其の印刷を東京に於ける一流の活版所に委托し、且加藤咄堂を名義上の主筆に推すなど、頗る目覺しき勢力を有するに至つた。

併しながら此等の地方雜誌は、其の期する所那邊にありしかといふに、東京に於ける一流雜誌に投書するも、容易に揭載の榮を擔ふことを得ざる一部不運なる投書家の意を充たす點に於て、能く其の生命を存續し得たのであるが、而も時勢の推移は、群少投書家の熱意を低め、且雜誌に對する讀者の趣味嗜好も、亦自ら舊時に異なる者あり、爲に投書家を對照とするこれ等の雜誌は、漸次維持の困難を來し、日露戰爭を一期として、殆ど悉く一掃し盡くされたのである。

以上、十數年間の傾向を顧みるに、多年優勢を維持し、自ら雜誌界の覇王を以て任ずる者と雖も一度他に强力なる新雜誌の出現するあり、巧妙なる意匠を以て一大新機軸を出し、且其の宣傳宜しきを致さば、舊套を固守せる者は漸く讀者を奪はれ、遂にはこれが維持經營に苦難を來し、焦慮のあまり新雜誌の亞流に學ぶあり、若しくはこれに盲從し、追隨し、模倣しつゝ、而も刻々消極に墮して、更に一層の悲境を招けるもあり、卽ち「少國民」の消長に徵するも、敢て亦多言を要せざる所である。蓋し新陳代謝は世の常のみ、一切のこと悉く然り、少年雜誌の隆替消長も亦分に漏れず、これが經營編輯の任に當る者は、深く此の一點に注意を拂ひ、大に戒心の要ありと信ずる。

第九節　「少年文集」の創刊

はじめ「學生筆戰場」、「日本之少年」等の讀者は、それ等の合同に依つて生れ出でたる「少年世界」の、全然豫期に反して、甚だしく程度低く、且其の寄書欄の紙數頗る乏しく、恰も「幼年雜誌」の再現に近きものあるを見て、到底誌上に於て自己の才能を舒べ難きを遺憾とし、漸次他の高尚なる投書雜誌を求めてこれに轉移し、以て其の飢足を伸ぶるに至つたことは、亦掩ふべくもなき現象であつた。

これより曩博文館は、「學生筆戰場」、「日本之少年」及び「婦女雜誌」等の讀者投書家を對照として「明治秀才千人文集」と題する一書を編纂すべく企て、大に優賞を懸けて、遍く天下の青少年をして筆才を競はしむることゝし、次の如き宣傳文を各雜誌の本文中に加へて、世間の注目を牽いた。

蓋し此の種の特別懸賞大募集は、本邦未だ曾て其の先例を見ないものである。

文運の盛時、明治昭代に如くものあらんや、江湖の秀才、殊に弊館の幼年雜誌、日本之少年、婦女雜誌、學生筆戰場等の諸誌に寄稿せらるゝもの、日に幾千を以て數ふ、誠に文界の盛觀なり、玆に弊館は、その厚志に答へんが爲、大賞品を掲げて江湖諸君の玉稿を募集し、中に就きて傑作一千篇（一人一文宛）を選定集玉し、以て一大美卷を完成せんと欲す、又此一千篇より優等者百八十名、特別優等者二十名を拔擢して、末段に記するが如き大賞品を贈呈せん、殊に特別優等者の中より、最秀逸者三名の肖像は、石版に刻して之を卷首に掲げ、其名聲を江湖に表彰すべし、是聊か江湖の秀才をして、文壇獨專の技を揮はしめ、兼て文運の盛時に補せんとするもの、滿天下の秀才諸君、夫れ奮勵一番大に玉稿を投じて名を文壇に馳せよ、若し夫れ懸賞の文題、其方法の如きは、悉く明記して左に在るなり、且本書は青年傑作一千篇の外に、冒頭に明治名家文集を掲げ、以て作文の模範と爲すべし、書成るの後は、錦上更に花を添ふるの妙あるべし。

懸賞課題。

漢文（廿四字詰廿行限）西郷隆盛傳。　德川家康論。　送友人之海外留學序。　觀陸軍大演習記。

讀西南戰史。

和文（卅二字詰廿五行限）汽車の旅。　紅葉を觀るの記。　田舍の冬景。　古人苦學の事蹟。

上京する友の餞別に。

尺牘文（廿二字詰廿五行限）商業の爲め洋行する人に贈る文。　軍艦乘組中の友人に贈る文。

東都の近狀を鄕友に報ずる文。　地方の近狀を都友に報ずる文。　洪水の慘狀を報ずる文。

普通文（廿二字詰卅行限）農業補習學校創立の祝辭。　共同圖書館設立趣意書。　書肆開業の廣

告文。　江之島に遊ぶの記。　女子教育論。　歴史論。　電氣の效用を論ず。　海外移住を促すの檄。　尙武思想養成策。　學者と實業家。

文章の撰定者は石川鴻齋、萩野由之、大和田建樹、川崎紫山、佐々木信綱、坪谷水哉、岸上質軒、柳井綱齋、安原健堂、坂下愛柳の十氏とす。

投書家注意。寄稿家は一人に付き一篇に限る、原稿〆切は三月十日までとす。字數は課題の上に記したる行數の以内たるべし。用紙は半紙又は美濃紙に限る。書體は楷書にて明瞭を要す。住所姓名を明記せざるものは沒書とすべし。他の既に世に公になりたる文章を剽竊したるものは寄送する勿れ。原稿郵寄の際は（千人文集原稿）の六字を封筒に明記すべし。

賞與品は左記の如く優等者二百名に圖書（定價大凡二百八拾圓）を贈呈すべし。特別優等の甲乙に當撰したる人へは本館より電報にて通知する時は、直に寫眞一葉を送付あるべし。然るときは千人文集の卷首に其肖像を寫眞石版として掲載すべし。

特別優等者懸賞品計二十名。甲賞一名、資治通鑑（全部七十册定價拾貳圓）、日本文庫（全部十二册定價參圓）、兩書各壹部宛。乙賞二名、康熙字典（全部十二册定價六圓）、徳川十五代史（全部十二册定價參圓）兩書各壹部宛。丙賞十七名、萬國人名辭書（全二册定價參圓）、日本文學史（全一册定價五拾錢）兩書各壹部宛。優等者懸賞品。甲賞三十名教育辭典（全一册定價金壹圓五拾錢）、漢文軌範（全一册定價金四拾錢）兩書各壹部宛。乙賞五十名、國文評釋（全部五册定價金六拾錢）、日本博士全傳（全一册定價金參拾五錢）兩書各壹部宛。丙賞百名、日本文學集覽（全一册定價金五拾錢）、關ヶ原譽凱歌（全一册定價金貳拾錢）兩書各壹部宛。

千人文集豫約方法。正價五拾錢、豫約實價金參拾錢、郵税十六錢、豫約申込期限四月廿五日限本書出版期日四月廿五日、投書〆切期日の三月十日迄に前金相添へ豫約御申込の方は、其申込順にて其姓名を千人文集の卷末に掲ぐべし。拾名以上申合せ御註文の分は一割引とす。

以上の如き空前の大宣傳文が、其の各關係雜誌面の本文二頁に亘り發表せられたことは、當時好文の青少年をして、いかに欽喜雀躍せしめたことであらうか、恐らく寄ると觸ると、此の噂に終始したであらうことは、亦想像に難くない所である。

かくて豫定通に刊行を見たる「千人文集」は、菊判六百四十頁、全部六號活字を充たし、これが總字數實に一百萬と號した。表紙に清洒なる着色石版を利用し、口繪には福澤諭吉、中村正直、加藤弘之三大家の肖像の外、當選作家三名の小照を、いづれも寫眞石版（砂目版）に依つて顯し、以て其の名譽を表彰した。惟ふに當時の出版界には、既に寫眞亞鉛版の應用ありしに拘らず、何故か博文館の圖書雜誌類には、未だこれを採入るゝことなく、專ら寫眞石版の活用に俟つた。

兎もあれ「千人文集」の出版計畫は、博文館としても相當の犧牲を拂へるものと想はれるが、果

して時流に投じ、これが〆切期日までには、數萬通の投書文が集り、一方各選者の精勵に依りて、發行期日も違ふことなく、而も大量製產を以て市を賑はした。

こゝに於てか、矢繼早に、「第二回千人文集」の發行を企圖し、殆ど第一回と同樣の規定の下に、同年七月再びこれを各雜誌上に發表し、大に募集宣傳に努めたところ、今回もまた、第一次募集を凌がんばかりの、非常なる好果を收めて多數の原稿を集め得たのであるが、偶々日清戰爭の勃發により、一時これが出版を中止して待機することゝなり、爲に折角募集したる原稿は、編輯者の机邊に山積したるまゝ、漸く衣魚の棲家に化し去らうとした。

然るに千人文集の寄稿家は素より、舊「學生筆戰場」、「日本之少年」等の讀者は、文集出版に就いて、熱烈なる希望意見を述ぶるあり、此の際に於て、此の要望を無視するは、營業政策上より觀るも、必ずしも當を得たるものとは思はれなかつた。そこで翌明治廿八年七月を期して、前年募集したる千人文集の原稿を基礎とし、これが變體とも見るべき「少年文集」の創刊を企つるに至つた。尤も此の新雜誌は、最初頗る愼重なる態度の下に、特に隔月一回發行と定め、且外裝の如きも、單に標題の文字を記すに止め、寧ろ內容の充實（菊判百六十頁定價拾錢）を第一義として、更も角も世間に問ふや、果然天下の青少年は、さながら大旱の雲霓を望むと言はんか、期せずして此の新雜誌に集り、競つて文章詩歌を送り、爲に「少年文集」に對する投稿は、連日編輯者の机上に山積する盛況を呈したので、これに勵まされて翌二十九年一月より、毎月一回發行に改め、なほ表紙にも相當の意匠を凝らし、口繪寫眞銅版を增加し、玆に有力なる一雜誌として、其の存在を認められたのである。

少年文集表紙（第三卷）

謂ふに博文館が、從來發行せる二十雜誌を統合して「太陽」「少年世界」の二種に局限し、これに向つて全力を傾盡すべく期したるは二十七年々末であつた。然るにそれより二ケ月を出でずして「文藝倶樂部」を出し、今また「少年文集」を加へて、早くもこゝに多種多刊の傾向を生じ來つたものは、蓋し時代の要求の然らしめし所と見るべきであらう。

新生せる「少年文集」の主任者には、上村左川（貞子）を聘して、これを擔當せしめた。左川は土

佐左川村の人、詩文の才に長け、性質溫厚篤實にして、最も適任者と認められた。而も第二卷以後の「少年文集」は、單なる投書專門の雜誌といふばかりでなく、青年文學の指導啓發上に、少なからぬ業績を貽せることは、亦疑ふべき餘地なく、殊に毎年春秋二回に、倍大の秀才文集を增刊し、小說、叙情文、叙事文、新體詩、和歌等をはじめ、あらゆる文學の種目に亘りて、廣く天下の秀才を簡拔し、後年文壇の花形たらしめたるは、卽ち此の雜誌の誇として見逃し難い點である。かの中村春雨(吉藏)、中村星湖等も、亦其の兩三指に折らるゝ人々であつた。

「少年文集」の卷頭には、毎號數頁の文藝時評を載せて、讀者の嚮ふ所を指導した。これには大町桂月、久保天隨、白河鯉洋、武島羽衣など、主として赤門派の新進文學士が、快濶なる筆を揮つて縱橫無碍に社會、文藝、世態の種々相を論破し、其の他諸名家の文話、隨筆、史話、文壇逸話の類を網羅し、相當に讀み應へあるものであつた。

併しながら「少年文集」は、其の本來の性質上これが印刷部數も、非常なる大量には上せ得なかつた。たゞこれを往年の「學生筆戰場」に比すれば、諸家の寄稿も、亦青少年の投書文も、著しき進境を見せ、漸次健全なる發育を遂げ來つた。かくて明治三十一年の頃、我國の中等教育は、異常なる發展を遂げ、全國各地に中學校の新設せらるゝもの多く、卽ち此の機を失せず、「少年文集」並に前年創刊の「外國語學雜誌」を廢して、「中學世界」を創刊すべく決し、前後四年に亘り、廣く青少年の愛讀を受けたる「少年文集」は、玆に其の姿を沒するに至つた。而も「中學世界」の全誌面の過半は、依然投書欄としてこれを存置し、且毎年二回の「秀才文集」も、亦舊時に變ることなくこれを發行して、永く投書家の渴を醫したのである。

なほ、創刊「中學世界」の第一號には、高山樗牛が、特に椽大の筆を揮つて、發行の主旨を書き、本文各學科の記事には、それ〴〵中等教育に經驗多き人々の寄稿を仰ぎ、頗る盛澤山の賑かなる編輯振を見せたので、修學向上の念に燃ゆる地方少年は、さながら暗夜の燈火を望むが如く、靡然としてこれに集り、爲に創刊號は、版を重ぬるの好況を博し得たのである。

また大町桂月は、從來「少年文集」の卷頭に、獨特の快筆を呵して、專ら文藝、社會、世態の論評を試み、天馬空を往くに等しく、縱橫無盡に、遠慮會釋もなく、堂々たる筆陣を張り、「少年文集」の存在を强化したのであるが、「中學世界」の時評にも、亦其の鋭鋒を露呈し、光芒眞に陸離たる觀があつた。

殊に明治三十三年、桂月は、出雲中學の職をして上京したる後、高山樗牛の後を繼ぎて太陽の文藝欄を主宰したるが、何れかと云へば、「中學世界」の學生訓に於て、此の人の眞面目は發輝されたと見るべきであらう。蓋し當年の少年學生が、桂月の所說と文才とに傾倒したることは想像外のものがあつた。

されば「少年世界」の稍幼稚なるに飽き足らぬ少年が、逐次「中學世界」に轉じ去るは、恰も小學校の卒業生が、中等學校に進むに異らず、卽ち小波に依つて先づ文學の門に入れる者が、年を經て桂月を仰ぐに至るは、亦自然の趨勢と見るべく、而も小波桂月共に杉浦天台の稱好塾に出でたる人、殊に桂月の容貌も、何所かに小波に似たる點あり、隨つて天台塾時代には、其の友人間に、「病める小波」を以て、桂月の渾名に呼びしといふ。而して晩年の二者が、筆墨を負うて、遍く全國を行脚する等其の行蹟を同じうしたるも亦一奇とすべきである。以上餘談ながら、記して以て本篇の結とする。

第四編　隆盛時代

第一節　「少年世界」第二卷

第一卷二十四冊を、讀者の喝采裡に終了したる「少年世界」は、明治二十九年第二卷に入ると共に、愈々新面目を發揮し來り、殆ど見違へるばかりに充實、且整頓を示した。蓋し前年度にありては、これが內容にも、記事の高低不同著しく、例へば非常に高尙にして、難解の記事と、甚だしく幼稚なるお伽噺類とが、相交錯してやゝ散漫に、讀者をして其の歸趨に迷はしめる感無くもなかつた。勿論そは此の雜誌が、最初の出發點に於て、高低區々なる各雜誌叢書類を統合して編輯するといふ立前より、かゝる矛盾を生ずるも、實に已むを得ぬことゝ思はれる。

殊に文章を好める讀者より、絕えず程度引上げの要求ありしに拘らず、「少年世界」としては、寧ろ一層低級を行かんことを欲し、努めて其の方針を採りつゝあつた。然るに恰も好し前年秋季より別途に「少年文集」を創刊して、一部讀者の要望に應ずることゝなり、隨つて「少年世界」は、玆に本來の面目を堅持して、完全に其の使命を遂行すべき機運に會し、眞に潑剌たる樣相を呈し來つ

た。蓋し「少年世界」の全卷を通じて、本年度ばかり其の眞面目を發揮したることは、他に多く例を求め難い所であつた。

さて第二卷の「少年世界」は、前年秋季に一變たる表紙意匠を其のまゝに襲用した。從來總ての雜誌が、改年と共に、表紙の意匠圖案を一變する例を破り、「少年世界」が、何故に前年度その儘の表紙に憑れるものか、これが理由は詳かならぬが、恐らく此の圖案を以て、最も理想的の意匠としたる結果ではあるまいか。

而して「少年世界」は、既に昨年下半期より、論說欄を廢止して、大に其の程度を引下げ來つたが、第二年度に入ると共に、其の全般に亘りて、平易明朗を旨として著しく愛着を感ぜしむるに至つた。卽ち「少年文集」の發行に依りて、上層投書家の希望は、もはや十分に達成せられ、隨つて「少年世界」は、何等の遠慮もなく、亦何等の憚る處もなく、專ら獨自の境地を進み得たからである。併し其の後の投書文の中にも、「學生諸子身體を强壯にせよ」群馬野間淸治や、「臺灣移住の急」上田成澤金兵衞等の、堂々たる議論も揭げられてゐた。

右の群馬野間淸治は、別人ならぬ後の講談社々長にて、また成澤金兵衞は玲川と號し、東京朝日新聞に令名を博し、次で中央放送局に轉じて手腕を揮へる人である。なほ此の時代の「少年世界」投稿の選者は、岩佐眉山にて、前記野間淸治の一文に對して、「身體强壯の利說き得て遺憾なし、攝生を愼まざる者をして猛省せしむるに足る」と、溢美の評語を下し、特に文題上に○○を加へて優待してゐる。

當時、投書文の採點法は、最優作に對して二重丸一個を與へ、普通の優等には○二つ、三位を、、、○とし、最下位には、、、を附する內規であつた。故に少年投書家は、努めて二重丸を獲得すべく、懸命の努力を盡したのであるが、事實これを附與せられる者は、每號一二名に限られ、大部分の者は、、、、○に甘んずるの外なかつた。

少年世界第二卷第壹號

次に、本年度「少年世界」の欄別は、幼年部、少女部の二欄に約四十頁を割き、少年部の史傳、尙武、文學、科學、小說、雜錄、學界彙報、時事及び寄書（少年投書）に對して、約六十頁を以てした。卽ち昨年度の論說、遊

覽案内、新刊案内等は、これを全廢したるが爲に、全冊を通じて、著しく新味の横溢せるを感ぜしめた。

また主筆漣山人の新作お伽噺は、毎號幼年部の劈頭を飾ること約八頁、これには武内桂舟の密畫數面を加へて、花實兼備の美觀を呈せしめた。桂舟は、既に此の雜誌に筆を執ること滿一年、今や漣山人の作品に對して、完全に理解する所あり、眞に水魚の關係下に在りと見るべく、隨つて漣山人のお伽噺は、桂舟の挿畫に俟ちて、一段の生色ありしこと、何人も否定し得ない處であらう。今若し假に漣山人の作物を、他の挿畫々家に依囑すとせば、假令如何なる緻密周到の筆を以てするも恐らくはかくまでの效果を擧げ得なかつたであらう。

蓋し桂舟が、かの「こがね丸」以來、專ら童畫の研究に沒頭し、就中動植物の特性を捕捉してこれを人間化することに最も妙を得たるは、漣山人の新作お伽噺に對して、無二の脇役と言ひ得るであらう。即ち此の意味に於て、お伽噺挿畫々家としての桂舟の功績は、斷じて永久に沒すべきではあるまい。

「少年世界」の第二卷一號には、例によつて三種類の讀み物附錄を添加した。そは西村天囚（大阪朝日新聞記者）の「薩摩琵琶歌」と、三宅花圃女史（雪嶺夫人）の少女小說「車の輪」と、南信二の滑稽小說「ありあまる」の三篇であつた。三種三樣の妙味を漂せたる中に、天囚の薩摩琵琶歌は能褒野（日本武尊の事蹟）、金ケ崎（尊良親王の事蹟）、臺灣入（能久親王の事蹟）と、何れも金枝玉葉の皇族が、王事の爲に一命を捧げ給ひし最も悲壯なる場面を歌へるものにて、殊に「臺灣入」の一篇は、廣く天下に愛誦せられ、少年の志氣を皷舞激勵するに與つて力あるものと思はれた。

作者は、「臺灣入」の端書の一節に、「北白川宮の御事は、從者恩地氏の實話、並に各新聞に據りて、「臺灣入」と名け侍りぬ、われ極めて琵琶歌を聽くことを嗜めども、作りしことは此ぞ初めなる。されば其節其調いと〳〵覺束なし、此度鹿兒島より家弓熊助とて、琵琶に巧なるが、東上の途すがら訪れしを引留め、此歌を出して調は如何にと敎を乞ひしに、彈じ且歌ひて、此は文字多し、彼は言葉足らずなど疵をさし示されしより、添へつ削りつ、やう〳〵調も歌らしうなりしかども、猶人の耳を驚かし、心を動かさんやうなし、まして言葉幼く、文字拙きをや云々」と、謙遜して記されてある。

皇（すめらぎ）の。御稜威は四方（よも）に輝きて。淸國遂に和議を請ひ。臺灣島を献上し。合戰こゝに收まれる。
君が御代こそ目出度けれ。臺灣島の土賊ども。隆車にむかふ蟷螂の。斧を揮ふと聞えしかば。
征討の師をぞ遣はさる。近衞兵の精鋭を。率ゐて御渡海めされしは、陸軍中將大勳位。北白川
の宮とて。金枝玉葉の御身なり。
三貂角の御上陸。幕營ありしその跡に。木を削りてぞ記さるゝ。炎熱煆（ぞ）くが如き日に。三貂大

嶺の嶮岨をば。馬にも召さず越え給ひ。大雨頻りに降る時も。濡れにぞ濡れて進まるゝ。士卒これに感激し。病兵さへも立ち上り。命を惜まず進軍す。（中略）、宮は士卒と食を分ち。晝は汗馬に鞭をあげ。夜は荒野に露營して、戎衣の袖に月を宿し。只國の爲め君の爲め。平定の策をめぐらし給ふ。

御痛しや悲しやな。竹の園生の御身にて。あまりに艱苦を積ませられ。遂に御病に罹らせ給ふ。日々に重らせ給ふより。御供の人々打驚き。都へ歸らせ給ふやう。切に御諫め申せども。宮はいつかな聞し召さず。予れ官軍の將として。賊徒平定を見ぬうちに、たとひ臺灣の土になればとて。我のみ士卒を打すてゝ、いかでか都に歸らんと。轎に召されて進ませらる。御臨終の其際に。賊徒平定と聞し召し。宮は莞爾と打笑みて。萬歳と只一聲。叫び給ひしばかりにて。敢なく天に昇り給ふ。傳へ聞く日本武尊の故事を。今目の前に見參らせ。國中の民もつはものも。慟哭せぬはなかりけり。さりながら昨日今日とは思はねど。老少不定に貴賤なし。たゞ人は名とそ惜けれ皆人も。名を千載に殘せかし。

臺北融々仁政成。　皇軍到處湧歡聲。　旭光將被臺南地。　殲彼渠魁安萬生。　と。宮の歌ひ給ひし如く。盛功偉烈後の世に。輝き渡るぞありがたき。北白川の水は逝きて返らねど。月影永く澄み渡り。光は世々に流るらん。光は世々に流るらん。

桂舟の筆意（尙武の虫）

この「臺灣入」は、青少年をして感奮興起せしめ、後年日露戰爭時代に於ける、かの玄海洋の殉難を歌へる「常陸丸」(小中村義象作)と共に、琵琶歌の双璧として後世に傳はるであらう。

さて今年度「少年世界」の卷頭お伽噺は、干支に因める「猿の面」をはじめとし、「玩具合戰」「鬼瓦」「石ツころ」「つくしん坊」「蛙の腹綿」「尙武の虫」「盲目螢」「廻り燈籠」と、次々に妙味溢るゝばかりの新作が揭げられ、これに對する桂舟の挿畫は、愈々潑剌たる生氣を帶び來りて、眞に文畫合一の妙諦を露呈した。なほ玆に「蛙の腹綿」の文體と共に、「尙武の虫」の挿畫を示す。蓋しこれ桂舟が動物畫の技巧を看取するに足るものと信ずるからである。

蛙の腹綿。　冬の寒い中は、緣の下や石垣の間にすつ込んで、グウの音も出なかつた蛙。ボカ〳〵時候が暖かくなつて、世間が大きに春めいて來ましたので、又ノソ〳〵と外へ這ひ出して來ました。

「あゝ何と好い天氣ではないか！　こんな時に穴の中にすつ込んで、グヅ〳〵してるのも氣が利かないから、一番お花見にでも出かけよう」

と、大きなお腹を突き出して、ノソリ〳〵と歩いてゆきますと、丁度路の眞中に、細い煙の立つてるものがありました。

「はてな、往來の眞中で煙を吹いてやがる、面白い奴もあるものだ」

と云ひながら、よく見ますと、これは吸ひかけの卷煙草です。

「何だ、これは卷煙草だな、よく人間が歩行きながら吹かしてゐるが、余程心持の好ささうなものだ、幸ひまだ火も消えずにあるから、どんなものだか乃公も一番吸つて見てやらう」

と、その卷煙草を拾ひまして、一口スウツとやつて見ますと、少し苦いやうで、あんまり甘くはありませんが、反身になつて吹かしてみると、何だか大層氣が利いてゐて、俄かにえらい者に成つたやうな心持がしますから、苦いのを我慢して、スツパ〳〵と煙を吹かしながら、

「何しろ散歩には、此の卷煙草に限るのさ、どうだ、かうして濟まして出かける處を見たら、誰も蛙とは思ふまい」

など〻高慢な貌をして、尙もブラリ〳〵とやつて行きますと、其中に何うしたものだか、胸がムカ〳〵惡くなつて、眼がグラ〳〵と廻つて來て、何とも彼ともいはれない、いやアな心持に成つて來ました。

「此奴は大變だ……ど、どうしたんだらう？　ムム苦しい、ア、せつない」

と、路傍に立ち止まつたまゝ、自分で胸をさすりながら、ウン〳〵云つて苦しがつて居りましたが、その中に考へまして、

「これは何でも、今の煙草に中つたに相違ない、さうだ〳〵、といつは飛んでもない事をやら